(32)

十錢文庫

訂正太平記

東京百華書房發行

始

特102
734

繪本太平記序

余每讀太平記其評於古戰論於將略未嘗不慨然歎其才德兼備義勇絕倫也實可謂千載兵家山計哉抑國自源平相軋以來王綱日弛不軋之臣世掌兵權文武政殆爲墮地於是　後醍醐帝赫斯怒移檄四方招募忠勇　帝在笠置日夢天賚良弼旣覺而物色之公於金剛山之麓因託以興復之任旣而賴公力殲滅凶賊海內歸一億兆臣庶再覩天日中興之業可謂盛矣奈天未厭其亂尊氏又叛邦國分裂前門禦虎後門進狼於是楠公再驅王師征凶賊摧堅拉銳戰如雷霆疾如風雨數使尊氏

2.12.26
內文

心寒胆落而熟察其勢終不可復振則訓將種於櫻驛殉臣節千湊川噫不可痛惜哉正行正儀能繼祖父之志竭力授命以寡擊衆百戰不屈雖終不能剪滅於鯨鯢然始終全其臣節父子三世忠烈如一續　皇統於如縷護三帝於垂亡者楠氏之功可謂偉矣英風義氣至今充塞于霄壤間比之於諸葛武侯雖世遙地異也其事如合符節矣夫成敗者豈以其功不遂而有間然之者乎有志之士讀此書誰不扼腕切齒毛髮直竪耶因題數言以寓感慨之万一云

馬淵安定

訂正太平記一卷目次

卷之首

○編撰來由……一
○題號惑義……四
○劍の卷……五

卷之一

○後醍醐天皇御治世の事付武家繁昌の事……一
○關所停止の事……三
○立后の事付三位殿御局の事……四
○儲王の御事……六

○中宮御産御祈の事 付俊基僞籠居の事……七
○無禮講の事 付玄慧文談の事……八
○賴員回忠の事……一二
○資朝俊基關東下向の事 付御告文の事……一七

卷之二

○南都北嶺行幸の事……一
○僧徒六波羅へ召捕事 付爲明詠歌の事……三
○三人の僧徒關東下向の事……五
○俊基朝臣再關東下向の事……九
○長崎新左衛門尉意見の事 付阿新殿の事……一一
○俊基誅せらるゝ事 付助光が事……二〇

○天下怪異の事……二三
○師賢登山の事 付唐崎濱合戰の事……二六
○持明院殿六波羅へ御幸の事……三〇
○主上臨幸實事に非るに依て山門變儀の事 付紀信が事……三一

卷之三

○主上御夢の事 付楠が事……一
○笠置軍の事 付陶山小見山夜討の事……三
○主上笠置を御沒落の事……一二
○赤坂の城軍の事……一七
○櫻山入道自害の事……二三

巻之四

○笠置四人死罪流刑の事付藤房卿の事……一
○八歳宮御歌の事……七
○一宮并妙法院二品親王の御事……九
○俊明極参内の事……一一
○中宮御嘆の事……一二
○先帝遷幸の事……一三
○備後三郎高徳が事付呉越軍の事……一四

巻之五

○持明院殿御即位の事……一

○宣房卿二君奉公の事……一
○中堂の新常燈消事……三
○相摸入道田樂を弄ぶ事付闘犬の事……四
○時政榎の島に参籠の事……六
○大塔宮熊野落の事……七

巻之六

○民部卿三位局御夢想の事……一
○楠天王寺に出張事付両田高橋并宇都宮が事……三
○正成天王寺の未來記披見の事……一一
○赤松入道圓心に大塔宮の令旨を賜事……一三
○關東の大勢上洛の事……一三

○赤坂合戰の事　付人見本間拔撫の事……一六

卷之七

○吉野城軍の事……一
○千劍破城軍の事……六
○新田義貞に綸旨を賜事……一三
○赤松蜂起の事……一六
○河野謀反の事……一七
○先帝船上臨幸の事……一八
○船上合戰の事……二四

訂正太平記一卷目次終

訂正太平記編撰來由並書號或義

此書は去ぬる建武の比はひ。主上二條の馬場殿にて御遊有。諸卿武臣堂上堂下にあり。新田義貞を召て勅定あり。宣く。文治より以來數百餘年。東夷成を重くして。天下に普し。朝家の廢頽日々に益たり。故に代々の天子も彼を亡し。帝德を四海に照さんと。叡慮を回されしか共。事成ずして却て皇居を遠島に遷され賜ひ。又は勢微にして默し給けるに。朕代に至て。逆臣忽に滅て。王法舊の如し。且は後代の爲。且は當時の顯種共成べし。然らば義貞が鎌倉を攻し爲躰意氏が六波羅を滅せし有樣。記し置せばやと仰らる。時に義貞天子の御德。普天の下に照さゞらんに於ては。臣等何ぞ。尺寸の謀を以て。大敵の勇を摧侍らんやと。勅答申さる。日數經て後。万里小路藤房卿勅を承て。獨清軒北畠玄慧に仰す。玄慧義貞に會して。鎌倉の滅亡を記す。次に尊氏直義に會して。彼隱謀並に六波羅の滅亡を記す。今の九十の両卷是なり。主上叡感有て玄慧を三品の僧都にあさる時に天下の武臣是を傳聞て。元弘に有功の者は。我功の隱れて顯れざる事を恨。功なき者は。是を羨しとす。是に依て重て玄慧に命を下して。先正成が武功忠烈を記せしめ給。又玄慧藤房卿に會して。笠置の戰ひ上御一人より。竹園攝祿臣下六位に至る迄。東夷の爲に苦みし給事を記す。三四五六の卷是なり。爰に大塔尊雲法親王。妙法院法親王等。苦み給し

御事。中就大塔宮。南都。吉野。十津川にて。虎口の難を御遁れ有し爲躰迄。悉く玄慧に命じて是を記せしめ給又赤松が戰功も同き作者なり。但し律師則祐に會談せり。今の七八の兩卷なり。初二卷は。出門の夜賢法印。玄慧に會談して是を記す。都合十卷を。或は義貞の鎌倉物語と云。或は曾氏六波羅物語と謂。或は赤松合戰記と稱す。中にも正成一人は其名を謂ず。此題號不定なればとて。玄慧。智教。教圓等に命じ給ふ。時に三僧武士等に會して。物語の前後を問尋し事跡の虛實を訂正して。是を再記す書成て後師錬叟虎關をして。序を書しめ給へり。又は建武の再亂に。土上山門に坐せし比。大友小貳が行跡。五大院右衛門が事跡。後代の咄の爲にとて。山門の護正院に命じて。是を記せしむ。正成が忠戰義死。智仁勇の三德を安備せりと。主上感感の餘り。善智坊法印に仰て。是を記せらる。十一十六の謂なり。百岸坊僧正顯信。義貞の奏狀。曾氏の隱謀。直義の惡道を記す十三十四の卷なり。時に義貞驚坂箱根の合戰を自記す。共に是十四の卷なり。數年を經て。南帝の正平の比。備後三郎高德入道が。吉野に有しに。新帝の勅に依て京中の合戰曾氏の敗北を記す。十五卷也。內多々巨濱の合戰書榮是を記す。又十二の卷。直義玄慧に命じて是を記す。時に直義玄慧に語て云。此書十卷以後い悉く燒失すべきありと云々。玄慧の云。然るべからず。後代の人又燒失の咎を記せん。只願くば公の政道の正からん事をと謂れしに由て。直義書

書を燒すと云々。而して元弘の政事の正からざる事を記す。十二十七十八廿三の卷等あり。又高德入道義淸越前の合戰義助敗北幷に曾氏直義が一代の惡逆を記す。是廿二の卷なりしを。後に武州入道無念の事に思て。一天下を窺鑒して尋求め是を燒失せるとなり。當代在所の廿二の卷い。廿三より集め出して。廿二と號すあり。又和州多武峯にして。此書を記する事十二卷也。作者六人所謂教圓上人。義淸法師。壽榮法師。北畠顯成。證意法眼。日野入道蓮悉等あり。而て十一の卷よふり以後。虛實を正して次第を連ぬとあり」永德壬戌山名氏淸。南方に發向して。歸京の後。義用義可等に仰て。此書を記する事五卷都合三十九卷なり。此後此書を記する者あし。年久經て。横川の僧天界坊能隣之を改て四十卷とす。然るに應永の比。明人來朝す。明の官人明尹此書を懇望す。時に將軍義持公諸山の碩學に仰て。是を漢字に改め。淸書して明人に渡すと云々。餘は後記に渡りて詳かあるべし

訂正太平記題號之或義

右何も出三理盡抄

凡此書名を改る事四度初に云。安危來由記といふ。心は序語に約してなり。一部の都合皆安危來由を記して。後昆の誡とす。此故に謂あり。二つには國家治亂記と號す。此書を覽する時は。大あるは國の治亂を思量し。小あるは家の治亂を思量せん。此故に謂なり。三には國家太平記と號す。言は前に同じ。太平と云ふは當時の祝あり。南朝の正平の作者如是稱す。又太平の號は。延文の比改て號す共云。四にハ天下太平記と號す。應安戊申細川武藏入道常久申す。此書の名。南朝の治亂等の號を捨當代を賀し奉らんに於は。何ぞ國家と謂むや。同くは天下太平ところ。有まほしけれと申されしより。時の學才の人等。天下太平記と號すあり。其比京童の云く天下太平記と改しより。南朝の威を失ひ。天下の朝敵。自から亡て。實に天下太平に成しと云。拙哉。天下の治亂何ぞ此書の名の善惡によらんや。眞實は武藏入道聖賢の道を修し。無欲に天下の政道と相量。自を思ふ心なき故に。四海日々に隨て豐に成しと云々已上

訂正太平記劍卷

沛公は貴坊が屬鏤をつたへて。白蛇の靈を切て。天帝名と出る事を得たり。始皇は荊軻が匕首を取て。燕使の命を斷て。聖明の運の出る事を全す。凡白髮黃鐵の德。弓馬矢石の勢ひ。五戈の計事。四義の品。みな是國を治るの術。位を保つの基あり。尤も賞翫せらるべきものハ。刀劍の類ひなり。抑日本に多くつるぎ有。所謂寶劍。十握の劍。髭切膝丸。小鍛なり。髭切膝丸と申。二ッの劍のゆらいを尋れば。人王五十六代の帝をば。清和天皇とぞ申ける。皇子あまたましなす。中にも第六の皇子をば。貞純親王。御子經基六孫王。其嫡子多田滿仲上野守。始て源氏の姓を賜ふ。天下を守護すべきの由勅宣をぞ蒙りてけり。滿仲宣ひけるは天下をまもるべきものは。よき大刀をもたでは叶はじとて。鐵をあつめ。鍛冶を召し。太刀を作らせて見給ふに。心につく太刀なかりけり。いかゞすべきと思はれける處に。或もの申やう。筑前の國三笠の郡。土山と云處にこそ。異朝より鐵の細工渡つて。數年にあるる。彼を召るべく候やらんと申ければ。則ち彼を都に召上せ。太刀を多く作らせて見給へ共。一ッも心につかず。空しく下るべきにてぞ有ける。かのかぢ思ひけるは。我つくしより。遙々と召るゝかひもなく。罷りくだりなば。細工の名を失はんこそ心うけれ。昔より今に至る迄。佛神に申事の叶へばこそ。きたうと云事も有ら

めとて。八幡宮に詣でつゝ。歸命頂禮八幡大ぼさつ。願はくは、心に叶ふ劍。作り出させてあたへ給へ。左樣ならば。大ぼさつの御器と罷り成べしと。願書を進らせて。至誠心にぞ祈りける。七日に滿ずる夜の御じげんに云。汝が申處不便あり。とく罷り出て。六十日の間鐵を釗て作れ。最上の劍二つあたふべしと。分明にむさう有ければ。細工悅で社頭を出にけり。其後よく金をわかし。釗撰て。六十日に作りたり。寔最上の劍二つ作り出す。長さ二尺七寸。彼漢の高祖の。三尺の劍共云つべし滿仲大に悅で二の劍にて。有罪の者を切せて見給ふに。一の劍は鬚をくはへて切てければ。鬚切と名付たり一をば膝を加て切てければ。膝丸とぞ號しける。滿仲鬚切膝丸。二つの劍を持て。天下をゑゆごし給ひけるにおびかぬ草木もおかりけり。この嬉子攝津守頼光の代となりて。ふしぎ樣々多かりけり。中にも一のふしぎには。天下に人多く失する事有り。死しても失ず。ごしきに連りて。集りゐたる中に。立共見へず。出る共見へずして。かき消やうにぞ失にける。行末もしらず。有所も聞ず有ければ。怖しと云計なし。上一人より下万民に至る迄。騷ぎ恐るゝ事申に及ばず。是をくはしく尋れば。さがの天皇の御宇に。或公卿の娘あまりに嫉妬ふかくして。きぶねの社に詣でつゝ。七日籠て申樣。歸命頂禮きぶね大明神。願わくは。七日籠りたる驗には。我を生ながら鬼神になしてたび給へ。炬しと思つる女。取殺さんとぞ祈りける。

明神哀れとや覺しけん誠に申處不便なり。實に鬼に成たくは。姿を改て。うぢの河せに行て三七日漬れとじげん有。女房悅で都に歸り。人なき所にたて籠て長なる髮をば五つに分。五つの角にぞ作りける。顏には朱をさし身には丹をぬり。鐵輪を戴て三つの足にゝ松をとぼし。續松を持へて。兩方に火を付て。口にくゝへつゝ。夜更人靜て後。大和大路へ走出。南をさして行ければ。頭より五つの火もへあがり。眉ふとく。かねぐろにて。面赤く身もあかければ。さながら鬼形に異あらず是を見る人。肝魂を失ひ。倒ふし。死せずと云事おかりけり。かくのごとくして。うぢの川瀨に行て三七日漬りければ。きぶねの社の計ひにて。生ながら鬼と成ぬ。うぢの橋姫とは是おるべし。扨ねたしと思ふ女。其ゆかう。我をすさみし男の親類。境界上下をもわらまず。男女をもきらはず。思ふ樣にぞ取失ふ。男をとらんとては女に變じ。女をとらんとては。男に變じて人を取。京中の貴賤申の時よりさがりに成ぬれば人をも入ず出る事もなし。門を閉てぞ侍りける。其頃攝津守頼光の內に。綱。金時。貞道。末武とて。四天王を仕はれけり。中にも綱は。四天王の隨一おり。むさしの國。美たと云所にて生れたりければ。美田の源次とぞ申ける。一條大宮なる所に。頼光聊か用事有ければ。綱を使者につかはさる。夜陰に及びければ。鬚切をはかせ。馬にのせてぞ遣しける。彼に行て。尋ね問答して歸りけるに、一條堀川の戾橋を渡りける時。

東のつめに。齡廿あまりと見へたる女の。膚い雪のごとくにて。誠に姿閑なりけるが。紅梅の打きせに。守りかけ。佩帶の袖に經持て人もぐせず只獨り南へ向てゞ行ける。綱は橋の西つめを過けるを。はた〳〵と叩つゝ。貳いづちへおはする人ゞ。我らは五條わたりに侍り。頻りに夜更て恐ろし。送りて給なんやと。馴々しげに申ければ。綱い急ぎ馬よりとびをり御馬に召れ候へと云ければ。悅ばしくこそと云間に。綱は近く歩み寄て。女房を搔いだきて。馬にうち乘て。堀川の東の詰を。南の方へ行けるに。正親町へ。今一二段が程打も出ぬ所にて。此女房後へ見向て申けるは。誠には五條わたりには。差たる用も候はず。我すむ所は。都の外にて候なり。それ迄送りて給なんやと申ければ。承はり候ぬ。何く迄もおはします所へ。送り參せ候べしと云を聞て。頓て嚴しかりし姿をかへて。恐ろしげなる鬼となりて。いざ我行所は。あたご山ぞと云まゝに。綱が髻をつかんで提げ。乾方へぞ飛行ける。綱は少しも騷がず。件の髻切を颯とはき。空さまに。鬼が手をふつと切。綱は北野の社の。廻廊の。屋の上にぞうとおつ。鬼は手を切られながら。あたごへぞ光り行。扨綱は。廻廊より跳りをりて。髻に付たる。鬼が手をとりて見れば。雪の貌は引かへて。黑き事限りなし。白毛際なく生しげりて銀の針の立たるがごとくなり。これを持て參りたりければ。賴光大に驚き給ひ。不思議の事ありと思ひ給ひ。晴明を召とて。播磨守安部

の晴明を召て。いかゝ有べしと問ければ。綱い七日の暇を給つて慎むべし。鬼が手をばよく〳〵對じ置給ふべし。祈禱には。仁王經を講讀せらるべしと申ければ。其まゝにぞ行はれける。已に六日と申ける誰彼時に。綱が宿所の門を叩く。何くよりぞと尋れば。綱が養母。渡邊に有けるが。上りたりとぞ答へける。彼養母と申は。綱が爲には伯母なり。人していはゝ。惡き樣に心得給ふ事もやとて。門の際迄立出て。適々の御上りにて候へ共。七日の物いみにて候が。今日は六日に成ぬ。明日計は何なる事候とも叶ふまじ。宿を召れ候べし。明後日にありなば。入參らせ候べしと申ければ。母は是を聞て醒々と打泣て力及ばぬ事どもあり。去ながら和殿を母が生落しゝより。請とりて養ひ育し心ざし。いか計とか思ふらん。夜とてやすくいねもせず。濡たる所に我は臥し。乾ける所に和殿を置。四つや五つに成迄は。荒き風にもあてじとして。いつか我子の成長して。人に勝れてよからん事を。見ばや聞ばやと思ひつゝ。夜晝願しかい有て。攝津守殿の御内には。美田の源次と云つれば。肩をならぶる者もなし。上にも下にも譽られぬれば。悅びとのみ社思ひつれ。都鄙遼遠の路なれば常に上る事もなし。見ばやみへばやと。こひしと思ふこそ。親子の中の歎きなれ。此程打つゝき。夢みもわしく侍れば。覺束なく思はれて。渡邊より上りたれども。門の中へも入られず。觀とも思いれぬ我身の子と戀しき社墓なけれ。綱は道理に責られて。門を

開て入にけり。母は悦びにて。越方行末の物語し。扨七日の物いみと云つるは。何事にて有けるぞと問ければ。隠すべき事ならねば。有のまゝにぞ語りける。母これを聞扨は重き慎みにて有けるぞや。さはどの事ともしらず。恨みけるこそ悔しけれ。去ながら親は守りにて有ければ。別の事はよもあらじ。鬼の手といふなるはいかなる物にて有やらん。見ばやとこそ申されけれ。綱答て云。やすい事にて候へ共。固く封じて侍れば。七日過では叶まじ。明日暮て候はゞ。見參に入候べし。母の云よし〳〵扨は見ずとても。事のかぐべき事ならず。我は又此暁は。夜をこめて下るべしと。恨顔にみへければ。封じたりつる鬼の手を取出し、養母の前にぞ置たりける。母打かへし〳〵是をみて。穴怖ろしや。鬼の手と云物はかゝる物にて有けるやと云て。さし置やうにて立様に。是は我手なれば。取ぞよと云儘に恐しげなる鬼となつて。空に上てはふの下をけ破て、虚に光て失にけり。それよりして。わたなべ黨の屋造にハ。破風を立ず。四阿屋造にするとかや。綱は鬼に手を取かへされて七日の齋破るといへ共。仁王經の力に由て別の仔細あかりけり。此鬚切をば鬼の手切て後。鬼丸と改名す。同年の夏の頃。頼光瘧病を仕出し。いかに落せどもおちず。後には毎日に起けり。發りぬれば。頭いたく身はとをり。天にもつかず地にも付ず。中にうかれて惱されけり。かやうに逼迫する事三十餘日にぞ及びける。有時又大事に發りて少し減に付

て。醒方になりければ。四天王の者共。看病しけるも。皆閑所に入て休みけり。頼光少し夜更方の事なれば。幽なる燈の影より。長七尺計なる法師。する〳〵とあゆみ寄て。繩をさばきて頼光に付んとす。頼光是に驚てがはと起何者なれば頼光に繩を付んとするぞ。にくさやつかなとて。枕に立て置れたる膝丸をつ取てはたと切。四天王ども聞付て。我も〳〵と走より。何事にて候と申ければ。云か〳〵とぞ宣ひける。燈臺の下を見ければ血こぼれたり。手々に火を燈てみれば。妻戸よりすの子へ血こぼれけり是を追行程に北野の後に大なる。塚あり。彼塚へ入たりければ。則塚を掘くづして見る程に。四尺計なる山蜘蛛にてぞ有ける搦て參りたりければ。頼光安からざる事哉。是程の奴に誑かされて。三十餘日惱さるゝこそふしぎなれ。大路に晒すべしとて。鐵の串にさし。かはらに立てぞ置ける。是より膝丸をば。蜘蛛切とぞ號しける頼光の代より。出羽のかみ頼基の手にわたる。天喜五年頼光の弟。河内守頼信の嫡子伊豫守頼義奥州の住人栗屋川の次郎。安部の貞任。鳥海の三郎。同宗任兄弟。ひほんの由其聞へ有ければ。彼討手に下さるゝ時。兼陸奥守になし。源氏重代の劔。鬼丸蛛蜘切頼基が許に有けるを。宣旨にて召出され。頼義朝臣に給てけり。頼基の云。此劔は祖父多田滿仲より。三代相傳の寶なり。嫡々相承の劔にて候へば爭でか身を放し候べきと申けれ共。御用をければ。力及はず出しけゝ。頼義是を給て。奥

州に下向し。九ケ年が間戰ひつゝ。終に軍に打かち。貞任をば首を取。宗任をば生捕て上洛す。貞任が長九尺五寸。宗任は遥に劣りて。六尺四寸ぞ有ける。頼義の宿所に有けるを卿相雲客達あつまの夷さこそはおかしく侍らめ。いざ行て笑はんとて。梅花を一枝手折て宗任是はいかにとゝひければ。宗任とりあへず

我國の梅の花とゝみたれども大宮人はいかゞいふらん

と申たりければ。皆しらけてぞ歸りける。扨宗任はつくしへ流されたりけるが。子孫繁昌して。今に有。松浦黨とは是なり。鬼丸蜘蛛切二の劔をば頼義朝臣より。嫡子八幡太郎義家に讓けり。爰に出羽國山北金澤の城に楯籠たる。武衡宗衡むほんの由聞へければ。國中の亂を靜めん爲に。義家はせ向ふ。武き兵なりければ。さうなく落ず。三箇年に滅びにけり。頼義の九ケ年の戰ひと。義家の三年の軍を合て。十二年の合戰といひなり。何も劔の德に依て。敵をば取てけり。義家子共おほく有けれ共。嫡子つしまの守義親は。出雲國にてむほんの聞へ有に依て。因幡守正盛を追討の使に下されて。彼國にて討れぬ。二男河内判官義忠。三男式部太輔義國。これらにも。讓らず。四男六條判官爲義讓り得たり。十四の年。伯父美濃の守義治むほんの由風聞す。爲義討手にぞ下りける。義治は。甥の爲義向ふと聞て。髻切降に出て上洛す。是も劔の用とぞ覺へ

ける。又十八歳にて。南都の衆徒朝家を恨み奉て。數万人の大勢京へ攻上りしを。爲義十六騎にて。くり子山に馳むかひ追返す。同じく劔の用とぞ聞へける。其時山法師一首の狂歌をぞ立たりける

なら法師栗子山迄しぶりきていが物のぐをむきぞ取るゝ

と讀たりければ。奈良法師安からぬ事にして。いかにも此答へ讀返さんと蜘蛛處に。阿波の上座と云者に料られて。山法師禁獄せらる。奈良法師くり子山の答へにぞよみたりける

ひる法師あはの上座に料れて緊く獄につかれける哉

とぞ讀たりける。扨爲義は。十四にて。伯父を虜にせし勸賞に。左近將監になされ十八にて南都の衆徒を防きし恩忠に。兵衛尉になさる。廿八にて左衛門。卅九にて撿非遣使になる。其後陸奥を望み申ければ。爲義がためには不吉なり。祖父頼義は九かねんの合戰し。親父義家は。三ケ年の軍をす。猶意趣殘る國なりけり。爲義國司に成なば。又國の狼籍出來せん。他國を給はらんと仰有ければ。先祖の國を給はらずは。受領しても何かせんとて。終に受領せざりけり。爲義は。腹々に男女四十六人有。熊野にも女房有。娘をばたつたはらの女房とぞ申ける。白河院熊野御參詣の時。此山には別當有やと御尋ありけるに。未候はずと申ければ。爭でかさる事有べき。

別當の機を尋らる。爰にうゐ黨すゝき黨と申は。權現摩伽陀國より。我朝へ飛渡り給し時。左孔の翅と成て。渡りたりし者なり。是に由て熊野とゞ我まゝに官領して。又人おくゞ振舞ける。折しも。權現の御前に。花備て籠たる。山伏を。別當になるべき由。鈴木計らひ申ければ。我身其器量不足とて。敎眞別當の始なり。別當は重代すべき者なり。聖にて。叶ふべからず。妻を合せよとて。誰かは有べきと尋るに。爲義が娘。たつたはらの女房よかるべしとて。敎眞にぞ合せける。爲義傳へ聞て云。爲義が舅には源平兩家の間に。弓箭に携て秀たらん者をこそと思けるに。諸寺諸山の別當執行と云事はよきも有。あしきも有。行德群に拔ぬれば。左樣の官にも職にもなると社聞。行末もしらぬものに。押へて合すらんこそふしぎなれとて。音信不通し。不幸の娘にてぞ有ける。然るに爲義が傳へ持たる二の劍。終夜吼。鬼切はへたる聲は獅子の聲に似たり。蜘切をば吼丸とぞ號しける。かゝる吼たる聲は蛇の泣に似たり。故に鬼丸をば獅子の子と改名し。かゝる處に。源平たて分て合戰有べきよし聞へけり。洛中騷動なゝめならず。いかなる遠國深山の奥迄も。聞ずと云事なかりけり。敎眞別當是を聞て。我身は不孝の者なれ共。かゝらん時。力をも合て社不孝もゆるさるべけれとて。常住客僧。山內の惡黨等上下を嫌はず催し立て。一万餘騎の勢にて都に上りけり。人々是をみて。是い何ある人やらん和泉。紀伊國の間には。おやうの

合有べし共覺へずとて。委しく是を尋れば。爲義の聟。熊野の別當敎眞なり。勇の方人のために上りたる由云ければ。爲義も是を聞て。氏種姓はさらぬ共。甲斐〳〵敬ものありけり。何ある人の一門ぞと尋れば。實方中將の末孫ありと申ければ。扨は爲義が下すべき人には非ざりけり。今迄對面せざりける社愚なれ迚。請じ寄。始て對面す。志の餘りにや。重代一具の劍を取分て。吼丸をば。聟引出物にぞしたりける。敎眞別當此劍を得て。是は源氏重代の劍なり。敎眞が持べきに非ずとて。權現に參らせけり。さて爲義一具に持たりける劍を一つ失ふて。片手のなきやうに覺へければ。播磨國よりよき鍛冶を召上せ獅子の子を本にして。少しも違へず造らる。最上の劍なりければ。悦び給ふ事限りなし。日貫に烏を作れば。小烏とぞ名けたる。爲義は獅子の子。小烏とて。一具して秘藏しけるが。今の小烏二分計長かりけり。有時二ッの劍を拔て。障子に寄懸て置れたりけるが人もさはらぬに。からくゝと倒るゝ音きこへければ。いかに劍ころ轉び ぬれ損じやしつらん迚。取寄て見給へば。日來は二分計長しと思ひつる小烏が。獅子の子と同じ樣にぞ成にける。ふしぎ哉さるべき樣や有。截たるか折たるかとて。先をみれ共。截も折れもせざりけり。怪て柄を見るに。日貫折てなかりけり。拔て是をみれば。柄の中二分計新しく切て。日貫を突拔て。さがりたりと見たり。是は一定獅子の子が。切たるよと心得て。獅子の子を改名

して。友切と名けたり。其後我年闌齢衰へたり。今は劔持ても何かせんとて。彼友切小烏二の劔を。嫡子下野守義朝にぞ讓られける。かゝりし程に。保元の合戰出來り。義朝は内裏に召れ。爲義は院の御所へ召れ。子共六人相具して院の御所へぞ參りけり。保元の年。七月十一日寅の刻に軍始て。辰の刻には。軍はてゝけり。只三時に軍破て。新院まけ給ふ。其時爲義い天台山に馳上り。出家し義法房とぞ名けにける。子あればよも見放じとて。義朝が許へ下りたりけれ共。朝敵あれば叶はず。頓て義朝承て切にしこそむざんなれ。義朝保元の勸賞には。左馬頭に成にけり。舍弟六人召出され。五人は切れぬ。爲朝一人はおちたりけるが。程をへて。九州田根と云所より召出されて伊豆國へ流されけり。終には是も切れにけり。子共四人も切れぬ。義朝計殘りたるけれ共。平治元年に。惡右衛門務信頼に語らはれて。謀反を起し。子共多く持たりしかども。三男右兵衛佐頼朝とて。十三に成けるを末代の大將とや見給けん。殊に亂ばれ。生絹と云鎧をきせ。友切と云劔帶せ。先に打立けり。されば共朝敵あればにや。軍に打負て。義朝い都を落て西近江比良と云所に留て。終夜八幡大菩薩をぞ恨み奉りける。昔は此劔を以て。敵を攻しに。靡かぬ草木もなかりしに。世の末に成て。劔の精も失ぬるにや。大菩薩も捨させ給ひたるか。是程に軍にもろく負べしと耐覺へね。義朝が祖父義家い。八幡大菩薩の御子として。八幡太

郎と名を得たり。七代迄は爭か捨給べき。義朝迄は三代なりとて。まどろみたる御示現に云。我汝を捨るに非ず。持所の友切と云劔は。滿仲が時俄に與へし劔なり。髻切膝丸とて。始の任にて有ば。劔の用も失まじきに。次第に名を付替るに依て。劔の精も弱きなり。殊更友切と云名を付られて。敵をば順へずして。友切となりたるなり。保元に爲義がきられ。子共皆滅ぼされしも。友切と云名の故なり今般軍に負しも。友切と云劔の名の科なれば。全く我を恨むべからず。昔の名に返したらば。末は有べしと。分明に御示現有ければ。義朝覺て誠に淺ましくぞ覺にける。此事を承はるに。惡く付られたりける物かな。扨い昔に返すべしとて。髻切とぞなされにける。扨比良を立て。高島を通りけるに。頼朝馬眠して父に追後れたり。其邊の者共七八十人馳合て虜らんとしたりけるに。頼朝打驚て髻切を拔て打拂ひければ。疵を蒙むるものも有。又死する者も多かりけり。髻切に返る驗とぞ覺にける。其夜は鹽津の丘司が許に宿して。夜半計に道しるべを得て東江州へうつりにけり。藤川不破の關も塞りて。京より討手下ると聞へければ。義朝は雪の山に分入にけり。頼朝は稚き身なれば。大雪を分がたくて。山口に留りにけり。惡源太は獨り離れて。飛驒國へ落ぬ。義朝は朝長計を相具して。美濃國青墓の遊君が許に留て。浦つたひして。尾張の國野間の内海の住人。長田の庄司忠致が宿にして。平治二年正月一日早朝に主從二人討れに

けり。忠致は義朝の郎從。正清が舅也。相傳の主と聟とを討て。世にあらんと思ふこそうたてけれ。忠致は主從二人の頸と小烏と云太刀とをば。都に上せ平家の見參に入てけり。兵衛佐頼朝は山口に案られたりしが。東近江。草野の庄司と云ものに扶られおはしまし。天井にかくれゐたりし程に。頼朝少なけれ共賢き人なりければ。熟案じけるは。我かくれゐて有共。始終に顯はれなん。身こそい扨果つ共。源氏重代の劔を。平家にとられん事こそ心うけれ。いかにしてか隱すべきと思つゝ。庄司に語て云。此日來養はれ奉るも。前世の事にこそ侍らめ。今は一向親方と頼むなり。尾張の熱田の大宮司は。頼朝が爲には母かたの祖父なり。其迄此太刀を持て下り申さるべき樣は。頼朝はえかゝの所にふかく忍びて候へ共。終には遁るべきにあらず。縱ひ頼朝こそ殺さるゝ共。此太刀失はじと存候。然るべくは熱田の社に進せ置てたび候へと宣へば。庄司尾張にくだり。大宮司に此由を申ければ即寶殿に納てけり。去程に。清盛の舍弟三河守頼盛は。平治の合戰の勸賞に尾張守に成にける。然る間侍の中に彌平兵衛宗清。目代にて下りたりけるが。上洛の時兵衛佐隱れて御座けるを聞付て。さがし取て上りにけり。頗て宗清預りにけり。死罪に行いるべかりしを。池の尼御前の手に申請て。伊豆の北條蛭が小島へぞ流されける。廿一年經て卅四と申ける。治承四年の夏の頃。高倉宮の令旨幷に一院の宣旨を給つて。謀反を發されける時。

熱田の社に籠られし。髮切を申出して帶しけり。扨こゝ日本五畿七道をば。打えたがへ給ひけれ。平治の合戰の時。義朝の常盤腹の子。當名は牛若。當歳にて有しが。九の年鞍馬寺の一和尚。東光坊の阿闍梨圓忍が弟子。阿闍梨阿闍梨圓乘に隨て。東國へ下りける。承安四年の春の頃。五條の橋次末春と云。金商人に相具して。東國へ下りける。道にて自ら男に成て九郎源義經と名乘る。卯州の權太郎秀衡に對面す。かくて。えゝばらく徘徊せし程に。兵衛佐の謀反の企と聞へければ。義經悅び馳上る。金澤と云處にて。兄に見參す。昔今の物語し互に悅び給ふ事斜ならず。信濃國の住人木曾冠者義仲これも高倉宮の令旨を給つて謀反を起す間信濃上野を始として。北陸道七ヶ國を打靡かし。都に上つて平家を攻落して天下を我任にする間。今は院の御所法住寺殿に押寄て。月卿雲客に。所もおかず合戰して。放火しやき拂ふ。えかのみならず。院をも五條のだいりに押籠參らせて。公卿殿上人をも。官職を留て追籠らる。これに依て公家より關東に御使有て。事の仔細を仰らる間。兵衛佐大きに驚き舍弟蒲冠者範頼九郎冠者義經を大將として。六万餘騎をさし上す。元暦元年正月廿日都に入木曾左馬頭を攻落して。大津の粟津にて首を取。其後平家追討の爲に攝津國一の谷に發向する處に熊野別當教眞が子息五人をば。本宮。新宮。那智。若田。田邊五ヶ所に分て置。此中に何れも長じたらん者を。別當を

繼すべしと遺言したりけるが。其頃は田邊の堤僧長じたりければ。別當にて有ける。堤僧別當申けるは。源氏は我等が母方なり源氏の代とならん事こそ悦ばしけれ。兵衛佐頼朝も堤僧がためには親さぞかし。其弟範頼義經佐殿の代官として。木曾追討し。平家攻に下らるゝの由。其聞へ有。源氏重代の劔。本は膝丸蜘切。今は吼丸とて。爲義の手より。敎眞得て權現に進らせたりしを申請て。源氏にあたへ平家を討せんとて。權現に申給て都に上り。九郎義經に渡してげり。義經殊に悦で。薄綠と改名す。其故は熊野より。春の山を分て出たり。夏山は綠も深く。春は薄かるらん。されば春の山を分出たれば。薄綠と名付たり。此劔を得てより。日頃は平家に離ひたりつる。山陰山陽の輩南海西海の兵共源氏に付こそふしぎなれ。二月三日。源氏は都を出て一の谷に向ふ。軍兵を二手に分て。範頼大將軍にて五万餘騎。攝津國より押寄。後詰の大將軍義經三草山より發向す。大手搦手同心に。七日の卯刻より。巳刻に至る迄。散々に戰。源氏軍に打勝て平家は無負。思ひ〳〵に落にけり。平家の大將軍。越前三位通盛以下。八人迄討れけり。同十三日。首共大路を渡して。獄門の木にかく。其恩賞には。八月六日に九郎御曹司。左衛門尉に成。頼て使の宣旨を蒙て五位尉にとゞまる。太夫判官とぞ申ける。蒲御曹司範頼は。三河守になされけり。同二年二月十一日に。又平家攻に渡らんとて。渡邊神崎にて。船揃をしける

時。九郎判官と。梶原平三と船に逆櫓立う立じと云。口論して。中不和に成にけり。されば共義經は。大風にも恐れずして。僅に船五十艘に取乘て。五十餘騎にて馳渡る。梶原は此意趣にや有けん。大風にや恐れけん。翌日にぞ渡しける。義經は案内者をしるべにて。屋嶋の館を燒拂ひ。三月廿二日にい。長門國赤間の關に馳向ふ。範頼は。九國の軍兵を相具して豐前國門司の關に向ひ。平家を中に取籠て互に限とぞ戰ひける。終に平家攻落されて先帝をば。二位殿負進らせて。海に入せ給ひけり。前の大臣殿以下。三十八人。生捕れけり。判官殿在々所々にて多くの戰しけれ共。一所も疵を蒙らず。毎度の軍に打勝て。日本國に名を揚し事も。只此劔の力なり。義經西海西海を討伏平家の生捕共相具して。三種の神器諸共に。都へ歸し入奉りけり。但し三種の神器の内。寶劍は失にけり。内侍所と神璽と計上らせ給。抑帝王の御寶に神璽寶劍内侍所とて。三ッ有。凡そ神璽と申は神代より傳りて。代々の御帝の御守りにて。驗の箱に納めけり。此箱開事なく。見る人もなし。これに由て。後冷泉院の御時。いかゞ思召けん此箱を開かんとて蓋を取給しに。忽ちに箱より。白雲立上り給ひけり。良有て雲は元のごとく返り入せ給ぬ。紀伊の内侍蓋覆て縅げ納め奉る。日本は小國なりと雖共。大國にまさる事は。是なりとぞ申ける。一天の君万乘の主だにも。御心に任せずして。御覽せられぬ物なれば。增て凡人云べきにあらず。況や凡下に

於てをや。神璽とは。神の印と云もじ也。神の印と云は。何なる仔細にて。帝王の御寶とは成やらん覺束なし。委く是を尋れば。我朝の起りより出たり。天神七代のはじめ。國常立尊此下に國無んやとて。天の瓊矛を降して。大海の底を搜り給ふに。國なければ鋒を引上給けるに。矛の滴り落留り。凝まり島となりにけり。吾朝の出來べき先表にて。大海の波の上に。大日と云文字浮べり。文字の上に鋒の滴り留りて。島となるが故に大日本國と名付たり。淡路の國は是日本の始なり。國常立尊より。三代の男は姿のみ顯れて。女の姿はなし。第四代の泥土瓊尊より。第六代の面足尊迄三代は。男女の姿これ有といへ共。夫婦婚合の義はなかりけり。第七の伊弉諾尊伊弉冊尊。淡路國に下て。男女婚合顯れたり。山石草木を植給へり。大島の國を造り次に國の數を造り。又世の主無んや迎。一女三男を生給ふ。所謂日の神。月の神。蛭子。素盞烏尊なり。日の神と申は。伊勢太神宮天照太神是なり。月の神と申は。月讀尊。高野丹生大明神と號す。蛭子は三年迄。足たゝぬ尊とて御座ければ。天の石櫲樟船に乘奉り。大海原に推出して。流さし給ひしが攝津國に流れよりて。海を領する神と成て。夷三郎殿と顯はれ給ひ。西宮に御座ます。素盞烏尊は御意荒しとて出雲國に流され。後には大社と成給へり。扨伊弉諾伊弉冊尊は。國をば天照太神に讓り。山をば月讀尊に奉り。海をば蛭子領し給へり。素盞烏尊は。分領なしとて。

御兄達と。度々合戰に及ぶ。是に依て不孝せられて。雲州へぞ流されける。扨天照太神日本を讓り。得給ひながら。心の任にも進退せず。第六天の魔王と申は。他化自在天に住して。欲界の六天を。我儘に領せり。去かも今の日本國は。六天の下なり。我領内なれば。我こそ進退すべき所に。此國は大日と云。文字の上に出來たる島なれば。佛法繁昌の地となるべし。是より人皆生死を離るべしとみへたり。されば此には人をも住せず。佛法をも弘めずして。偏に我私領とせんとて免せず有ければ。天照太神力及ばせ給はで。卅一万五千歳をぞ經給ひける。讓りをば請ながら星霜積りければ。太神魔王に逢給ひて曰。然べくは日本國を讓りの任に免し給ば。佛法をも弘めず。僧法をも近付じと有ければ。魔王心解て左樣に佛法僧を近付じと仰らる。とく〳〵奉るとて。日本を始て救し與へし時。手驗にとて印を奉りけり。今の神璽とい是なり。次に寶劍と申は。神代より傳れる霊劍二有と見たり。天叢雲劍。天のはゝ切の劍なり。天叢雲劍は。代々帝の御守り即寶劍是なり。天武天皇の御宇。朱鳥元年六月に。尾張の國。熱田の社に籠られたり。また天のはゝ切の劍い本は十握劍と申せが。大蛇を切て後は。天のはゝ切の劍と號す。大蛇の尾の名をはゝと云故なり。をろち共名づく。彼劍後には大和國石上布留社に納れり。昔素盞烏尊は。出雲國にはしける時。彼國の。歐の川上の山に大蛇あり。尾首共に八つ有。八の尾は八の

谷に盤れり。眼は日月のごとし。背には苔むして。諸の木草生たり。年々人を呑。親を呑ては子悲しみ。子を飲れては親悲しむ。村南村北に哭する聲たへず。國中の人種皆取失はれて。今は山神の夫婦手摩乳脚摩乳計殘れり。一人の娘あり。稲田姫と名付て。生年八歳なり。是を中に置つつ泣悲しむ事限りなし。尊哀み給て。由をいかにと問給。手摩乳答て云。我に最愛の娘あり。稲田姫と申を。今夜八股の大蛇の爲に呑れん事を悲むなりと申ければ。尊不便に思召。娘を我に得させバ。大蛇を討てとらせん事はいかにと宣へば。手摩乳。足摩乳。大に悦ぶ色みへて。大蛇をだにも討給はゞ。姫を進せ候べしと申ければ。尊大蛇を討給ふべき計をし給ける。床を高く搆。稲田姫を嚴しげに裝束させて。卅に湯津の爪櫛をさして立られたり。四方には火を燒廻して。火より外に甕に酒を入て八方に置。夜半に及で。八股の大蛇來りつゝ。稲田姫を呑んとするに。床の上に有とみれ共。四方に火を燒廻したれば。寄べき樣なかりけり。時移る迄よく見ば。稲田姫の影甕の酒に移り見たりけり。大蛇是を悦び。八の甕に八の頭を打漬して。飽まで酒を呑てけり。餘に飲醉て前後も知ず臥たりける。尊劍を抜持て大蛇をずゞに切給ふ。其八の尾に至て劍のかかはる所あり。怪で是を見給へば。劍の刃白みたり。尾を裂のけて是を見るに。中に一の劍有。是最上の劍なりとて。天照太神に奉る。天叢雲の劍と名く。此劍大蛇の尾に有し時。黑雲常

に覆ふ。故に天叢雲劍と名けたり。此大蛇は尾より風を出し。頭より雨を降す。風水龍王の天降りけるなり。手摩乳は姫の助かりたる事を悦び。尊を聟に取奉る時。圓さ三尺六寸の鏡を引出物に奉る。稲田姫尊に參りし時。卅に差し湯津の爪櫛を後樣に投て。始て尊に參り給ふ。別の櫛とは是なり。尊は出雲國に宮作りして。稲田姫を妻室とし。婚合し給へり。兄尊達と。不和の事惡くや思召れけん。大蛇の尾より取出したる。天の叢雲の劍。幷に天のはゝ切の劍。手摩乳の聟引出物の鏡。以上三種を天照大神に奉て。不孝は許され給へり。彼聟引出物の鏡は。今の内侍所是なり。人皇第四代の帝。懿德天皇の御時。天より三の鏡下れり。其内一は聟引出物の鏡なり。二は天照大神の。天の岩戸に閉籠らせ給し時。我御形を鑄移留て。子孫此鏡を見ては。我を見が如くに思へとて移し給へる鏡なり。始鑄給へるは小とて。又鑄直し給へり。始の御鏡は。紀伊國の日前の宮と祝れ給へり。後の御鏡は。伊勢國二見の浦に。一里計の沖に岩にそふてれはしますが。鹽の滿る時は。岩の上にあがり。鹽の干る時は。さがりて岩にろふて。御座。海の和たる時は。船にて推渡て。先達有て拜むなり。聟引出物の鏡は。内侍所なり。帝の御守にて。大内に御座せしを第十代の帝崇神大皇の御時。同殿然べからずとて殿を作り鏡を鑄て。新しきを御守りとし。古をば天照太神へ返し參らせ給けり。鑄移し給ふ御鏡も。作り替られたる寶劍も靈驗

い少しも劣り給はず。然るに十二代の帝。景行天皇四十年の夏東夷多く御政を背さて。關東靜ならず。帝の第二の皇子。日本武尊。御心も武く御力も勝れておはしければ。彼皇子を遣して平げしに。同じき年の冬十月に。道に出て先太神宮に參り給ふ。やまと姫の尊をして天皇の命に隨て。東攻に趣くよしを申されたりければ。崇神天皇の時。返し留るゝ天の叢雲の劍を出し給ふ。日本武尊。是を帶して東國に下り給ふに。道に不思議有。出雲國にて。素盞烏の尊に害せられたりし。八岐の大蛇天降り。無躰に命を失はれ。劍を奪はれし憤り散せず。今日本武尊の帶して。東國に趣き給をせき留て。奪返さん其爲に毒蛇となりて。不破の關の大路を臥塞ぎたり。尊事共し給いず踊越てぞ通られけり。尾張の國に下て。松子の島と云所に。源太夫と云ものゝ家に泊り給へり。太夫に娘あり。名を岩戸姫と云けり。みめ貌好りければ。尊是を召て幸去給ふ。一夜の契深くして。互ひに心ざし淺からず。かくてもあらばやはしく思召れ共。夷を賣に下りしが。女に付て留らん事。惡かりなんと思はれければ。歸らん時又と憑て。頓て打出給ひけり。駿河の國富士の裾野に到る。其國の凶徒。此野に鹿多候狩して遊ばせ給へと申ければ。尊即ち出て遊び給ふに。凶徒ら野に火を付て。尊を燒殺し奉らんとしける時。帶給へる。天叢雲の劍をぬいて。草を薙給ふに。苅草に火付て。劫したりけるに。尊は火石水石とて。二の石を持給へるが。先水

石を投懸給ひたりければ。即石より水出て。消てけり。又火石を投懸給ひければ。石中より火出て。凶徒多く燒死けり。それよりしてぞ其野をば。天の燒そめ野とぞ名付ける。叢雲の劍をば。草薙の劍とぞ申ける。尊振桑給ひし。岩戸姫の事。忘れ難く。心にかゝりければ。山復り江かへりと云共。志の由を彼姫に知せんとて。火石水石の二の石を。駿河の富士の裾野より。尾張の松子の島へぞ投られけり。彼所の紀太夫と云者の。作れる田の北の端に。火石は落。南の端に水石は落。二の石留る夜。紀太夫の作りける田。一夜が内に森となりて。多くの木生茂りたり。火石の落たる北の方には。いかなる洪水にも水出る事なく。水石の落たる南の方には。何たる旱魃にも。水絶る事なし。是火石水石の驗なり。尊は是より奥へ入給て。國々の凶徒を平げ。所々の惡神を鎭め。同五十三年。尾張の國へ歸り。又岩戸姫に幸し給へり。扨しも果べき事ならねば。都へ上り給けるに。草薙の劍をば。思絶せよとて。岩戸姫に渡し給しを。我女の身なれば。劍持て何かせん。只持て上り給へと申されければ。存ずる旨有迚桑の枝に掛て。尊は上り給にけり。去程に八岐の大蛇伊吹大明神は。尊に跳り越られて。得留ぬ事を。本意なく思て。前よりも猶大きに高く顯れて。大路をふさぎ給へり。尊は猶も事共し給はず。走越て。通り給けるに。引給ける足の先。大蛇にちと障りたりければ。其より頓てとほり上て。五躰身分忍び難く。打臥

ぬべく。覺せ共。心剛におわしける程に。惱ながら近江國まで越給ふ。道の邊りに。水の流れ出て冷しく清潔なりければ。端なる石に御腰をかけて。水に足をさし下して。寒し給ける程に。立處にほとをり醒にけり。其よりして此水をば。醒井とぞ名付たる。ほとをり醒たれ共。御惱重かりければ。虜夷をば。太神宮に奉り武彦を以て。此由を奏し給ふ。尊は猶近江國千の松原と云所に。惱み臥給けるが。松子の島に宿り給し。岩戸姫は。尊の名殘を惜つゝ。在もあられぬ心ちして。尋ね上り給ひけるが。近江の千の松原に御座けり。尊は惱ながら思出されて。戀しく思しける處に。岩戸姫來り給ひければ。餘りの悅ばしさに。あは妻よとて大に悅び給ひけり。ろれよりして。東國をば吾妻とぞ名付たる。角て日數を送り給ふ程に。尊は御惱重くならせ給て。終に失給にけり。白鳥となりて。南をさして飛給ふ。岩戸姫は。尊の別を悲しんで悶へ焦れ給へ共。其甲斐なき事なれば。泣々尾張の國へ歸り給けり。尊に仕へたる人々。別を悲み奉て。跡目に付て行程に。紀伊國名草郡に暫らく落留りけるが。此所を惡くや覺しけん。東國に飛かへり。尾張の國。松子の島にぞ飛行ける。白鳥にて飛給ひし時は。長さ一丈の白幡二流れとみへしなり。尾張の國に飛落ぬ。其所をば。白鳥塚と名付たり。幡の落たる所をば。幡屋とて今に有。兵衛佐頼朝は。末代の源氏の大將と成べき故にや。彼幡屋にてぞ生れ給ふ。草薙の劍をば桑の枝に懸置給

しを。岩戸姫是を取て。紀太夫が田一夜の内に森に成たる社の杉に靠て置れたりけるが。夜夜劍より。光り立ければ彼光り杉に燃付て燒倒れにけり。田に杉の燒て倒入たりければ。田も熱かりけると云心に。熱田とぞ名付たる。日本武尊は白鳥にて飛落給て。神に成今の熱田大明神是おわり。岩戸姫も。あかで別れし中なれば。即ち神と顯はれ。源大夫も神と成。紀太夫も同じく神とぞ顯れける。扨も草薙の劍をば寶殿を造て置れたりけるが。夜々に劍より光立。知法行德の人ならでは見る事おし。然るに新羅の帝に沙門道行と云ける高僧。日本に立し劍の光を見て帝に語りければ。何共して彼劍を取て我に與へよと仰有ければ。扨は取て進らせ候はんとて。日本にゞ渡りにける。尾張の熱田に詣でつゝ。彼劍を七日行ふて盜み取。五條の袈裟に裹で逃ける程に。劍袈裟を衝破て。本の寶殿に返り入。二七日行て劍を取。七條の袈裟に裹て逃けるに劍又七條をも突破て寶殿に歸る。道行猶立歸て。三七日行て。此般は九條に裹で出ける間。けさをも破る事得ずして。筑紫の博多迄逃歸りたりけるを。熱田大明神。安からぬ事と思召し。住吉大明神を討手にくだし。道行を蹴殺て。草薙の劍を奪取。帝生不動と云將軍に。七の劍を持せて日本へゞ渡しける。生不動既に尾張國迄攻來る。熱田の神宮惡き奴かなとて蹴殺給にけり。所持の七の劍を召取て。草薙の劍に加へて寶殿に祝はれたり。今の八劍大明神とは是なり。代々かくこそ有しに。

後の寶劍も靈驗をとゝ給はず。平家取て都外に出て。二位殿腰にさして海に入る。上古ならまし かば。失ふべきに非ず。末代こそ心憂けれ。潛する海人に仰て。是を求させ。水練を召て尋ぬれ共見へず。龍神是を取て龍宮へ納てければ終に來らざりけり。其頃或人の夢に見けるは。草薙の劍は。風水龍王。八岐の大蛇と變じて。素盞烏尊に害せられ。持ところの劍を奪はる。此風水龍王は。伊吹大明神たるによつて。不破の關に蛇と成て。日本武尊の。伊勢太神宮より。天叢雲劍を給て東夷の爲に下國し給けるを。關留取んとし給けるも協はず。御上りの時待儲て。奪返さんとし給けるも殺されけり。生不動八歳の皇と顯はれて。本の劍は叶はね共。後の寶劍を取持て西海の波の底にぞ沈み給ける。終に龍宮に納りぬれは。見るべからずとぞ見たりける。扨九郎太夫判官義經。平氏の虜共相具して。關東へ下向有けるが。梶原が讒言に由て。腰越に關を居て。鎌倉へは入られず。判官本意なき事に思ひて。起請文を書て。度々進らせられたれ共用ひなし。力及ばず空しく都に上りける時。箱根權現に參て。兄弟の中和らげしめ給へとて。薄綠の劍を進らせらる。土佐坊昌俊都に上り。謀らんとしけれ共。判官心得給へば。仕損じて。土佐坊鞍馬の奥。僧正が谷に籠たりけるを。鞍馬法師。昔の好み有ければ。搦取て判官に奉る。中務烝知國に仰て。六條西の朱雀にて誅せられけり。關東より。重て討手上洛の由聞へければ。義經五百餘騎。

船に乘て西海へ趣き給へ共大風に逢つゝ。難波の浦にさすらひ。靜と云白拍子ばかりをぐして。芳野山に入。其後北陸道にかゝり。奥州迄落下り秀衡入道を憑みて。三四年は過にけり。文治四年四月廿九日。五百餘騎にて攻けるに。判官は康衡に向て軍して。朝爲とて女房廿二。若君四歳。當歳の姫。我身三十一と申けるに。自害してこそ失にけれ。中も直ぬ物ゆへに劍を權現に參らせけるも。連の窮とぞ覺へける。建久四年五月廿八日の夜。相摸の國。曾我の十郎祐成。同五郎時宗が。親の敵祐經を討ける時箱根の別當行實が手より。兵庫鎖の太刀を得たりければ。思ふ樣に敵を〻討たりける。此太刀は九郎判官の。權現に進らせられたりし。薄綠と云劍。昔の膝丸是なり。親の敵心のまゝに討おふせて。日本五畿七道に名を揚。上下万民に讃られけるも。此劍の用ありとぞ聞へし。其後彼膝丸鎌倉殿に召れけり。鬚切膝丸一具にて多田の滿仲八幡大菩薩より給つて。源氏重代の劍なれば。暫く中絶すといへ共。終には一所に經廻して。鎌倉殿に參りけるこそ。目出度かりける樣なりけれ

訂正太平記卷之一

○後醍醐天皇御治世の事付武家繁昌事

爰に本朝人皇のはじめ。神武天皇より。九十五代の帝。後醍醐天皇の御宇に當て。武臣相摸守平の高時と云者あり。此時上君の德にそむき。下臣の禮をうしなふ。是より四海大きに亂れて。一日も未だ安からず。狼烟天を翳め。鯨波地を動す事。今に至る迄四十餘年。一人として春秋に富る事を得ず。萬民手足を措に所なし。倩其濫觴を尋ればたゞ禍ひ一朝一夕の故に非ず。元暦年中に。鎌倉の右大將頼朝卿平家を追討して。其功有の時。後白河院叡感のあまりに。六十六ヶ國の總追捕使に補せらる。是より武家はじめて諸國に守護を立。庄園に地頭をおく。かの頼朝の長男。左衛門督頼家。次男右大臣實朝公。相續て皆征夷將軍の武將にろなはる。是を三代將軍と號す。しかるを頼家卿は。實朝のために討れ。實朝は。頼家の子。惡禪師公曉がために討れて。父子三代僅に四十二年にして盡ぬ。其のち頼朝卿の舅。遠江守平の時政の子息。前の陸奥守義時。自然に天下の權柄をとり。勢ひ漸四海に覆はんと欲す此時の太上天皇は後鳥羽の院なり。武威下に振はゞ。朝憲上に廢れん事を歎き思召て。義時を亡さんとし玉ひしに。承久の亂出來て。天下暫くも靜ならず。遂に旌旗日を掠て宇治勢多にして相戰ふ。其たゝかひ未一日も終ざるに。

訂正太平記劍卷　終

官軍忽に敗北せゐかば。後鳥羽の院は隱岐國へ迂されさせ給ひて。義時いよ〳〵八荒を掌に握るそれより後。武藏守泰時修理の亮時氏。武藏守經時。相摸守時賴。左馬の權頭時宗。相摸守貞時。相續て七代政事武家より出て德窮民を撫するにたれり。威萬人の上に被るといへども。位四品の際を越ず。謙にゐて仁恩を施し。已れを責て禮義を糺す。是を以て高ゐと雖も危からず。滿り と雖も溢ず。承久より以來儲王攝家の間に。理世安民の器に相當り給へる。此時後鳥羽院義時申下し奉て。征夷將軍と仰ぎて。武臣みな拜趨の禮を事とす。同三年に始て洛中に義時の一族を居て両六波羅と號ゐて。西國の沙汰をとり行はせ。京都の警衛に備へらる。又永仁元年より鎭西に一人の探題をくだし。九州の成敗を司ゐめ。異賊襲來の守りを堅す。されば一天下普く。彼下知に隨はずと云處もなく。四海の外も均しく。其權勢に服せずと云者はなかりけり。朝陽犯さゞれ共。殘星光を奪る〳〵習なれば。必ゐも武家より。公家を畏にゐ奉るとゐもはなけれ共。所には地頭強ゐて。領家は弱く。國には。守護重うゐて。國司は輕し。此故に朝廷は年々に衰へ。武家は日々に盛なり。これに因て代々の聖主。遠くは承久の震襟を休めんが爲。近くは朝議の陵廢を歎き思召て。東夷を亡さばやと。常に叡慮を回らされゐか共。或は勢微にゐて叶はず。或は時未だ到らずゐて默止給ひける處に。時政九代の後胤。前相摸守平の高時入道崇鑑が代に至て。天地命を革むべき危機。こゝに顯はれたり。倩古へを引て。今を視に。行跡甚はだ輕くして。人の嘲り顧ず。政道正しからずして。民の弊を思はず。只日夜に逸遊を事として。前烈を地下に羞しめ。朝暮に奇物を翫で。傾廢を生前に致さんとす。衛の懿公が。鶴を乘し樂み早く盡。秦の李斯か犬を曳し恨み今に來ゐんとす。見る人眉を顰め。聞人唇を翻す。此時の帝。後醍醐天皇と申せしは。後宇多院の第二の皇子。談天門院の御腹にておはせしを。相摸守が斗として。御年卅一の時。御位に即奉る。御在位の間。内には三綱五常の儀を正しうして。周公孔子の道に順ひ。外には万機百司の政怠り給はず。延喜天曆の跡を追れしかば。四海風を望て悅び万民德に歸して樂む。凡諸道の廢れたるを興し。一事の善をも賞せられしかば。寺社禪律の繁昌爰に時を得。顯密儒道の碩才も皆望を達せり。誠に天に受たる聖主。地に奉せる明君なりと。其德を稱じ。其化に誇らぬ者はゐかりけり。

○關所停止の事

それ四境七道の關所は。國の大禁を知しめ時の非常を誡めんが爲なり。然るに今壟斷の利に依て商賣往來の弊。年貢運送の煩ひ有とて。大津葛葉の外は盡く所々の新關をやめらる。又元亨元年の夏大旱地を枯して。甸服の外百里の間。空しく赤土のみ有て。青苗なし。餓莩野に滿て飢人地

に倒る。此年錢三百を以て粟一斗をかふ。君遙に天下の飢饉を聞召て。朕不德あらば天予一人を罪すべし。黎民何の咎ありてか此災にあへると。自ら帝德の天に背ける事を歎き思召て。朝餉の供御を止られて。飢人窮民の施行に引れけるこそ有難けれ。是も猶万民の飢を助くべきに非ずとて。檢非違使の別當に仰て當時福祐の輩が。利倍の爲に蓄へ積る米穀を點檢して。二條の町に假屋を立られ。檢使自ら斷て直を定て賣せらる。されば商賣共に利を得て人皆九年の蓄へ有が如し。訴訟の人出來の時。もし下の情。上に達せざる事もやあらんとて。記錄所へ出御成て直に訴へを聞召明め。理非を決斷せられしかば。虞芮の訴へ忽ちに停て。刑鞭も朽はて、諫鼓も打人なかりけり。誠に理世安民の政。若機巧に付てこれを見ば。命世亞聖の才共稱しつべし。只恨らくは。齊垣霸を行ひ。楚人弓を忘れしに。叡慮少しき似たる事を、是則はち草創は一天を并すといへ共。守文は三載を越ざる所以なり

○立后の事付三位殿御局の事

文保二年八月三日後西園寺太政大臣實兼公の御娘。后妃の位に備つて。弘徽殿に入せ給ふ。此家に女御を立られたる事すでに五代。是も承久以後。相摸守代々。西園寺の家を尊崇せしかば。一家の繁昌。恰も天下の耳目を驚かせり。君も關東の聞へ。然るべきと思召て。取わけ立后の御沙汰

も有けるにや。御齡已に二八にして。金雞障の下に冊れて。玉樓殿の内に入給へば。夭桃の春を傷る粧。垂柳の風を含める御形。毛嬙西施も面をはぢ。絳樹青琴も鏡をおはふ程あれば。君の御覺へも。定て類あらじと覺へしに。君恩葉よりも薄かりしかば。一生空く玉顏に近付せ給はず。深宮の中に向て。春の日の暮難き事を歎き。秋の夜の長き恨みに沈ませ給ふ。金屋に人あうして。皎々たる殘の燈の壁にそむける影。薰籠に香消て。蕭々たる夜の雨の窓をうつ聲。物ごとにみな。御涙を添る媒となれり。人生れて。婦人の身となる事勿れ。百年の苦樂は。他人に因と白樂天が書たりしも理り也と覺へたり。其比安野中將公廉の女に。三位殿の局と申ける女房。中宮の御方に候はれけるを。君一度御覽せられて。他に異なる御覺へあり。三千の寵愛一身に有しかば。六宮の粉黛は顏色なきが如なり。都て三夫人九嬪廿七の世婦。八十一の女御及び後宮の美人樂府の妓女といへ共。天子顧眄の御心を付られず。たゞ殊艶尤態の獨よく是を致すのみにあらず。蓋し善巧便佞叡旨に先だつて。奇を爭ひしかば。花の下の春の遊。月の前の秋の宴にも駕すれば。輦を共にし幸すれば。席と專にし玉ふ。是より君王朝政をもし給はず。忽ちに准后の宣旨を下されしかば。人皆皇后元妃の思ひをなせり。警きたる光彩の始て門戸になる事を。此時天下の人男を生事を輕んじて女を產事を重せり。されば御前の評定雜訴の御さばきも。准后の御口入

とだに云てければ上卿も。忠あさに賞を與へ。奉行も理有を非とせり。闘雛は樂で淫せず。哀て傷ず。詩人採て后妃の德とす。奈何せん傾城傾國の亂。今に有ぬと覺へて淺增かりし事共也

○儲王の御事

鑑斯の化行れて。皇后元妃の外君恩に誇る宮女甚はだ多かりければ。宮々次第に御誕生有て。十六人迄ゞ御産しける。中にも第一の宮尊良親王は。御子左の大納言爲世卿の女贈從三位。爲子の御腹にておはせしを。吉田の内大臣定房公。養君にし奉りしかば。志學の年の始より。六義の道に長じさせ玉へり。されば富の緒河の清き流れをくみ。淺香山の古き跡を蹈で。嘯風弄月に御心を傷しめ賜ふ。第二の宮も同じ御腹にてぞ御産しける。總角の御時より。妙法院の門跡に御入室有て。釋氏の敎をうけさせ給ふ。是も倫伽三密の間には。歌道數奇の御翫び有しかば。高祖大師の舊業にも耻ず。慈鎭和尙の風雅にも越たり。第三の宮は民部卿。三位殿の御腹なり。御幼稚の時より。利根聰明に御座せしかば。君御位をば。此宮にこそと思めしたりしか共。御治世は。大覺寺殿と。持明院殿と。代々持せ玉ふべしと。後嵯峨院の御時より。定られしかば。今度の春宮をば。持明院殿の御方に。立進らせらる。天下の事。小大とあく。關東の斗として。叡慮にも任せられざりしかば。御元服の義を改められ。梨本の門跡に。御入室有て。承鎭親王の。御門弟

とあらせ給ひて。一を聞て十を悟る。御器量。よにたぐひもおかりしかば。一實圓頓の花の匂ひを。荆溪の風に薫じ。三諦即是の月の光を玉泉の流れに浸せり。されば消おんとする法灯を挑げ。絶おんとする惠命を繼ん事。只此門主の御時なるべしと。一山掌を合て悅び。九院首を傾て仰ぎ奉る。第四の宮も。同じ御腹にてぞおはしける。是は聖護院二品親王の。御付弟にておはせしかば。法水を三井の流れに汲。記別を慈尊の曉に期し給ふ。此外儲君儲王の選び。竹苑椒庭の備へ誠に王業再興の運。福祚長久の基。時を得たりとゞ見へたりける。

○中宮御産御祈の事付俊基僞籠居の事

元享二年の春の比より。中宮懷妊の御祈とて。諸寺諸山の貴僧高僧に仰せて。さまゞの大法秘法を行はせらる。中にも法勝寺の圓觀上人小野の文觀僧正二人ゝ。別勅を受て。金闕に壇を搆へ玉躰に近付奉て。肝膽を碎てぞ祈られける。佛眼金輪五壇の法。一字五返孔雀經。七佛藥師熾盛光。烏芻沙摩變成男子の法。五大虛空藏。六觀音六字訶臨何利帝母。八字文殊普賢延命。金剛童子の法。護摩の烟は内苑に滿振鈴の音は。掖殿に響て。いかなる惡魔怨靈なり共。障礙をあさじとぞ見へたりける。ケ樣に功をつみ。日を累て。御祈の精誠を盡されけれ共。三年迄曾て。御産の御事ゝ無りけり。後に子細を尋れゞ。關東調伏のために。事を中宮の御産に寄て。かやうに

秘法を修せられけるとなり。これ程の重事を。思召立事あれば。諸臣のいけんをも。窺ひたく思召けれ共。事多聞に及ハゞ。武家に漏聞る事やあらんと。憚り思召れける間。深慮智化の老臣。近侍の人々にも仰せ合せらるゝ事もなし。只日野の中納言資朝。藏人右少辨俊基。四條中納言隆資。尹の大納言師賢。平宰相成輔計に潛に仰合られて。さりぬべき兵を召れけるに。錦織の判官代足助の次郎重成。南部北嶺の衆徒少々勅定に應じてけり。彼俊基は累葉の儒業をついで。才學優長なりしかば。顯職に召任はれて官蘭臺にいたり。職々事を司どれり。然間。出仕事ゑげうして籌策に隙なかりければ。いかにもして暫く籠居して。謀反の計略を回らさんと思ける所に。山門横川の衆徒。欵狀を捧て禁庭に訴る事有。俊基かの奏狀を披て讀申されけるが。讀誤まりたる躰にて楞嚴院を慢嚴院とぞ讀たりける。座中の諸卿是を聞て目を合て。相の字をば。篇に付ても。傍に付ても。もくとこそ讀べかりけると。掌を拍てぞ笑はれける。俊基大きに耻たる氣色にて。面を赤めて退出す。それより恥辱に逢。籠居すと披露して。半年斗出仕をやめ。出伏の形に身を易て。大和河内に行て。城廓になりぬべき所々を見置て。東國西國に下て。國の風俗人の分限をぞ窺ひ見られける

○無禮講の事付玄惠文談の事

爰に美濃國の住人。土岐伯耆の十郎頼貞。多治見四郎次郎國長と云者あり。共に清和源氏の後胤として。武勇の聞へ有ければ。資朝卿さま〴〵の縁を尋て。賜び近づかれ。朋友の交り。已に淺からざりけれ共。是程の一大事を。さうなく知せん事。如何有べからんと。思はれければ。猶も能々其心を窺ひ見ん爲に。無禮講と云事をぞ始られける。其人數には。尹の大納言師賢。四條中納言隆資。洞院左衛門督實世。藏人右少辨俊基。伊達の三位房游雅。聖護院廳の法眼玄基。足助次郎重成。多治見四郎二郎國長等也。その更會遊宴の躰見聞耳目を驚せり。献盃の次第上下をいハず。男は烏帽子を脱で髻をはなち。法師は衣をさずして白衣になり。年十七八なる女の。盼かたち優に。膚ことに清らかなるを。二十餘人。褊の單斗をきせて。酌を取せければ。雪の膚すきとをりて。大掖の芙蓉。新に水を出たるに異ならず。山海の珍物を盡し。旨酒泉のごとくに湛て。遊び戯れ舞歌ふ。其間にはたゝ。東夷を亡はすべき企の外他事なし。其事となく常に會交せば。人の思ひ咎る事もやあらんとて。事を文談に寄んが爲に。其比才覺無双の聞へ有ける。玄惠法印と云文者を請じて。昌黎文集の談義をぞ行ハせける。彼法印。謀反の企とは夢にも知ず。會合の日毎に。席に臨で玄を談じ。理をひらく。彼文集の中に昌黎潮州に赴くと云長篇有。此所に至て談義をさく人々。是みな不吉の書なりけり。呉子孫子。六韜。三略なんどこそ。然るべき當用の文な

れとて。昌黎文集の談義を止てけり。この韓昌黎と申は。晩唐の末に出て。文才優長の人なりけり。詩は杜子美。李太白に肩を双べ文章は漢。魏。晋。宋の間に傑出せり。昌黎が猶子韓湘と云者あり。是は文字をも嗜まず。詩篇にも携はらず。只道士の術を學て。無爲を業とし。無事を事とす。有時昌黎韓湘に向て申けるは。汝天地の中に化生して。仁義の外に逍遙す。是君子の恥る處。小人の專らとする處あり。我常に汝が爲に。是を悲む事切なりと教訓しければ。韓湘大きに冷笑て。仁義は大道の廢れたる處に出。學敎は大僞の起る時に盛なり。我無爲の境に優遊して。是非の外に自得す。されば眞宰の臂を掣て。壺中に天地をかくし。造化の工を奪て。橘裏に山川を峙ち却て悲しむらくは。公のたゞ。古人の糟粕を甘つて空しく一生を。區々の中に誤る事をと答へけれべつ昌黎重て曰く。汝がいふ處。我未だ信せず。今則ち造化の工を。奪ふ事を得てんやと問に。韓湘答る事なふして。前に置たる。瑠璃の盆を打覆て。軈て又引仰むけたるをみれば。忽ちに碧玉の牡丹の花の。嬋娟たる一枝あり。昌黎驚てこれを見に。花の中に。金字に書る。一聯の句有。雲横二秦嶺一家何在。雪擁二藍關一馬不レ前云々昌黎不思議の思ひをなして。是を讀で一唱三嘆するに。句の優美遠長なる躰。製のみ有て。其趣向落着の所を知がたし。手に取て是を見とすれば。忽然として消失ぬ。是よりしてこそ韓湘は。仙術の道を得たりとは。天下の人に云ら

れけれ。其後昌黎。佛法を破つて。儒敬を貴むべき由。奏狀を奉りける咎に依て。潮州へ流さる。日暮馬泥で。前途程遠し。遙に故鄕のかたを顧れば。秦嶺に雲横て來つらん方も覺へず。悼んで萬尋の峻きに登んとすれば。藍關に雪滿て。行くべき末の道もなし。進退歩を失つて頭を廻らす所に。何より來れる共なく。韓湘勃然として傍に有。昌黎悅で馬よりおり。韓湘が袖を引て。泪の中に申けるは。先年碧玉の花の中に見たりし一聯の句は。汝我に豫じめ。左遷の愁へを告ゝ。らせるなり。今又汝こゝに來れり。料り知ぬ。我つゐに謫居に愁死して。歸る事を得じと。再會期なうして。遠別今に有。豈愁しみに堪んやとて。前の一聯に句を繼で。八句一首となして韓湘に與ふ。

一封朝奏九重天　夕貶潮陽路八千
欲爲聖明除弊事　豈將衰朽惜殘年
雲横秦嶺家何在　雪擁藍關馬不前
知汝遠來須有意　好收吾骨瘴江邊

韓湘此詩を袖に入て。泣々東西に別れにけり。誠なるかな凝人の面前に。夢を說ずといふ事を。此

談義を聞ける人々の。忌思ひけるこそ愚かれ。

○頼員回忠の事

謀叛人の與黨。土岐左近藏人頼員は。六波羅の奉行。齋藤太郎左衛門の尉利行が女とかして。最愛ゑたりけるが。世中已に亂れて。合戰出來りあば。千に一つも討死せずと云事有まじと思ける間。兼て名殘や惜かりけん。或夜の寐覺の物がたりに。一樹の陰に宿り。同じ流れを汲もみあ。是多生の緣淺からず。況やあひ馴奉て。已に三年に餘れり。等閑あらぬ。志の程をば。氣色に付。折に觸ても思ひゑり給ふらん。扨も定なきは人間の習。相逢中の契りなれば。今もし我身。墓なくなりぬと。聞給ふ事あらば。亡らん跡迄も。眞女の心を失はで。我後世をとひ給へ。人間に歸らば。二度夫婦の契りを結び。淨土に生れば。同じ蓮の臺に。半座を分て待べしと。其事となくかき口説。泪を流してぞ申ける。女つくづくと聞て。怪や何事の侍るぞや。翌迄の契りの程も云らぬ世に。後世までの荒增ゝ。忘れんとての情にてこそ侍らめ。さらではかゝるべし共覺へずと泣恨て問ければ。男は心淺うして。さればよ我不慮の勅命を蒙て君に頼まれ奉る間。辭するに道あうして。御謀叛に與しぬる間。千に一も命の生んずる事。難し。端あく存る程に。近つく別れの悲しさに。兼て箇樣に申なり。此事穴賢。人に知させ給ふなと。能々口をぞ固めける。彼女

性心の賢き者なりければ。夙に起て。つくづくと此事を思ふに。君の御謀反事あらずば。頼たる男忽に誅せらるべし。若又武家亡びなば。我親類たれかは一人も殘るべき。さらば是をば父利行に語つて。左近の藏人を。回忠の者になし。是をも助け。親類をも扶けばやと思ふて。急ぎ父の許に行。忍やかに此事を。有の儘にぞ語りける。齋藤大に驚き。聽て左近の藏人を呼よせ。かかる不思議を承はる誠にて候やらん。今の世に。箇樣の事思ひ企給はんは。偏に石を抱ひて淵に入者にて候べし。若他人の口より漏あば。我らに至迄。皆誅せらるべきにて候へば。利行急ぎ御邊の告知せたる由を。六波羅殿に申て。共に其咎を遁んと思ふい。何計ひ給ふぞと問ければ。是程の一大事を。女性に云らする程の心にて。なじかは仰天せざるべき。此事は。同名頼貞。多治見四郎次郎の勸に依て。同意仕て候。唯兎も角も。身の咎を助かる樣に。御計ひ候へとぞ申ける。夜未明ざるに。齋藤急ぎ六波羅へ參て。事の子細を。委く告申ければ。則ち時をかへず。鎌倉早馬を立て。京中洛外の。武士共を六波羅へ召集て。先着到をぞ付けられける。其頃津の國葛葉と云所に地下人代官を背きて。合戰に及ぶ事有。彼本所の雜掌を。六波羅の沙汰として。庄家にしすへん爲に。四十八ヶ所の籌弁に在京人を催さるるの由を披露せらる。是は謀叛の輩を落さじが爲の謀也。土岐も多治見も。我身の上とは思ひも寄ず。明日は葛葉へ向ふべき用意して。皆己

が宿所にぞ居たりける。去程に。明れば元徳元年八月十九日の卯の刻に。軍勢雲霞の如に。六波羅へ馳参る。小串三郎左衛門尉範行。山本九郎時綱。御紋の旗を給はり。討手の大將を承て。六條河原へ打出。三千餘騎を二手に分て。多治見が宿所錦小路高倉。土岐十郎が宿所三條堀河へ寄けるが時綱かくては如何様。大事の敵を打漏しぬと思ひけるにや。大勢をば態と三條河原に留て。時綱たゞ一騎。中間二人に長刀持せて。忍やかに土岐が宿所へ馳て行。門前へ馬をば乗捨て小門より内へつと入て。中門の方を見れば宿直玄ける者よと覺へて。物の具太刀々枕に取散し。高軛かきて寢入たり軛の後を廻て何くにか。匿地の有と見れば。後は皆築地にて門より外へ路も無。扨は心安しと思ふて客殿の奥なる。二間を颯と引明たれば。土岐七郎只今起あがりたりと覺て。髪の髪を撫あげて結けるが。山本九郎を屹と見て。心得たりと云儘に。立たる太刀れつ取。傍なる障子を一間踏破り六間の客殿へ跳り出。天井に刀を打付じと。拂ひ切にろ切たりける。時綱は態と敵を廣庭へ帶き出し。透間もあらば生擒んと志て。打拂ひては退き打流しては。飛のき人まもせず。戰ふて後を屹と見たれば。後陣の大勢二千餘騎。二の關より込入て。同音に時を作る。土岐十郎。久しく戰ふては中々生捕れんとや思ひけん。本の寢所へ走り歸て。腹十文字にかき切て。北枕にこそ臥たりける。中の間に寢たりける若黨共も。思ひ〳〵に打死して。逃るゝ者一人

もなかりけり。首を取て鉾に貫き。山本九郎い是より。六波羅へ馳参る。多治見が宿所へは。小串三郎左衛門範行を先として。三千餘騎にて押寄たり。多治見は終夜の酒に飲醉て。前後も知ず臥たりけるが。時の聲に驚きて。是は何事ぞと。周章騒ぐ。傍に臥たる遊君物馴たる女なりければ。枕なる鎧取て打着せ。上帶つよく縮させて。猶寢入たる者共をゞ起しけり。小笠原孫六。頗る城に驚されて。太刀斗を取て。中門に走出て。目を磨〳〵四方を屹と見ければ車の輪の旗の一流れ。築地の上より。見へたり。孫六内へ入て六波羅より。討手の向て候ひける。此間の御謀叛は や顯れたりと覺候。早面々太刀の目貫の堪へん程は。切合て腹を切と呼て。腹巻取て肩に投かけ。廿四差たる胡籙と。重藤の弓とを提て。門の上なる櫓へ走上り。中差取て打番ひ。挾間の板八文字に排て。荒こと〴〵しの大勢や。我等が手柄の程こそ顯れたれ。抑討手の大將は誰と申人の向はれて候やらん。近付て矢一つ請て御覽候へと云儘に十二束三伏。忘るゝ斗引ぎぼりて切て放つ。眞先に進むたる。狩野下野の前司が若黨に。衣摺の助房が冑の眞向鉢付の板迄。矢先白く射通して。馬より倒に射落す。是を始として鎧の袖草摺冑の鉢共いはず。差詰て。思ふ樣に射るに。面に立たる兵。廿四人矢の下に射て落す。今一筋胡籙に殘りたる矢を拔て。胡籙をば櫓の下へからりと投落し。此矢一をば冥途の旅の用心に持べしと云て。腰にさし。日本一の剛の者。謀反に與

し。自害する有様見をきて。人に語れと高聲に呼て。太刀の鋒を口に呀て。櫓より倒に飛落て。貫れて社死にけれ。此間に多治見を始として。一族若黨廿餘人。物の具ひし〳〵と堅め。大庭に跳り出て。門の關の木さして待かけたり。寄手雲霞の如しと雖ども。思ひ切たる者共が。死狂ひせんと。引籠たるがこはさに。内へ切て入んとする者も。あかりける處に。伊藤彦次郎父子兄弟四人。門の扉の少し破れたる所より。這て内へぞ入たりける。志の程は武けれ共。待請たる敵の中へ這て入たる事なれば。敵に打違ふるまでもなくて。皆門の脇にて討れにけり。寄手是を見て。彌〻近づく者もなかりける間。内より門の扉を押開て。討手を承はる程の人達の。蓬も見へられ候物かな。はや是へ御入候へ。我等が首共。引出物に參らせんと。恥しめてこそ立たりけれ。寄手共。敵に飽迄欺かれて。先陣五百餘人。馬を乘放ちて。歩立に成嘆で庭へ込入楯籠る所の兵共。迎も遁じと思ひ切たる事なれば。何くへか一足も引べき。廿餘人の者共。大勢の中へ亂れ入て。面もふらず切て廻る先駈の寄手五百餘人散々に切立られて。門より外へ颯と引。去共寄手は大勢なれば。先陣引ば二陣喚で懸入。懸入ば追出し。追出せば懸入。辰の刻の始より。午の刻の終迄。火出る程ころ戰ひけれ。箇様に大手の軍强ければ。佐々木判官が手の者千餘人。後へ廻りて。錦の小路より。在家を打破つて亂入。多治見今は是迄とや思ひけん。中門に並居て。廿二人の者共。

互に差違へ〳〵。算を散せる如く臥たりけり。追手の寄手共が。門を破りける其間に。搦手の勢共亂入。首を取て六波羅へ走歸る。二時計の合戰に。手負死人をかぞふるに二百七十三人あり

○資朝俊基關東下向の事付御告文の事

土岐多治見討れて後。君の御謀反。次第に隱かくれかりければ。東使長崎四郎左衛門泰光。南條次郎左衛門宗直二人。上洛して。五月十日資朝俊基。兩人を召捕奉る。土岐が討れし時。生取の者一人もなかりしかば。白狀はよもあらじ。さり共我等が事は。顯れじと。墓なき憑みに。油斷して。曾て其用意もかかりければ。妻子東西に逃迷ひて。身を隱さんとするに處なく。財寶は大路に引散されて。馬蹄の塵とありにけり。彼資朝の卿い。日野の一門にて。職大理を經。官い中納言に至りしかば君の御覺へも他に異にして。家の繁昌時を得たりき。俊基朝臣は。身儒雅の下より出。望み勳業の上に達せしかば。同官も肥馬の塵を望み。長者も殘盃の冷に醋がム。宜なる哉。不義にして富且貴きは。我に於て浮べる雲の如しと云る事。是孔子の善言。魯論に記する所なれば。なじかは違ふべき。夢の中に樂み盡て。眼前の悲しみ爰に來れり。彼を見是を聞ける人ごとに。盛者必衰の理を知でも。袖を絞り得ず。同じき廿七日東使兩人。資朝俊基を具足し奉て。鎌倉へ下着す。此人には殊更謀反の張本なれば。驍て誅せられぬと覺へしか共。供に朝廷の近臣として。

才覺優長の人たりしかば。世の譏。君の御憤りを憚て嗷問の沙汰にも及ばず。只尋常の。放し召人の如くにて。侍所にぞ預け置れける。七月七日今夜は牽牛織女の二星烏鵲の橋を渡して。一年の懷抱をとく夜なれば。宮人の風俗。竹竿に願ひの絲を懸て。庭前に嘉菓を列て。乞巧奠を修する夜なれ共。世上騷しき折ふしなれば。詩歌を奉る騷人もなく。絃管を調ぶる伶倫もなし。遇上ぶしたる月卿雲客も。何となく世中の亂れ。又わが身の上にか來らんずらんと。魂を消し。肝を冷す折ふしなれば。皆肩を顰。面を低てぞ候ひける。夜痛く更て。誰か候と召れければ。吉田の中納言冬房候とて。御前に候す。主上席を近付て仰有けるは。資朝俊基が因し後東風猶未靜ならず。中夏常に危を蹈む。此上に又何なる沙汰をか致さんずらんと。叡慮更に穩かならず。何んして先東夷を定べき謀有んと勅問有ければ。冬房謹で申けるは資朝俊基が、白狀有共承り候はねど。武臣此上の沙汰には及ばじと存候へ共。近日東夷の行跡疎忽の義多く候へば。御油斷有まじきにて候。先御告文一紙を下されて。相摸入道が怒を靜め候ばやと申されければ。主上實もとや思召れけん。さらば聽て冬房書と仰有ければ。則御前にして。草案をして是を奏覽す。君暫く叡覽有て。御涙の告文には。らくとかゝりけるを。御袖にて押拭はせ給へば。御前に候ひける老臣みな。悲涕を含まぬはなかりけり。聽て万里小路大納言宣房の卿を勅使として。此告文を

關東へ下さる。相摸入道秋田城介を以て告文を請取て。則ち披見せんとしけるを。二階堂出羽入道々蘊堅く諫て申けるは。天子武臣に對して直に告文を下されたる事異國にも我朝にも。未だ其例を承はらず。然るを等閑に披見せられん事。冥見に付て。其恐れ有たゞ文箱を披かずして。勅使に返し進らせらるべきかと再往申けるを。相模入道何か苦しかるべきとて。齋藤太郎左衛門利行に讀參らさせられけるに。叡心不レ偽處任二天照覽一と遊ばされたる處を讀ける時に。利行俄に口くるめき。舌たりければ。讀果ずして退出す。其日より喉の下に惡瘡出て。七日の中に血を嘔て死にけり。時澆季に及で。道塗炭に落ぬと云共。君臣上下の禮違則は。さすが佛神の罰も有けりと。是を聞ける人ごとに畏恐れぬはなかりけり。何樣資朝俊基の隱謀。叡慮より出し事なれば。縱告文を下されたりといふ共。それに依べからず。主上をば遠國へ遷し奉るべしと。初は評定一決してけれ共。勅使宣房卿の申されし趣き實もと覺る上。告文よみたりし利行俄に血を嘔て死たりけるに。諸人皆舌を卷。口を閉。相摸入道も。さすが天慮其憚有けるにや。御治世の御事は。朝議に任せ奉る上は。武家辭ひ申べきに非と。勅答を申て。告文を返進せらる。宣房の卿則歸洛して。此由奏し申されけるにこうこう。宸襟始めて解て。群臣色をば直されける。去程に俊基朝臣は。罪の疑がはしきを輕んじて赦免せられ。資朝の卿は。死罪一等を宥られて佐渡の

訂正太平記　卷之二

○南都北嶺行幸の事

元徳二年二月四日。行事の弁の別當。万里小路中納言藤房の卿を召れて。來月八日。東大寺興福寺へ行幸有べし早く具奉の輩に觸仰すべしと。仰出されければ。藤房右きを尋ね例を考へて。供奉の行粧。路次の行列を定らる。佐々木備中守。廷尉に成て。橋を渡し。四十八ヶ所の篝。甲冑を帶し。辻々を固ひ。三公九卿相隨がひ。百司千官列を引。言語道斷の嚴儀あり。東大寺と申は。聖武天皇の御願。閻浮第一の盧舍那佛。興福寺と申は。淡海公の御願。藤氏尊崇の大伽藍なれば。代々の聖主も皆結縁の御志は御座ませ共。一人出給ふ事容易からざれば。多年臨幸の義もなし此御代に至て。絶たるを繼。廢れたるを興して。鳳聲を廻し給しかば。衆徒歡喜の掌を合せ。靈佛威德の光を添。されば春日山の嵐の音もけふよりは。万歳を喜平かと怪しまれ。北の藤波千代かけて。花咲春の陰深し。又同き月廿七日に。比叡山に行幸なつて。大講堂供養有。彼堂と申は。深草天皇の御願。大日邊照の尊像あり。中比造營の後。未供養を遂ずして。星霜已に積ければ。甍破ては。霧不斷の香を燒。扉落ては。月常住の燈を挑されば。滿山歎きて年を經處に。忽ちに修造の大功を遂られ。速に供養の儀式を調へ賜ひしかば。一山眉を開き。九院首を傾り。御導

國へぞ流しける

訂正太平記　卷之一　終

師は。妙法院の尊澄法親王。呪願は時の座主。大塔尊雲法親王にてぞはしましける。稱揚讃佛の砌にハ。鷲峯の花薫を讓り。歌唄頌德の所には。魚山の嵐響をそふ。伶倫渴雲の曲を奏じ。鄭童回雪の袖を翻せば。百獸も卒しさひ。鳳鳥も來儀する計也。住吉の神主。津守の國夏。太鼓の役にて登山したりけるが宿坊の柱に一首の歌をゞ書付たる

契あれゞ此山もみつあのくだら三みやく三ぼだいの種や植劔

是は傳敎大師。當山草創の古へ我立杣に。冥加あらせ給へと。三貌三菩提の佛たちに祈給ひし故事を思ひて讀る歌なるべし。抑元亨以後。主愁へ臣辱められて。天下更に安き時あし。折節こそ多かるに。今南都北嶺の行幸叡願何事やらんと尋れば。近年相摸入道が振舞。日比の不義に超過せり。蠻夷の輩は。武命に順ふ者あれば。召共勅に應ずべからず。只山門南都の大衆を詐ひて東夷を征伐せられん爲の。御謀反とゞ聞へし。是に依て大塔の二品親王は。時の貫主にて御坐か共。今は行學共に。捨はてさせ給ひて。朝暮たゞ武勇の御嗜みの外は他事なし。御好み有故にや依けん。早態は江都が勁捷にも超たれは。七尺の屏風未だ必ずしも高しとせず。打物は子房が兵法を得給へば。一卷の秘書盡されずと云事なし。天台座主始つて。義眞和尙より以來。一百餘代未かゝる不思議の門主は御座さず。後に思ひ合するにこそ。東夷征伐の爲に。御身を習されける。武藝の道とは知れたれ

○僧徒六波羅え召捕事付爲明詠歌事

軍の漏易きは禍を招く媒あれば。大塔宮の御行事禁裏に調伏の法行はるゝ事共。一々に關東へ聞へてけり。相摸入道大きに怒て。いやゝ此君御在位の程は。天下靜まるまじ。所詮君をば。永久の例に任せて。遠國へ移し奉り。大塔の宮を死罪に處し奉るべき也。先近日殊に龍顏に咫尺し奉て。當家を調伏し給ふなる。法勝寺の圓觀上人。小野文觀僧正。南都の知敎。敎圓。淨土寺の忠圓僧正を召捕て。子細を相尋べしと。已に武命を含で。二階堂下野判官。長井遠江守二人關東より上洛す。兩使已に京着せしかば。又何なる荒き沙汰をか致さんずらんと。主上宸襟を惱されける處に。五月十一日の曉。雜賀隼人佐を使にて。法勝寺の圓觀上人。小野文觀僧正。淨土寺の忠圓僧正三人を。六波羅へ召捕奉る。此中に忠圓僧正は。顯宗の碩德なりしかば調伏の法行ふたりと云。其人數には入ざりしか共。是も此君に近付奉て山門の講堂供養以下の事。萬直に申沙汰せられしかば。衆徒與力の事。此僧正にも存ぜられぬ事はあらじとて。同じく召捕れ給にけり。是のみならず知敎々圓二人も。南都より召出されて。同六波羅へ出給ふ。又二條の中將爲明卿は。歌道の達者にて。月の夜雪の朝。褒貶の歌合の御會に召れて。宴に侍る事隙なかりし

かば。差たる嫌疑の人にては無りしか共。叡慮の趣を○尋問れん爲に召捕れて。齋藤某に是を預けらる。五人の僧達の事は。元來關東へ召下して。沙汰有べき事なれば。六波羅にて尋ぬ究むるに及ばず。爲明卿の事に於ては。先京都にて。尋沙汰有て。白狀あらば。關東へ注進すべしとて。檢斷に仰て。已に嗷問の沙汰に及ばんとす。六波羅の北の坪に炭をゝこす事。鍍湯爐壇の如にして。其上に青竹を破て敷ならべ。少し隙を明ければ。猛火焔を吐て烈〻たり。朝夕雜色左右に立並て兩方の手を引張て。其上を歩ませ奉らんと。仕度したる有樣は。たゞ四重五逆の罪人の。焦熱大焦熱の炎に身を焦し。牛頭馬頭の呵責に逢らんも。かくこそあらめと覺へて。見るにも肝は消ぬべし。爲明卿是を見給ひて。硯や有と尋られければ。白狀の爲かとて硯に料紙を取添てければ。白狀にいわらで。一首の歌をぞ書れける

思ひきや我敷島の道ならで浮よの事を問るべしとは

常盤駿河守此歌を見て。感歎肝に銘しければ。涙を流して理に伏す。東使兩人も是を讀て。諸共に袖を浸しければ。爲明い水火の責なのがれて。咎なき人に成にけり。詩歌は朝廷の翫ぶ所。弓馬は武家の嗜む道なれば。其ならはし未だ必しも六義數奇の道に携らね共物類相感ずる事。皆自然なれば此歌一首の感に依て。嗷問の責を止ける。東夷の心の中こそ艶しけれ。力をも入ず

して天地を動かし。目に見へぬ鬼神をも哀と思はせ。男女の中をも和らげ。猛き武夫の心をも慰むるは歌なりと。紀貫之が。古今の序に書たりしも理りなりと覺たり

○三人の僧徒關東下向の事

同年六月八日。東使三人の僧達を具足し奉つて。關東に下向す。彼忠圓僧正と申すは。淨土寺慈勝僧正の門弟として。十題判斷の登科。一山無双の碩學あり。文觀僧正と申い。元は播磨の國。法華寺の住侶たりしが。壯年の比より。醍醐寺に移住して。眞言の阿闍梨たりしかば。東寺の長者。醍醐の座主に補せられて。四種三密の棟梁たり。圓觀上人と申は。元は山徒にて御座けるが。顯密兩宗の才。一山に光有かと疑はれ。智行兼備の譽れ諸寺に人無が如し。然れ共。久敷山門淸濁の風に隨はゞ。上慢の幢高うして。遂に天魔の掌握の中に落ぬべし。如じ公請論場の聲譽を捨て。高祖大師の舊規に歸らんにはと。一度名利の轡を返して。永く寂寞の苦の扉を閉給ふ。初の程は。西塔の黑谷と云所に居を卜て。三衣を荷葉の秋の霜に重。一鉢を松花の朝の風に任せ賜ひけるが。德孤ならず必ず隣あり。大明光を隱さゞりければ。遂に五代聖主の國師として三聚淨戒の大祖たり。かゝる有智高行の尊宿たりといへ共。時の横災をば遁れ給はぬにや。又先世の宿業にや依けん。遠蠻の四となりて。逆旅の月にさすらひ給ふ。不思議ありし事共〻圓觀上人計

こそ。宗印。圓照。道勝とて。如影隨形の御弟子三人。隨逐して輿の前後に供奉しけれ。其外文觀僧正忠圓僧正には。相隨ふ者一人もおくて。怪げなる店馬に乘られて。見馴ぬ武士に打圍まれ。未夜深きに鳥が鳴。東の旅に出給ふ。心の中社哀れなれ。鎌倉迄も下し付ず。道にて失ひ奉るべしなんぞ聞へしかば。彼の宿に着ても。今や限り。此山に休めば。是や限と露の命の有程も心は先に消つべし。昨日も過。今日も暮ぬと行程に。我とは急がぬ道あれど。日數積れば。六月廿四日に。鎌倉にこそ着にけり。圓觀上人をば佐介越前守。文觀僧正をば。佐介遠江守。忠圓僧正をば。足利讃岐守にぞ預けらる。両使歸參して。彼僧達の本尊の形。爐壇の樣繪圖に寫して注進す。俗人の見知べき事ならねば。佐々目の頼禪僧正を請じ奉て。是を見せらるゝに。子細おき調伏の法なりと申されければ。さらば此僧達を嗷問せよとて。侍所に渡して。水火の責をぞ致しける。文觀房暫が程は。何に問れけれ共。落給はざりけるが。水問重りければ。身も疲れ。心も弱くおりけるにや。勃定に依て。調伏の法行たりし條子細なしと白狀せられけり。其後忠圓坊を嗷問せんとす。此僧正天性臆病の人にて。未だ責ざる先に。主上山門を御語らひ有し事。大塔宮の御擧動俊基の隱謀なんぞ。有もわらぬ事迄も殘る所おく白狀一卷に載られたり。此上は。何の疑ひ有べきなれ共。同罪の人なれば。擱べきに非ず。圓觀上人をも明日問奉るべきと。評定

有ける。其夜相摸入道の夢に。比叡山の東坂下より。猿兵二三千群來て。此上人を守護し奉る躰にて並居たりと見給ふ。夢の告徒事ならずと思はれければ。未明に預り人の許へ使者を遣し。上人嗷問の事。暫閣べしと下知せらる處に。預り人遮て。相摸入道の方に來て申けるは。上人嗷問の事。此曉已に。其沙汰を致し候はん爲に。上人の御方へ參て候へば。燭を挑て。觀法定坐せられて候。其御影後の障子に移つて不動明王の形に。見へさせ給ひ候つる間。驚き存て。先事の次第を。申入ん爲に。參て候おりとぞ申ける。夢想と云。示現と云。徒人に非ずとて。嗷問の沙汰を止られけり。同七月十三日に三人の僧達。遠流の在所定て。文觀僧正をば。硫黄が島。忠圓僧正をば。越後の國へ流さる。圓觀上人計をば。遠流一等を宥て。結城上野入道に預けられければ。奥州へ具足し奉り。長途の旅にさすらひ給ふ。左遷遠流と云ぬ計也。遠蠻の外に移されさせ給へば是も只。同し旅程の思ひにて。肇法師が刑戮の中に苦み。一行阿闍梨の火羅國に流されし。水宿山行の悲みも。右やと思ひ知れたり。名取川を過させ給ふとて。土人一首の歌を讀給ふ

陸奥の浮名取川流れきて沈やすてんせゞの埋木

時の天災をば。大權の聖者も遁れ給はざるにや。昔天竺の波羅奈國に。戒定惠の三學の兼備し給

へる。一人の沙門御座けり。一朝の國師として。四海の倚賴たりしかば。天下の人歸依渴仰せる事。恰も大聖世尊の出世成道の如也。有時其國の大王。法會を行ふべき事有て。說戒の導師に。此沙門をぞ請せられける。沙門則ち。勅命に隨て。鳳闕に參せらる。帝折節碁を遊されける砌へ傳奏參て。沙門參內の由こ奏し申けるを。遊ばしける碁に御心を入られて。是を聞召れず。碁の手に付て。截れと仰られけるを。傳奏聞誤まりて。此沙門を截との勅定ぞと心へて。禁門の外に出し則はち沙門の首を刎てけり。帝碁を遊ばし果て。沙門を御前へ召ければ。典獄の官。勅定に隨て首を刎たりと申す。帝大きに逆鱗有て。行死定て後。三奏すといへう。爾るを一言の下に誤りを行ふて。朕が不德を重ぬ。罪大逆に同じとて。則傳奏を召出して。三族の罪に行はれけり。扨此沙門。罪無して死刑に逢給ひぬる事。只事にあらず。前生の宿業にてぞおいすらんと思召れければ帝其故を。阿羅漢に問給ふ。阿羅漢七日が間。定に入て。宿命通を得て。過現を見給ふに。沙門の前生は。耕作を業とする田夫なり。帝の前生は水にすむ。蛙にてぞ有ける。此田夫鋤を取て。春の山田をかへしける時。誤つて鋤のさきにて。蛙の頸をぞ切たりけり。此因果に依て田夫は。沙門と生れ。蛙は波羅奈國の大王と生れ。誤つて又。死罪を行はれけるこそ哀なれ。されば此上人も何なる修因感果の理によるか。かゝる不慮の罪に沈み給ひぬらんと不思議なりし事共なり

○俊基朝臣再關東下向の事

俊基朝臣は。先年土岐十郎頼貞が討れし後。召捕れて。鎌倉迄下り給しか共。樣々に陳じ申されし趣實もとて。赦免せられたりけるが。又今度の白狀共に專らに隱謀の企彼朝臣に在と載たりければ。七月十一日に。又六波羅へ召捕れて。關東へ送られ給ふ。再犯赦さゞるは。法令の定る所なれば。何と陳ずる共許されじ。路にして失はるゝか。鎌倉にて斬るゝか。二の間をば離れじと。思ひ儲てぞ出られけり海道下り落花の雪に踏迷ふ。片野の春の櫻がり紅葉の錦を衣て歸る。嵐の山の秋の暮。一夜を明す程だにも。旅寢とおれば。懶に。恩愛の契り淺からぬ。我古郷の妻子をば行衛も知ず思ひ置。年久敷も住馴し。九重の帝都をば今を限と顧て。思はぬ旅に出給ふ。心の中ぞ哀おる憂をば留ぬ相坂の。關の清水に袖濡て。末は山路の打出の濱沖を遙に見渡せば。曦ならぬ海にこがれ行。身を浮舟の浮沈。駒も轟と踏鳴す勢多の長橋打渡り。行かふ人に近江路や。世のうねの野に鳴鶴も。子を思ふかと哀也。時雨もいたく森山の。木の下露に袖ぬれて。風に露ちる篠原や。篠分る道を過行ば。鏡の山い有とても。泪に曇て見へわかず。物を思へば夜の間にも。老蘇の森の下草に。駒を留て顧る。古郷の雲や隔つらん。番馬醒井柏原。不破の關

やは荒はて丶。猶もる物は秋の雨の。いつか我身の尾張なる。熱田の八劔伏拜み。鹽干に今や鳴海潟。傾く月に道見へて。明ぬ暮ぬと行道の。末はいづくと遠江。濱名の橋の夕鹽に。引人もなき捨小舟。沈果ぬる身にしあれば。誰か哀と夕暮の。晩鐘鳴ば今はとて。池田の宿に着給ふ。元暦元年の比かとよ。重衡の中將の。東夷の爲に囚れて。此宿に着給ひしに。東路の丹生の小屋のいぶせきに。古郷何に戀しかるらんと。長者の娘が讀たりし。其古への哀れまでも。思ひ殘さぬ泪也。旅館の燈幽かにして。鷄鳴曉を催せば。匹馬風に嘶て。天龍川を打渡り。小夜の中山越行ば。白雲路を埋み來て。そこ共知ぬ夕暮に。家郷の空を望みても。昔西行法師が。命なりけりと詠じつ丶。二度越し跡までも。浦山敷ぞ思はれける。隙行駒の足はやみ。日已に亭午に昇ば。餉進らする程とて。輿を庭前に舁とゞむ轅を叩て警固の武士を近付。宿の名を問給ふに。菊川と申也と答へければ。承久の合戰の時院宣書たりし咎に依て。光親卿。關東へ召下されしが。此宿にて誅せられし時

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡
今東海道菊河　宿西岸而終命

と書たりし。遠き昔の筆の跡。今は我身の上に成。哀やいとゞ增り劔一首の歌を詠じて。宿の柱

に又書れける

古へもかゝる例を菊川の同じ流れに身をや沈めん

大井川を過給へは。都に有し名を聞て。龜山殿の行幸の。嵐の山の花盛龍頭鷁首の舟に乘。詩歌管絃の宴に侍りし事も。今は二度見ぬ世の夢と成ぬと。思ひつゞけ給ふ。嶋田藤枝にかゝりて。岡部の眞葛裏枯て。物悲き夕暮に。宇都の山邊を越行ば。蔦楓いと茂て道もおし。昔業平の中將の。住所を求とて。東の方に下とて夢にも人に逢ぬなりけりと讀たりしも。かくやと思ひ知れたり。清見潟を過給へば。都に歸る夢をさへ。返さぬ浪の關守にいとゞ涙を催され。向へはいづこ三穗崎。沖津神原打過て。富士高嶺を見給へば。雪の中より立煙。上なき思ひに比べつ丶。明る霞に松見へて。浮島が原を過行ば。鹽干や淺き船浮て。おり立田子の自らも。浮世を達る車返し。竹の下道行おやむ。足拆山の嶺より。大磯小磯直下して。袖にも波いこゆるぎの。急ぐとしもはなけれ共。日數つもれば。七月廿六日の暮程に。鎌倉にこそ着給ひけれ。其日頓て南條左衛門高直請取奉て。諏訪左衛門に預けらる。一間なる所に。蜘手きびしく結て。押籠奉る有樣只地獄の罪人の。十王の廳に渡されて。頸械手械を入られ。罪の輕重を糺らんもの。かくやと思ひ知れたり

○長崎新左衛門尉異見之事付阿新殿事

當今御謀叛の事。露顯の後。御位は驕て。持明院殿へぞ。參らんずらんと。近習の人々。青女房に至る迄。悅びあへる處に。土岐が討れし後も曾て其沙汰もなし。今又俊基召下されぬれども。御位の事に付ては。何なる沙汰有共聞へざりければ。持明院殿方の人々。案に相違して。五噫を謳者のみ多かりけり。されば兎角。申勸むる人の有けるにや。持明院殿より。內々關東へ。御使を下され。當今御謀叛の企。近日事已に急あり武家速に糺明の沙汰なくば。天下の亂近に有べしと。仰られたりければ。相摸入道實もと驚いて。宗徒の一門幷に頭人評定衆を集めて。此事何が有べきと。各所存を問る。然れども或は他に讓て口を閉。或は己れを顧て言を出さゞる處に。執事長崎入道が子息。新左衛門尉高資。進み出て申けるは。先年土岐十郎が討れし時。當今の御位を。改め申さるべかりしを。朝憲に憚て。御沙汰緩かりしに依て。此事猶未止ず。乱を撥て治を致すは。武の一德あり。速に當今を遠國に遷し進せ。大塔宮を不返の遠流に處し奉り。俊基資朝以下の亂臣を一々に誅せらるゝより外は。別義有べし共存じ候はずと。憚る所なく申けるを。二階堂出羽の入道々蘊。暫く思案して申けるは。此義尤然るべく聞へ候へ共。退て愚案を廻らすに。武家權を取て。已に百六十餘年。威四海に及び。運累葉を輝す事。更に他事なし。唯上一人を仰奉て。忠貞に私なく。下は百姓を撫て。仁政に施し有故あり。然るに今の君の寵臣を一両人召置れの

御歸依の高僧兩三人流罪に處せらるゝことも。武臣惡行の專一と云つべし。此上に又。主上を遠所へ迁し參らせ。天台座主を流罪に行れん事。天道奢を惡むのみならず。山門爭でか憤りを含ざるべき。神怒人そむかば。武運の危に近かるべし。君々たらずといへ共。臣以て臣たらずんば有べからずと云り。御謀反の事。君縱ひ思召立共。武威盛あらん程は。與し申もの有べからず。是に付ても。武家彌愼て勅命に應せば。君もなど思召直す事無らん。かくてぞ國家の太平。武運の長久にて候はんと存ずるは。面々何ん思召候と申けるを。長崎新左衛門尉。又自餘の意見をも待ず。以の外に氣色を損じて。重て申けるい。文武撥一ッなりと云共。用捨時に異あるべし。靜かある世には。文を以て彌治め。亂れたる時は。武を以て急に靜む。故に戰國の時には。孔孟用るに足ず。太平の世には。干戈用る事無に似り。事已に急に當りたり。武を以て治むべきなり。異朝には。文王武王。臣として無道の君を討し例あり。吾朝には。義時泰時。下として不善の主を流せし例あり。世皆是を以て當れりとす。されば古典にも君臣を見る事。土芥の如する時は。臣君を見る事。冦讐の如すと云り。事停滯して。武家追伐の宣旨を下されなば。後悔す共益有べからず。只速に。君を遠國に遷し進せ。大塔の宮を硫黃が島へ流し奉り。隱謀の逆臣資朝俊基を誅せらるゝより。外の事有べからず。武家の安泰。万世に及べしと社存じ候へと。居長高に成て申

ける間。當座の頭人評定衆權勢にや阿けん。又愚案にや落けん。皆此義に同じければ。道臨再應の忠言に及ばず。眉を顰て退出す。去程に。君の御謀叛な。申勸けるは。源中納言具行。右少辨俊基。日野の中納言資朝あり。各死罪に行はるべしと。評定一途に定て。先去年より。佐渡の國へ流されておはする。資朝卿を斬奉るべしと。其國の守護本間山城入道に。下知せらる。此事京都に聞へければ。此資朝の子息。國光の中納言。其比は阿新殿とて歳十三にておはしける。父の卿召人に成給しより。仁和寺邊に隱れて居られけるが。父誅せられ玉ふべき由を聞て。今は何事にか。命を惜むべき。父と共に斬れて。冥途の旅の供をもし。又最期の御有樣をも見奉るべしとて。母に御暇をぞ乞れける。母御頻に諫て。佐渡とやらんは。人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道あれば何ゝとしてか下るべき。其上汝にさへ離てゝ。一日片時も命存べし共覺へずと。泣悲しみて止ければ。よしや伴ひ行人なくば。いか成淵瀨にも。身を投て死なんと申ける間母甚とめば。又目の前に憂別も有ぬべしと思ひ詫て。力なく今迄只一人付副たる。中間を相添られて。遙々と佐渡の國へぞ下ける。路遠けれ共。乘べき馬もなければ。はきも習ハぬ草鞋に。菅の小笠を傾ぶけて。露分わくる越路の旅思ひやる社哀なれ。都を出て十日餘と申に。越前の敦賀の津に付にけり。これより商人船に乘て。程なく佐渡の國へぞ着にける。人して右と云

べき便りもなければ。自ら本間が館に至て。中門の前にぞ立たりける。折節僧の有けるが。立出て此内への御用にて御立候か。又何なる御用にて候ぞと問ければ。阿新殿是は日野中納言の一子にて候が。近日斬れさせ給ふべしと承て、其最後の樣をも。見候はんが爲に。都より遙々と尋ぬ下て候と云もあへず。泪をはら〳〵と流しければ。此僧心有ける人なりければ。急ぎ此由を本間にかたるに。本間も岩木ならねば。さすが哀にや思ひけん。聽て此僧を以て。持佛堂へ誘ひ入て。踏皮行纏脫せ足洗て。疎あらぬ躰にてぞ置たりける。阿新殿是を嬉しと思ふに付ても。同くは父の卿を。疾見奉らばやと云れけれ共。今日明日斬るべき人に是を見せては。中々黃泉の障共成ぬべし。又關東の聞へも何があらんずらんとて。父子の對面を許さず。四五町隔てたる所に置たれば。父の卿ハ是を聞て。行末も知ぬ都に。何が有んと思やるよりも尙悲し。子は其方を見やりて。浪路遙に隔てたりし。鄙の住居を思ひやって。心苦しく思ひつる。涙は更に數ならずと。袂の乾く隙もなし。是てそ中納言のおはします。籠の中よとて見やれば。竹の一村茂りたる處に堀ぼり廻し。塀塗て。行通ふ人も稀也。情あの本間が心や。父は禁籠せられ。子は未だ稚なし。縱ひ一所に置たり共。何程の怖畏か有べきに。對面をだに許さで。まだ同じ世中ながら生を隔たる如くにて。亡らん後の苦の下。思ひ寐に見ん夢ならでは。逢見ん事も有難しと。互に悲しむ恩愛

の。父子の道社哀なれ。五月廿九日の暮程に資朝卿を。籠より出し奉て。遙に御湯も召れ候はぬに御行水候へと申せば。早斬るべき時にありけりと思ひ給て嗚呼うたてしき事哉。我最期の樣を見ん爲に。遙々と尋下たる少なき者を。一目も見ずして終ぬる事よと計宣ひて。其後は曾て諸事に付て。言をも出し給はず。今朝迄は氣色しほれて。常には涙を押拭ひ給ひけるが。人間の事に於ては。頭燃を拂ふ如に成ぬと悟てたゝ。綿密の工夫の外は。餘念有共見へ給はず。夜に入ば。輿さしよせて乘奉り爰より十町計有。河原へ出し奉り。輿舁居たれば。少しも臆したる氣色も無く。敷皮の上に居直て。辭世の頌を書給ふ。

五蘊假成形　四大今歸空
將首當白刃　截斷一陣風

年號月日の下に。名字を書付て。筆を閣給へば。切者後へ廻るとぞ見へし。御首は敷皮の上に落て。闕は猶坐せるが如し。此程常に法談あんどし給ける僧來て。葬禮形の如く執營み空しき骨を拾ふて。阿新に奉りければ。阿新是を一目見て。取手も撓く倒伏。今生の對面終に叶はずして。替れる白骨を見る事よと。泣悲しむも理り也。阿新未だ幼稚なれ共。けなげなる所存有ければ。父の遺骨をば。只一人召仕ひける。中間に持せて先我より先に高野山に參て。奥の院とかやに收

ひよとて。都へ歸し上せ。我身は勞はる由にて。猶本間が館にぞ留りける。これは本間が情なく。父を今生にて。我に見せざりつる。鬱憤を散せんと思ふ故也。斯て四五日經ける程に。阿新晝は病よしにて。終日に臥し。夜は忍びやかにぬけ出て。本間が寢所なんど細々に伺ふて。隙有ば彼入道父子が間に。一人さし殺して腹切んずる物をと。思ひ定てぞねらひける。或夜雨風烈しく吹て。番する郎等共も。皆遠侍に臥たりければ。今こそ待所の幸よと思て。本間が寢處の方を。忍びて伺ふに本間が運や强かりけん。今夜は常の寢處をかへて。いづくに有共見へず。又二間なる所に燈の影の見けるを。是はもし本間入道が子息にてや有ん。それなり共討て。恨みを散せんと。ぬけ入て是を見るに。それさへ爰にはなうして。中納言殿を斬奉りし。本間三郎と云ものぞ。只一人臥たりける。よしや是も。時に取ては親の敵也。山城入道に劣るまじと思て。走りかからんとするに。我は元來。太刀も刀も持ず。只八の太刀を我物と頼たるに。燈殊に明かなれば。立よらば。驚て驚き合事もや。あらんずらんと危て。左右なく寄ねず。何がせんと。案じ煩ふて立たるに。折節夏なれば。燈の影を見て。蚊と云虫の數多。明り障子に取付たるを。すは。や究竟の事社有と思て。障子を少し引明たれば。此虫。數多内へ入て。やがて燈を打けしぬ。今は右と嬉しくて。本間三郎が枕に立寄て探るに。太刀も刀も枕に有て。主は痛く寐入たり。先

刀を取て腰にさし。太刀をぬいて心もとに指當て。寢たる者を殺せば。死人に同じければ驚さんと思て。先足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を。一の太刀に臍の上を。疊まつと突とをし。返す太刀に喉ぶゑ指切て。心閑に後の笹原の中へぞ隱れける。本間三郎が。一の太刀に胸を通されて。あつと云聲に。番衆共驚き騷で。火を燃して是を見に。血の付たちいさき足跡あり。扨は阿新殿の所爲あり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出じ。搜出して打殺せとて。手でに松明を燃し。木の下草の陰迄。殘る所なうぞ探しける。阿新は竹原の中に隱れながら。今い何くへか遁るべき。人手に懸らんよりは。自害をせばやと思はれけるが。惡しと思ふ親の敵をば討つ。今は何にもして。命を全ふして。君の御用にも立。父の素意をも達したらんこそ。忠臣孝子の義にてもあらんずれ。若やと一まど落て見ばやと思ひ返して。はりを飛越んとしけるが。口二丈。深さ一丈に餘りある堀なれば越べき樣も無りけり。さらば是を橋にして。渡らんよと思て。堀の上に。末靡きたる呉竹の梢へさら〳〵と上りたれば。竹の末堀の向へ靡き伏て。安々と堀をば越てけり。夜は未深し湊の方へ行て。舟に乘て社陸へは著めと思て。だぞる〳〵浦の方へ行程に。夜もはや次第に明離て。忍ぶべき道無れば。身を隱さん迚。日を暮し。麻や蓬の牛蒡りたる中に。隱れ居たれば。追手共と覺しき者共。百四五十騎馳散て。若十二三計なる兒

や通りつると。道に行合人ごとに。問音してぞ過行ける。阿新其日は麻の中にて。日を暮し。夜になれば湊へと心ざして。そこ共知ず行程に。孝行の志を感じて佛神擁護の眸をや廻らされけん。年老たりし山伏一人行合たり。此兒の有樣をみて。痛はしくや思れけん。是は何處より何處をさして御渡り候やと問ければ。阿新事の樣を。有の儘にぞ語ける。山伏是を聞て。我此人を助けずば。只今の程に。かはゆき目を見るべしと思ひければ。御心安く思召れ候へ。湊に商人船多く候へば。乘奉て。越後越中の方迄。送り付進すべしと云て。足たゆめば此兒を肩にのせ背中に負て。程なく湊にぞ行付ける。夜明て便船や有と尋けるに。折節湊の中に。船一艘もなかりけり。何がせんと求る處に。遙の沖に乘浮べたる大船。順風に成ぬと悅て。檣を立笘をまく。山伏手を揚て。其船是へ寄てたび候へ。便船申さんと呼いりけれ共。曾て耳にも聞入ず船人聲を帆に上て。湊の外に漕出す。山伏大に腹を立て。柿の衣の裾を結で肩にかけ。沖行舟に立向て。いらたか誦珠を。さら〳〵と押揉で。一持秘密呪。生々而加護。奉仕修行者猶如薄伽梵と云り。況や多年の勤行に於てをや明王の本誓あやまらずい。權現金剛童子。天龍夜叉。八大龍王。其船此方へ漕返して。たばせ給へと跳り上り〳〵肝膽を碎てぞ祈りける。行者の祈り神に通じて。明王擁護やし給ひけん。沖の方より。俄に惡風吹來て。此船忽ち覆らんとしける間。船人共慌て。

山伏の御坊先我等を御助け候へと。手を合せ膝を屈め。手々に船を漕戻す。汀近く成ければ。船頭舟より飛下て兒を肩にのせ。山伏の手を引て。屋形の内に入たれば。風は又もとの如くに直りて船は湊を出にける。其後追手共っ百四五十騎馳來り。遠淺に馬を控へて。あの船止と招け共。舟人是を見ぬ由にて。順風に帆を揚たれば。船は其日の暮程に。越後の府にぞ付にける。阿新山伏に助けられて。鰐の口の死を逃れしも。明王加護の御誓ひ掲焉かりける驗なり

○俊基被誅事幷助光が事

俊基朝臣ハ。殊更謀反の張本なれば遠國に流す迄も有べからず。近日に鎌倉中にて。斬奉るべしとぞ定られける。此人多年の所願有て。法華經を六百部。自ら讀誦し奉るが。今二百部殘りけるを。六百部に滿る程の命を。相待れ候て其後。兎も角も。なされ候へと。頻に所望有ければ。實もそれ程の大願を果させ奉らざらんも罪なりとて。今二百部の終る程。僅か日數を待暮す。命の程こそ哀なれ。此朝臣の多年召仕ひける青侍に後藤左衛門尉助光と云者あり。主の俊基召捕れ給し後。北の方に付參らせ。嵯峨の奥に忍びて候ひけるが。俊基關東へ召下され給由を聞給ひて。北の方は。堪ぬ思ひに伏沈みて。歎き悲しみ給ひけるを見奉るに。悲しみに堪ずして。北の方の御文を給つて。助光忍びて。鎌倉へぞ下りける。今日明日の程と聞へしかば。今は早斬れも

やし給ひつらんと。行逢人に。事の由を問々。程なく鎌倉にこそ着にけれ。右少辨俊基の。おはする傍に宿を借て。何成便りもがな。事の子細を申入むと。伺ひけれ共。叶はずして。日を過しける所に。今日こそ京都よりの召人は。斬れ給ふべきなれ。あな哀やなんど沙汰しければ。助光こは何がせんと汗を消し。此彼に立て見聞しければ。俊基已に。張輿に乘られて。粧坂へ出給ふ爰にて工藤二郎左衛門尉請取て。葛原が岡に大幕引て。敷皮の上に座し給へり。是を見ける。助光が心の中。譬て云ん方もなし。目くれ足もなへて。絶入計に有けれ共。泣々工藤殿が前に進み出て。是ハ右少辨殿の伺候の者にて候が。最後の樣見奉り候ハん爲に。遙々と參り候然るべくは御免を蒙て御前に參り。北の方の御文をも。見參に入候はんと。申も敢ず。涙をはらゝと流しければ。工藤も。見るに哀れを催されて。不覺の泪せきあへず。子細候まじ。はや幕の内へ御參候へとぞ許しける。助光幕の内に入て。御前に跪く俊基は助光を打見て。何にやと計宣ひて。頓て涙に噎び給ふ。助光も北の方の御文にて候迚。御前に差置たる計にて。是も涙にくれて。顔をも持あげず泣居たり。良暫く有て。俊基涙を押拭ひ。文を見給へば。消かゝる露の身の置所なきに付ても。何なる暮にか無世の別と承ハり候はんずらんと。心を擺く涙の程。御推量りも猶淺くなんと詞に餘て思ひの色深く。黑み過る迄書れたり。俊基いとゞ涙にくれて讀兼給へるけし

き。見る人袖をぬらさぬはなかりけり。硯や有と宣へば。矢立を御前にさし置ぬ。硯の中なる小刀にて。髪のかみを少し切て。北の方の文に卷そへ。引返し一筆書て。助光が手にわたし給へば。助光懐に入て。泣沈みたる有様理りにも過て哀也。工藤左衛門幕の内に入て。餘りに時の移ん候と勸れば。俊基疊紙を取出し。頸の廻りを押拭ひ。其紙を押開て辭世の頌を書給ふ

古來一句　無死無生
万里雲盡　長江水清

筆を閣て髪の髪を按給ふ程こそあれ。太刀陰後に光れば。首は前に落けるを。自ら抱て伏給ふ。是を見奉る。助光が心の中。譬て云ん方もなし。扨泣々死骸を葬し奉り。空敷遺骨を首にかけ。躰身の御文身に添て。泣々京へぞ上りける。北の方い。助光を待付て。辨殿の行衛を聞む事の嬉さに。人めも憚らず。簾より外に出向ひ。何にや辨殿は。何比御上り有べしとの。御返事ぞと問給へば。助光はら〳〵と涙をこぼして。はや斬れさせ給ひて候。是ころ今はの際の御返事にて候へとて髪の髪と消息とを差上て。聲も惜まず泣ければ。北の方は。形見の文と白骨を見給ひて。内へも入給はず。樣に倒伏し消入給ぬと驚く程に見へ給ふ。理りなる哉。一樹の陰に宿り。一河の流れを汲程も知れず知ぬ人にだに別れとなれば名殘を惜む習ひなるに。況や連理の契り淺から

ずして。十年餘りにありぬるに。夢より外は又も相見ぬ此世の外の別と聞て。絶入悲しみ給ふぞ理りなる。四十九日と中に。形の如の佛事營みて。北の方。樣を替濃黑染に身をやつし。柴の扉の明暮は。亡夫の菩提をぞ吊ひ給ける。助光も髻切て。永く高野山に閉籠て。偏に亡君の後生菩提をぞ吊ひ奉りける。夫婦の契り。君臣の義無跡までも留りて。哀れなりし事共なり

○天下怪異の事

嘉暦二年の春の比南都大乘院禪師房と。六坊の大衆と。確執の事有て合戰に及ぶ。金堂講堂。南圓堂。西金堂忽ちに。兵火の餘烟に燒失ぬ。又元弘元年。山門東塔の北谷より兵火出來て。四王院。延命院。大講堂。法華堂。常行堂一時に灰燼と成ぬ。是らをころ天下の災難を。兼て知する處ろ前相かと人皆魂を冷しけるに。同年の七月三日大地震有て。紀伊國千里濱の遠干潟。俄にくが地に成事廿餘町也。又同七日の酉の刻に。地震有て。富士の絶頂崩る丶事數百丈なりと卜部の宿禰。大龜を燒て占なひ。陰陽の博士。占文を啓て見るに。國王位を易。大臣災に遭と有。勘文の表穩ならず。尤御愼み有べしと密奏す。寺々の火災所々の地震徒事に非ず。今や不思議出來ると。人々心を驚しける處に。果して其年の八月廿二日。東使兩人。三千餘騎にて上洛すと聞へしかば。何事とい知ず。京に又何成事やあらんずらんと。近國の軍勢我も〳〵と馳集る。京

中何とかく。以の外に騒動す。両使已に京着して。未だ文箱をも開かぬ先に。何とかして聞へけん。今度東使の上洛は。主上を遠國へ遷し進せ。大塔宮を。死罪に行ひ奉らん爲なりと。山門に披露有ければ。八月廿四日の夜に入て。大塔宮より潛に御使を以て。主上へ申させ給ひけるハ。今度東使上洛の事。内々承り候へば。皇居を遠國へ移し奉り。尊運を死罪に行はん爲にて候なる。今夜急ぎ南都の方へ御忍び候べし。城廓未調らず。官軍馳參せざる先に。凶徒もし皇居に寄來らば。身方防ぎ戰ふに利を失ひ候はんか。且ハ京都の敵を遮り止んが爲。又は衆徒の心を見んが爲に。近臣を一人。天子の號を許されて。山門へ上せられ。臨幸の由を披露候はゞ。敵軍定て敵山に向て。合戰を致し候はんか。去程あらば。衆徒吾山を思ふが故に。防ぎ戰ふに。身命を惜んじ候べし。凶徒力疲れ。合戰數日に及び候はゞ。伊賀。伊勢。大和、河内の官軍を以て。却て京都を攻られんに。凶徒の誅戮踵を廻すべからず。國家の安危。只此一擧に有べく候ありと。申されたりける間。主上只呆させ給へる計にて。何の御沙汰にも及び給はず。尹の大納言師賢。万里小路中納言藤房。同舍弟季房三四人。上臥したるを。御前に召れて。此事何が有べきと。仰出されければ。藤房卿進て申されけるは。逆臣君を犯し奉らんとする時。暫く其難をさけて。還て國家を保つは前蹤皆佳例にて候。謂ゆる重耳は翟に走り。大王豳に行。共に王業をなして子孫無窮に光を

輝かし候き。兎角の御思案に及び候はゞ。夜も深候なん。早御忍び候へとて御車を差寄。三種の神器を乘奉り。下簾より。出絹を出して女房車の躰に見せ。主上を扶け乘進らせて。陽明門よりなし奉る。御門守護の武士共。御車をさゝへて。誰にて御渡り候ぞと問申ければ。藤房季房二人。御車に隨て。供奉したりけるが。是は中宮の夜に紛て北山殿へ行啓ならせ給ふと宣たりければ。扨は仔細候いじとて。御車をゞ返しける。衆て用意やしたりけん。源中納言具行。按察大納言公敏。六條少將忠顯。三條河原にて追付奉る。是より御車をば止られ。怪しげなる。張輿に召かへさせ進らせたれ共。俄の事にて。駕輿丁もなかりければ。大膳太夫重康樂人豊原兼秋隨身秦の久武あんどぞ御輿をば舁奉りける。供奉の諸卿。みな衣冠を脱で折ゑぼしに直垂を着し。七大寺詣でする。京家の青侍なんどの女姓を具足したる躰に見せて。御輿の前後にゞ。供奉したりける。古津の。石地藏を過さひ給ひける時。夜は早若〻と明にけり。此にて朝餉の供奉を進め申て。先南都の東南院へ入せ給ふ。彼僧正元來二心あき忠義を存せしかば。先臨幸ありたるをば披露せで。衆徒の心を伺聞に。西室の顯實僧正は。關東の一族にて。權勢の門主たる間。皆其威にや恐れたりけん。與力する衆徒も無りけり。かくては南都の皇居叶ふまじとて。翌日廿六日。和束の鷲峯山へ入せ給ふ。是は又餘りに山深く里遠くして。何事の計略も叶ふまじき處なれば。要害に御陣

を召るべしとて。同廿七日潛幸の儀式を引つくろひ。南都の衆徒少々召具せられて笠置の石室へ臨幸なる

○師賢登山の事付唐崎濱合戰事

宇の大納言師賢の卿は。主上内理を御出有し夜。三條河原迄供奉せられたりしを。大塔宮より。樣樣仰られつる仔細あれば。臨幸の由にて。山門へ上り。衆徒の心をも伺ひ。又勢をも付て合戰を、致せと仰られければ。師賢法勝寺の前より。袞龍の御衣を着し。瑤輿に乘替て山門の。西塔院へ上り給ふ。四條中納言隆資。二條中將爲明。中院左中將貞平。皆衣冠正しうして。供奉の躰に相順ふ。事の儀式誠しくぞ見たりける。西塔の釋迦堂を皇居と成さる。主上山門を御憑有て。臨幸ありたる由。披露有ければ。山上坂本は申に及ばず。大津。松本。戸津。比叡辻。仰木。絹川。和仁。堅田の者迄も我先にと馳參る。其勢東西両塔に充滿して。雲霞の如くにぞ見たりける。かゝりければ。六波羅には。未曾て是を知ず。夜明ければ。東使両人。内裏へ參て。先行幸を。六波羅へあし奉らんとて。打立ける處に。淨林房阿闍梨豪譽が許より。六波羅へ使者を立て。今夜の寅の刻に。主上山門へ御憑有て。臨幸成たる間。三千の衆徒盡く馳參り候。近江越前の御勢を待て。明日は。六波羅へ寄らるべき由。評定有。事の大に成候いぬ先に急ぎ東坂本へ御勢を向られ候へ。

豪譽後攻仕て。主上をば取奉るべしとぞ申たりける。兩六波羅大に驚て。先内裏へ參て見奉るに。主上は御ざなくて只局町の女房達此彼にさし集ひて。泣聲のみぞしたりける。扨い山門へ落させ給たる事子細あし。勢つかぬ先に。山門を攻よとて。四十八ヶ所の籌に畿内五ヶ國の勢を差添て。五千餘騎追手の寄手として赤山の麓下松の邊へ差向らる。搦手へは佐々木三郎判官時信。海東左近の將監。永井丹後守宗衡。筑後前司貞知。波多野上野前司宣道。常陸前司時朝に。美濃。尾張。丹波。但馬の勢を差添て。七千餘騎。大津松本を經て。唐崎の松の邊迄寄懸たり。坂本にい。兼てより。相圖を差たる事なれば。妙法院。大塔宮。兩門主。宵より八王子へ御上り有て。御旗を揚られたるに。御門徒の護正院の僧都祐全。妙光坊の阿闍梨玄尊を始として。三百騎。五百騎。此彼より馳參りたる程に。一夜の間に。御勢六千餘騎に成にけり。天台座主を始て。解脫同相の御衣を脫給て。堅甲利兵の御貌に替り垂跡和光の砌忽ちに變じて。勇士守禦の塲と成ぬれば神慮も何があらんと。計難くぞ覺へたる。去程に。六波羅勢。已に戸津の宿の邊迄。寄たりと。坂本の内應動しければ。南岸の圓宗院。中坊の勝行房。早雄の同宿共。取物もとり敢ず。唐崎の濱へ出合ける。其勢皆歩立にて。しかも三百人には過ざりけり。海東是を見て。敵は小勢なりけるぞ。後陣の勢の重らぬ先に懸散さでは叶ふまじ。續けや者共と云儘に。三尺四寸の太刀を拔て。鎧の射

向の袖をさしかざし。敵の渦卷て扣へたる。眞中へ懸入。敵三人切伏。波打際に扣へて續く身方を待たりける。岡本坊の播磨の竪者快實。遙に是を見て。前につき並べたる。持楯一挺岸破と踏倒し。二尺八寸の小長刀。水車に廻して。跳り懸る。海東是を弓手に受、冑の鉢を。眞二つに打破んと。片手打に打にけるが。打外して。袖の冠板より。菱縫の板迄。片筋かひに懸す切て落す。二の太刀を。餘りに強く切ん迚弓手の鐙を踏おり。已に馬より落んとしけるが。乘直りける所を。快實長刀の柄をとり延。內冑へ鉾さ上りに。二つ三つ。隙間もなく入たりけるに。海東わやまたず。喉ぶへを突れて馬より。眞倒に落にける。快實頓て海東が上卷に乘懸り。髮の髮を掴で。引懸て。首かき切て。長刀に貫き。武家の大將一人討取たり。物の始よしと悅んで冷笑ふてぞ立たりける。爰に何者とは知ず。見物衆の中より。年十五六計なる小兒の。髮唐輪に上たるが。麹塵の筒丸に。大口のろば高く取。金作の小太刀を拔て。快實に走かゝり冑の鉢を。したゝかに。三打四打ぞ打たりける。快實屹と。振歸て是を見るに。齡二八計ある小兒の。大眉に鐵漿黑也。是程の小兒を。打留たらんゝ。法師の身に取ては情なし。打じとすれは走懸り〳〵。手繁く切廻りける間。よし〳〵されば長刀の柄にて。太刀を打落して。組留んとしける處を。比叡辻の者共が。田の畔に立渡て。射けり横矢に。此兒胸板をつと射拔れて。矢庭に伏て死にけり。後に誰ぞと尋

れば。海東が嫡子幸若丸と云ける小兒父が留め置けるによつて。軍の供をばせざりけるが。猶も覺束なくや思ひけん。見物衆に紛れて跡に付て來りける也。幸若稚しといへ共。武士の家に生れたる故にや。父が討れけるを見て同く戰場に討死して。名を殘しけるこそ哀なれ。海東が郎等是を見て。二人の主を目の前に討せ。剩首を敵に取せて。生て歸る者や有べき迚。三十六騎の者共。書を並て懸入主の死がいを枕にして。討死せんと相爭ふ。快實是を見て。からゝと打笑ふて。心得ぬ者かな。御邊たちは。敵の首をこそ取んずるに。躬方の首を欲がるは。武家自滅の瑞相顯れたり。欲がらばすは取せんと云儘に。持たる海東が首を敵の中へかばと投懸。坂本樣の拜み切。八方を拂ふて火を散す三十六騎の者共。快實一人に切立られて。馬の足を立兼たり。佐々木三郎判官時信。後に扣へて躬方討すな。繼けやと下知しければ。伊庭。日賀多。木村。馬淵。三百餘騎嘆で懸る。快實已に討れぬと見なける處に。桂林坊の惡讃岐。中の坊の小相摸。勝行坊の侍從竪者定快。金蓮坊の伯耆直源四人右左より渡り合て。鉾を差合て切て廻り。讃岐と直源と同じ所にて討れにければ。後陣の衆徒五十餘人つれて。又討て懸る。唐崎の濱と申は。東は湖にて其汀崩れたり。西は深田にて。馬の足も立ず。平沙渺々として道せばし。後へ取廻さんとするも叶はず。中に取籠んとするも叶はず。されば衆徒も寄手も互に面に立たる者ばかり戰ふて。

後陣の勢は徒に。見物してぞ扣たり。已に唐崎に。軍始りたりと聞ねければ。御門徒の勢三千餘騎。白井の前を。今路へ向ふ。本院の衆徒七千餘人。三の宮林を下降る。和仁堅田の者共は。小船三百餘艘に取乘て。敵の後を遮らんと。大津を指て漕廻す。六波羅勢是を見て叶はじとや思ひけん。志賀の閣麗堂の前を横切に。今路に懸り引返す。衆徒は案内者なれば。此彼の逼々に落合て。散々に射る。武士は皆無案内なれば。堀際共いはず。馬を馳倒して引兼ける間。後陣に引ける。海東が若黨八騎波多野が郎等十三騎。眞野、入道父子二人平井九郎主從二騎。谷底にして討れにけり。佐木の判官も。馬を射させて。乘替を待程に。大敵左右より取卷て。已に討れぬと見ねけるを。名を惜み。命を輕んずる若黨共。返し合せ〳〵所々にて討死しける其間に万死を出て一生にあひ。白晝に京へ引返す。此比迄は。天下久敷靜にして。軍と云事は敢て耳にも觸ざりしに俄なる不思議出來ぬれば。人皆慌て騒で天地も只今。打返す樣に。沙汰せぬ所もなかりけり

○持明院殿六波羅へ御幸の事

世上亂れたる折ふしなれば。野心の者共の。取進らする事もやとて。昨日廿七日の巳の刻に。持明院。本院春宮。両御所。六條殿より六波羅の北の方へ御幸成。供奉の人々には。今出川前右大臣兼季公。三條大納言通顯。西園寺の大納言公宗。日野の前中納言資名坊城の宰相經顯。日野宰

相資明。みな衣冠にて。御車の前後に相從ふ。其外の北面諸司格勤は。大略狩衣の下に。腹卷を着。映したるも有。洛中須臾に變化して。六軍翠花を警固し奉り。見聞耳目を驚かせり

○主上臨幸依レ非實事一山門變儀事付紀信が事

山門の大衆唐崎の合戰に打勝て。事始よしと喜び合る事斜ならず。爰に西塔を皇居に定らる條。本院面目無に似たり。壽永の古へ。後白河院山門を御憑み有し時も先横川へ御登山有しか共。聽て東塔の南谷。圓融坊へこそ御移り有しが。且は先蹤なり。且は吉例なり。早く臨幸を。本院へなし奉るべしと。西塔院へ觸送る。西塔の衆徒共理に折て仙蹕を促さん爲に。皇居に參列す折節深山おろし烈しうして御簾を吹上たるより。龍顏を拜し奉たれば。主上にてはおいしまさす。尹大納言師賢の。天子の衮龍を着し給へるにてぞ有けり。大衆是を見てこは何成天狗の所行ぞやと。興をさます。其後よりは。參る大衆一人もなし。角ては山門何ある野心をか存せんずらんと覺ねければ。其夜の夜半計に。尹大納言師賢。四條中納言降資。二條中將爲明。忍で山門を落て笠置の石室へ參らるゝ。去程に上林房阿闍梨豪譽は。元來武家へ心を寄しかば。大塔宮の執事。安居院中納言法印澄俊を生捕て六波羅へ是を出す。護正院僧都猷全は。御門徒の中の大名にて。八王子の。一の木戸を堅めたりしかば。角ては叶はじとや思ひけん。同宿手の者引連て。六波羅へ降

參す。是を始として一人たち。二人落ち落行ける間今は光林房律師源存妙光房の小相摸中の坊の惡律師。三四人より外は落止まる衆徒もなかりけり。妙法院と大塔宮とは其夜迄も、猶八王子に御坐有けるが。角ては惡かりぬべし。一まども落延て。君の御行末をも承はらばやと思召れければ。廿九日の夜半計に。八王子に篝火を數多所に燒て未大勢籠りたる由を見せ。戸津の濱より小舟に召れ落止る所の衆徒三百人計を召具せられて先石山へ落させ給ふ。此にて兩門衆一所へ落させ給はん事は。計略遠からぬに似たる上。妙法院は。御行歩もかひ〳〵しからねば。只暫く此邊に御ざ有べしとて。石山より二人引別れさせ給て。妙法院は笠置へ越させ給へば。大塔宮は十津川の奥へと志て。先南都の方へぞ落させ給ける。さしもやんごとなき。一山の貫主の位を捨て。未習せ給いぬ万里漂泊の旅にうかれさせ給へい。醫王山王の結緣も。是や限りと名殘惜く竹苑蓮枝の再會も今い。何をか期すべきと。御心細く思召れければ。互に隔たる御影の。隱るゝ迄に顧みて泣々東西へ別れさせ給ふ。御心の中社悲しけれ。抑今度。主上實に。山門へ臨幸ならざるに由て衆徒の心忽ちに變せし事一旦事あらずと云共。倩事の樣を案ずるに。是叡智の淺からざる所に出たり。昔强秦亡て後。楚の項羽と。漢の高祖と國を爭ふ事。八ヶ年。軍を挑む事七十餘ケ度なり。其戰ひの度毎に項羽常に勝に乘て。高祖甚はだ苦しめる事多し或時高祖滎陽城に

籠り。項羽兵を以て。城を圍事數百重なり。日を經て城中に。粮盡て。兵疲れければ。高祖戰はんとするに力なく。遁れんとするに道なし。此に高祖の臣に。紀信と云ける兵。高祖に向て申けるは。項羽今。城を圍みぬる事數百重。漢已に食盡て。士卒又疲たり。もし兵を出して戰はゞ。漢必ず。楚のために擒とならん。只敵を欺きて。潛に城を遁出んにはしかじ。願はくば臣今。漢王の諱をおかして。楚の陣に降せん。楚こゝに圍を解て臣を得は漢王速に城を出て。重て大軍を興し。却て楚を亡ぼし給へと申ければ。紀信が忽に楚に降て殺れん事悲しけれ共。高祖社稷の爲に。身を輕くすべきに非ねば。力なく泪をおさへ。別れを戀ながら。紀信が謀に從ひ給ふ。紀信大きに悅んで。自ら漢王の御衣を着し。黃屋の車にのり。左右をつけて。高祖の罪を謝して。楚の大王に降すと呼りて。城の東門より出たりける。楚の兵是ぞ聞て。四面の圍き解て一所に集る。軍勢みな万歲を唱ふ。此間に高祖三千餘騎を從へて。城の西門より出て。成皐へぞ落給ひける。夜明て後。楚に降る。漢王を見れば。高祖には非ず。其臣の紀信と云ものなりけり。項羽大に怒て。遂に紀信を刺殺す。高祖やがて成皐の兵を卒して。却て項羽を攻。項羽が勢つきて後。遂に烏江にて討れしかば高祖。永く漢の王業を興して天下の王となりにけり。今主上も。かかりし佳例を思召。師賢もかやうの忠節を存せられけるにや。彼は敵の圍を解せんがために僞り。

是は敵の兵を遮らん爲に謀れり和漢時異なれ共。君臣體を合せたり誠に千歳一遇の忠貞。臣刻變化の智謀あり

訂正太平記　卷之二終

訂正太平記　卷之三

○主上御夢の事付楠が事

元弘元年。八月廿七日主上笠置へ臨幸成て。本堂を皇居となさる。始一兩日の程は。武威に恐て。參り仕ふる人。獨りもおかりけるが。叡山東坂本の合戰に。六波羅勢打負ぬと聞ければ。當寺の衆徒を始めて近國の兵共。此彼より馳參るされ共未だ。名ある武士、手勢百騎共二百騎共。打せたる大名は一人も參ぜず。此勢計にては。皇居の警固いかゞ有べからんと。主上思し召頻はせ給ひて。少し御まどろみ有ける御夢に。所ゝ紫宸殿の庭前と覺えたる地に。大きなる常盤木有。綠の陰茂りて。南へさしたる枝。殊に榮ゑ蔓これり。其下に三公百官。位に依て列座す。南へ向たる上座に御座の疊を高く敷て。未だ座したる人ゝなし。主上御夢心地に。誰を設けんための。座席やらんと。怪く思召てたゝせ賜ひたる處に。髮づら結たる童子二人。忽然として來て主上の御前に跪き。涙を袖にかけて申けるは。一天下の間に暫くも。御身を隱さるべき所なし。但あの樹の陰に。南へ向へる座席あり。これ御爲に設けたる玉扆にて候へば。暫くこれに御座候へと申て。童子は遙の天に登さりぬと御覽じて。御夢は驚て覺にけり。主上是ゝ朕に。告る所の夢ありと思召て。文字に付て御料簡有に。木に南と書たるは楠といふ字也。其陰に南に向ふ

て座せよと。二人の童子の敷へつるは。朕再び。南面の德を治めて。天下の士を朝せしめんずる所を。日光月光の玄めされけるよと。自ら御夢を合されて。たのもしくこそ思召されけれ。夜明ければ。當寺の衆徒成就房の律師を召れ。もし此邊に。楠といはるゝ武士や有と。御尋有ければ。近き傍に左樣の名字付たる者あり共未だ承り及び候はず。河內國金剛山の西にころ。楠多門兵衛正成とて。弓矢取て。名をゐたる者は候なれ。是は敏達天皇四代の孫。井手の左大臣橘の諸兄公の後胤たりといへども。民間にくだつて年久し。其母若かりし時。志貴の毘沙門に百日まふでて。夢想を感じて設けたる子にて候とて。幼名を多門とは申候なりとぞ。こたへ申ける主上扨は今夜の夢の告是ありと思召て。頓て是を召と仰下されければ。藤房卿勅を承りて。急き楠正成をぞ召れける。勅使宣旨を帶して楠が館へ行向ふて。事の子細を演られければ。正成弓矢とる身の面目何事か是に過じと思ひければ。是非の思案にも及ばず。先忍びて笠置へぞ參りける。主上万里小路の中納言藤房卿を以て仰られけるは。東夷征伐の事。正成を賴み思召るゝ子細有て。勅使を立らるゝ處に。時刻移さず馳參る條。叡感淺からざる所也。抑天下草創の事。如何ある謀を廻らしてか。勝事を一時に決して。太平を四海に致さるべき。所存を殘さず申べしと。勅定有ければ。正成畏て申けるは。東夷近日の大逆たゞ天の責を招き候上は。衰亂の費に乘て。天誅を

致さるゝに。何の子細か候べき。但天下草創の功は。武略と智謀との二ツにて候。若し勢を合て戰はゞ。六十餘州の兵を集て。武藏相摸の両國に對す共。勝事を得かたし。もし謀をもて戰はゞ。東夷の武力。只だ利を挫き。堅を破る內を出ず。これ欺くに易して。恐るゝに足ざる所なり。合戰の習にて候へば。一旦の勝負をば必ずしも御覽せらるべからず。正成一人。未だ活て有と聞し召れ候はゞ。聖運終に開かるべしと。思召れ候へと。顯もしげに申て。正成ハ河內へ歸りけり

○笠置軍の事付陶山小見山夜討の事

去程に主上笠置に御座有て。近國の官軍。付隨ひ奉る由。京都へ聞へければ。山門の大衆又力を得て。六波羅へ寄事もや。あらんずらんとて。佐々木判官時信に。近江一國の勢を相添て。大津へ向らるれも猶小勢にて。叶ふまじき由を申ければ。重て丹波國の住人。久下長澤の一族等を差副て。八百餘騎。大津の東西の宿に陣をとる。九月一日。六波羅の両檢斷糟谷三郎宗秋。陶田ノ次郎左衞門。五百餘騎にて宇治の平等院へ打出て。軍勢の着到を告るに。催促をもまたず。諸國の軍勢。夜晝引も切らず馳集て。十万餘騎に及べり。既に明る二日の巳の刻に推寄て。矢合せ有べしと。定めたりける其前の日。高橋又四郎拔懸して。獨り高名に備へんとや思ひけん。

纒に一族の勢三百餘騎を卒して。笠置の麓へ寄たりける。城に籠る所の官軍はさまで大勢ならずと云へ共勇氣未だ撓まず。天下の機を呑て。回天の力を出さんと思へる者共なれば。纒の小勢を見て。なじかは打て懸ざらん。其勢三千餘騎。木津川の邊におり合て。高橋が勢を取こめて。一人も餘さじと責戰かふ。高橋始めの勢ひにも似ず。敵の大勢を見て。一返しも返さず。捨鞭を打て引ける間。木津川の逆まく水に追浸され討る〳〵者其數若干なり。纒に命計を扶かるものも。馬物の具を捨て赤裸にあり。白晝に京都へ逃のぼる。見苦しかりし有樣也。是を惡しと思ふものやしたりけん。平等院の橋爪に一首の歌をかきてゞ立たりける

木津川のせゞの岩波はやけれゞ懸て程なく落る高橋

高橋が拔懸を聞て。引ば入替かへて高名せんと跡に續きたる。小早川も。一度に皆追立られ一返しも返さず。宇治まで引たりと聞へければ。又札を立副て

懸もはぬ高橋落て行水に浮名を流す小早川かな

昨日の合戰に。官軍打勝ぬと聞へあば。國々の勢はせ參て。難義成事もこそあれ。時日を移すべからずとて。兩檢斷うぢにて。四方の手分を定めて。九月二日笠置の城へ發向す。南の手へは。五畿內五ヶ國の兵を向らる。其勢七千六百餘騎。光明山の後を廻りて。搦手に向ふ。東の手には。東海道十五ヶ國の內。伊賀。伊勢。尾張。參河。遠江の兵を向らる其勢二万五千餘騎。伊賀路を經て。金剛山越に向ふ。北の手にハ。山陰道八ヶ國の兵共。一万二千餘騎。梨間の宿のはづれより。市野邊山の麓を廻りて追手へ向ふ。西の手へは。山陽道八ヶ國の兵を向らる。其勢三万二千餘騎。木津川を上りに。岸の上成畠道を二手に分て推寄る。追手搦手都合其勢七万五千餘騎。笠置の山の四方二三里が間は。尺地も殘らず充滿したり。明れば九月三日の卯の刻に。東西南北の寄手。相近づきて。喊を作る。其聲百千の雷の。鳴落るが如くにして。天地も動く計あり。喊の聲三度あげて。矢合せの流鏑を射かけたれ共。城の中靜まり還りて。時の聲をも合せず。當の矢をも射ざりけり。彼笠置の城と申は。山高うして。一片の白雲峯を埋み。谷深うして。万尋の青岩道を遮る九折なる道を廻りて。揚る事十八町。岩を切て堀とし。石を疊て塀とせり。されば縱防ぎ戰ふ者なく共。容易く登事を得難し。されば共城中。鳴を靜めて人有共見ねざりければ。敵はや落たりと心得て。四方の寄手七万五千餘騎堀がけ共謂ず。葛の蔓に取付て。岩の上を傳て。一の木戸口の邊二王堂の前までゞ寄たりける。爰にて一息やすめて。城の中をきつと見あげければ。錦の御旗に。日月を金銀にて。打て付たるが白日に輝きて。光り渡りたる其陰に。透間も無。甲たる武者三千餘人。冑の星を輝かし。鎧の袖を連て。雲霞の如くに並居たり。其外櫓の上。挾間

の影には。射手と覺しき者共。弓の弦くひしめし。矢たばね解てをしくつろげ。中指にはなあぶら引て。待かけたり。其勢決然として。肯て責べき樣なさ。寄手七萬餘騎是を見て進まんとするも叶はず。引んとするも叶はずして。心あらず支たり。良暫く有て。木戸の上なる櫓より挾の板を開て名乘けるは。參河の國の住人足助の次郎重範。忝も一天の君に賴まれ參らせて。此城の一の木戸を堅たり。先陣に進みたる旗は。美濃尾張の人々の。旗と見るは僻目か。十禪の君の。おわします城なれば。六波羅殿や。御向ひ有んずらんと心得て。御儲の爲に大和鍛冶の。きたふて打たる。鏃を少々用意仕て候。一筋うけて御覽じ候へと云まゝに。三人張の弓に十三束三伏。箆かづきの上まで引かけ。暫堅て。丁と放つ。その矢遙なる谷を阻て。二町餘が外に扣へたる。荒尾九郎が鎧の千檀の板を。右の小脇まで箆かにぐさと射こむ。一矢なりといへ共。究竟の矢坪あれば。荒尾馬より逆さまに落て。起もあをらで死にけり。舍弟の彌五郎。是を敵に見せじと、矢面に立隱て。楯のはづれより。進み出て云けるは。足助殿の御弓勢。日比承り候し程はなかりけり。此を遊ばし候へ。御矢一筋受て。物の具の實の程。心み候はんと欺きて。弦走りを敵さてぞ立たりける。足助是を聞て。此者の云やうは。何さま鎧の下に。腹卷か。鎧かを重て着たればこそ。前の矢を見ながら。此を射よとは敵らん。もし鎧の上を射ば。箆摧け。鏃折て。通ぬ事もてそなれ。

胃の眞向を射たらんに。などか碎て通らざらんと思案して。胡籙より金磯頭を一つ拔き出し。鼻油引て。さらば一矢仕候はん。受て御覽候へと云ふ儘に。暫く鎧の高組をはづして。十三束三伏。前よりも猶引しぼりて。手答へ高くはたと射る。思ふ矢坪を違へず荒尾彌五郎が。胃の眞向。金物の上。二寸計碎て。眉間の眞中を。くつまさ責て。ぐさと射箆たりければ。二言とも云ず。兄弟同じ枕に。倒れ重て死にけり。是を軍の始として追手搦手城の内。おめぎ叫て責戰かふ。矢叫の音。時の聲暫しも止時なければ。大山も崩れて海に入。坤軸も折て忽ち地に沈かとぞ覺へける。晩景になりければ。寄手彌重りて。持楯をつきよせ〳〵。木戸口の邊迄。攻たりける。爰に南都般若寺より。卷數を持て參りたりける使。本性房といふ大力の律僧ありけるが褊衫の袖を結びて。引違へ。尋常の人の百人しても。動し難さ。大磐石を。輕〳〵と脇に挾み。鞠のせいに引かけ〳〵。二三十。つゞけ打にぞ投たりける。數万の寄手。楯の板を微塵に打碎るゝのみにあらず。少しも此石に當るもの尻居に打居られければ。東西の坂に。人頽を築て。人馬いやが上に落重なる。さしも深き谷二つ。死人にてこそ塡たりけれ。されば軍散じて後迄も。木津川の流れ血にありて。紅葉の陰を行水の。紅深に異あらず。是より後は寄手雲霞の如しといへ共。城を攻んと云者一人もなし。たゞ城の四方を圍めて。遠攻にこそしたりけれ。角て日數をへける處に同

月十一日河内の國より。早馬を立て。楠兵衛正成と云もの。御所方に成て旗をあぐる間。近邊の者共。志有は同心し。志なきは。東西に逃隠る。則國中の民屋を追伏して。兵粮の爲に運び取。己が館の上なる。赤坂山に城廓を掻へ。其勢五百騎にて楯籠候。御退治延引せば。事御難義に及候なん。急ぎ御勢を。向らるべしとぞ告申ける。是をこそ。珍事ありと騒ぐ處に。又同十三日の晩景に。備後の國より。早馬到來して。櫻山四郎入道。同一族等御所方に參て旗を揚。當國の一宮を城廓として楯籠る間。近國の逆徒等。少々馳加へりて其勢已に。七百餘騎。國中に打靡け。剰他國へ打越んと企て候夜を日に繼で。討手を下されず候はゝ。御大事出來ぬと覺候。御油斷有べからずとぞ告たりける。前には笠置の城強して。國々の大勢。日夜責れ共未だ落ず。後には又楠櫻山の逆徒大に起りて。使者日々に急を告。南蠻西戎は已に亂れぬ。東夷北狄も又何が有んずらんと。六波羅の北の方。駿河守。安さ心もなかりければ。日々に早馬を打せて。東國の勢をぞ請れける。相摸入道大きに驚きて。さらば聽て。討手をさし上せよとて。一門他家。宗徒の人々。六十三人迄ぞ催されけり。大將軍には。大佛陸奥守貞直。同遠江守。普恩寺。相模の守。鹽田越前守。櫻田三河守。赤橋尾張守。江間越前守。絲田左馬頭印具兵庫亮。佐介上總の介。名越右馬助。金澤の右馬助貞冬。遠江左近の太夫將監治時。足利治部太輔高氏。侍大將には。長崎四郎左

衛門尉。相したがふ侍には三浦介入道。武田甲斐次郎左衛門尉。椎名孫八入道。結城上野入道。小山出羽入道。氏家美作の守。佐竹上總入道。長沼四郎左衛門入道。土屋安藝の權守。那須加賀權の守。梶原上野太郎左衛門尉。岩城次郎入道。佐野安房の彌太郎。木村次郎左衛門尉。相馬右衛門次郎。南部三郎次郎。毛利丹後の前司。那波左近の太夫將監。一宮善民部の太夫。土肥佐渡の前司。宇都宮安藝の前司。同肥後の權の守。葛西三郎兵衛尉。寒河の彌四郎。上野の七郎三郎。大内山城の前司。長井治部少輔。同備前の太郎。同因幡民部の太輔入道。筑後の前司下總の入道。山城の左衛門の太夫。宇都宮美濃の入道。岩崎彈正左衛門尉高久。同孫三郎。同彦三郎。伊達入道。田村刑部太輔入道。入江蒲原の一族。横山猪俣の兩黨。此外武藏。相摸。和泉。駿河。上野五ヶ國の軍勢。都合廿万七千六百餘騎。九月廿日。鎌倉を立て同じく晦日先陣已に美濃。尾張。兩國に着ば。後陣は猶未だ高志二村の峠に支へたり。爰に備中の國の住人陶山藤三義高。小見山次郎某。六波羅の催促に從て。笠置の城の寄手に加りて。川向ひに陣を取て居たりけるが。東國の大勢。已に近江に着ぬと聞しければ。一族若黨共を集て申けるゝ。御邊たち何が思ぞや。此間數日の合戰に。石に討れ。遠矢に當りて死ぬる者。幾千万といふ數を知ず。是皆さして。去出したる事もなくて死ぬれば骸骨未だかはかざるに。名は先立て消ゑ去ぬ。同じ死ぬる命を。人目にあまる程の軍を一度して死たらば。名譽

は千歳に留て。恩賞は。子孫の家に盛ん。倩々平家の亂より以來。大剛の者とて。名を古今に揚たる者共を案ずるに。何れもそれ程の。高名とい覺へず。先熊谷平山が。一の谷の先駈は。後陣の大勢を賴みし故也。梶原平三か二度のかけは。源太を助けんが爲也。佐々木三郎が。藤戸を渡りしは。案内者の玄わざ。同四郎高綱が。宇治川の先陣は生食故也。是らをだに今の世迄語り傳へて。名を天下の人口に殘すぞかし。何に況んや。日本國の武士共が集りて數日せむれ共落しえぬ此城を。我等が勢計にて。攻落したらんは。名は古今の間に並びなく。忠は万人の上に立べし。いざや藤原今宵の雨風の紛れに。城中へ忍び入て。一夜討して。天下の人に。目を醒させんと云ければ五十餘人の一族若黨尤然るべしとぞ同じける。是皆千に一つも生て歸る者あらじと。思ひ切たる事なれば。兼ての死出立に。皆曼陀羅を書てぞ付たりける。差縄の十丈計長を二筋。一尺計おきては結び合〳〵して。其端に熊手を結付て持せたり。是は岩石おどの。登れざらん所をば。木の枝岩の角に打かけて。登ん爲の仕度なり。其夜は九月晦日の事なれば目さす共知ぬ闇き夜に。雨風烈く吹て。面を向べき樣もおかりけるに。五十餘人の者共。太刀を背に負。刀を後にさして。城の北に當りたる石べいの。數百丈聳へて。鳥も翔がたき所よりぞ登ける。二町計は兎角して上りつ。其上に一段高き所あり。屏風を立たる如くある。岩石重りて古松枝を垂。蒼苔露滑かあり。こゝに至て人皆。何に共すべき樣おくして。遙に見あげて立たりける處に。陶山藤三岩の上をさら〳〵と走り上て件のさし縄を。上なる木の枝に懸て。岩の上よりたろしたるに。跡なる兵共各是に取付て。第一の難所をば易〳〵と皆上りてけり。それより上にハ。さまでの險阻おかりければ。或は葛の根に取付。或は苔の上を爪立て。二時計に辛苦して。塀の際迄着てけり。爰に一息休て。各々塀を上り越。夜廻りの通りける跡に付て。先城の中の。案内をぞ見たりける。追手の木戸西の坂口は伊賀伊勢兵。千餘騎にて固たり。搦手に對する東の出塀の口をば。大和河内の勢。五百餘騎にて堅たり。南の坂二王堂の前をば。和泉紀伊國の勢七百餘騎にて固たり。かの北の口一方は。嶮を賴まれけるにや。警固の兵をば一人も置れず。只云甲斐なげある下部共。二三人櫓の下に薦を張り。篝を燒て眠居たり陶山小見山城を廻て四方の陣をば早見澄しつ。皇居は何くやらんと窺ひて。本堂の方へ行所に。ある役所の者是を聞付て。夜中に大勢の足音して潛に通るは怪しき物かな。誰人ぞと問ければ陶山吉次取敢ず。是ハ大和勢にて候が。今夜餘りに雨風烈くして。物騷く候間。夜討や忍び入候ハんずらんと存候て。夜廻り仕り候へと。答へ申ければ。實と云音して。又とゝ事も無りけり。是より後は中〳〵恐びたる躰もなく面々の御陣に。御用心候へと。高らかに呼りて。閑々と本堂へ上りて見れば是ぞ。皇居ぞ覺て。蠟燭數多所にとも

されて。振鈴の聲幽なり。衣冠正しくしたる人。三四人大床に被候ゑて。警固の武士に誰か候と尋られければ。其國の某し〳〵と名乗て回廊にゑかと並居たり。陶山皇居の様迄見澄して。今はかうと思ければ。鎮守の前にて一禮をいたし本堂の上なる峯へ上つて。人も無き坊の有けるに。火を懸て。同音に時の聲を擧四方の寄手是を聞すはや城中に回忠の者出來て。火を懸たるは。時の聲を合よやとて。追手搦手七萬餘騎聲〳〵に時を合て。喚ぎ叫ぶ。其聲天地を響して。何成須彌の八万由旬成共崩ぬべくぞ聞へける。陶山が五十餘人の兵共城の案内は。只今委く見置たり。此の役所に火をかけては。彼に時の聲をあげ。彼に時を作ては。こゝの櫓に火をかけ。四角八方に走り廻て。其勢城中に充滿たるやうに聞へければ。陣々堅たる。官軍共。城の中に。敵の大勢責入たりと心得て。物〻を脱捨弓矢をかなぐり捨て。壑堀共云ず倒れ轉びてぞ落行ける。錦織の判官代是を見て。遙き人々の振舞かな。十禪の君に賴れ參せて。武家を敵に受る程の者共が。敵大勢なればとて。戰はで逃る様や有。いつの爲に惜むべき命ぞやとて。向ふ敵に走懸り〳〵大は だ脱に成て戰ひけるが。矢種を射盡し。太刀を打折ければ。父子二人並に。郎等十三人をの〳〵腹かき切て。同じ枕にふして死にけり

○主上笠置を御没落の事

去程に類火東西より吹れて。餘烟皇居に懸りければ。主上を始進せて。宮々卿相雲客皆歩跣なる躰にて。いづくを指共なく。足に供て落行玉ふ。此人々。始一二町が程こそ。主上を扶進て。前後に御供をも申されたりけれ。雨風烈しく。道闇して敵の時の聲此彼に聞へければ次第に別々に成て。後にゝ只。藤房季房二人より外は。主上の御手を引進する人もなし。忝も十禪の天子。玉躰を田夫野人の形に替させ給て。ろて共知ず迷出させ給ける。御有様社淺猿けれ。何にもして夜の中に。赤坂の城へと。御心計を盡されけれ共。假にも未習せ給はぬ御歩行なれば。夢路をたどる御心地して。一足には休み二足には立止り。晝は道の傍なる。青塚の蔭に。御身を隠させ給て。塞草の疎なるを。御座の褥とし。夜は人も通はぬ野原の露分迷はせ給て。羅殼の御袖をほし敢ず。兎角して夜晝三日に。山城の多賀郡なる有王山の麓迄。落させ給てけり。藤房も季房も。三日迄口中の食を斷ければ。足たゆみ身疲て。今はいか成日にあふ共。逃ぬべき心ちせざりければ。爲方なくて。幽谷の岩を枕にて。君臣兄弟諸共に。現の夢に臥し玉ふ。梢を拂ふ松の風を。雨の降かと聞し召れて。木陰に立寄せ給たれば。下露のはら〳〵と。御袖に懸りけるを。主上御覽ぜられて

さして行笠ぎの山を出しより天が下には隠れがもなし

藤房卿涙を押へて

いかにせん賴む影とて立寄ゞ猶袖濡す松の下露

山城國の住人。深須入道。松井藏人二人。此邊の案内者ありければ。山々峯々殘る所なく搜しける間。皇居隱あく尋出されさせ給ふ。主上誠に。怖しげ成御氣色にて汝等心有者ならば。天恩を戴て。私の榮花を期せよと。仰られければ。さしもの深須入道。俄に心變じて。哀此君を隱奉て。義兵を揚ばやと思けれ共。跡につゞける松井が所存知難かりける間。事の漏易して。道の成難からん事を量て。默止けるこそうたてけれ。餓の事にて。綱代の輿だに無ければ。張輿の怪けあるに。扶乘參らせて。先南都の內山へ入奉る其躰只。殷の湯王夏臺に囚はれ越王會稽に降せし。昔の夢に異あらず。是を見る人ごとに。袖をぬらさずと云事。なかりけり。此時此彼にて。生捕れ給ひける人々には。先一の宮中務卿親王。第二の宮妙法院尊澄法親王。翠の僧正春雅東南院僧正聖尋。万里小路大納言宣房。花山院大納言師賢。按乘大納言公敏。源中納言具行。侍從中納言公明別當左衛門督實世。中納言藤房。宰相季房。平宰相成輔。左衛門督爲明。左中將行房。左少將忠顯。源少將能定。四條少將隆兼。妙法院の執事澄俊法印。北面諸家の侍共には。左衛門太夫氏信。右兵衛太夫有清。對馬の兵衛重定。太夫將監兼秋。右近衛將監宗秋。

雅樂兵衛尉則秋。大學助長明。足助次郎重則。宮內亟能行。大河原源七左衛門尉有重余良法師に。俊宗敎密行海。志賀良木治部房圓實。近藤三郎左衛門尉宗光。國村三郎入道定法。源左衞門入道慈願。奥入道如圓。六郎兵衞入道淨圓。山徒には。勝行房定怪習禪坊淨運。乘實房實孫。都合六十一人。其所從眷屬共に至る迄は。計るに遑あらず。或は籠輿に召れ。或は傳馬に乘れて。白晝に京都へ入玉ひければ。其かた樣かと覺へたる。男女巷に立並て。人目をも憚ず泣悲しむ。淺猿かりし有樣也。十月二日。六波羅の北の方。常盤駿河守範貞。三千餘騎にて。道を警固仕て。主上を。宇治の。平等院へあし奉る。其日關東の両大將京へは入ずして。直に宇治へ參向ひて。龍顏に謁し奉り。先三種の神器を渡し給ひて。持明院の新帝へ參らすべき由を奏問す。主上藤房をもて。仰出されけるは。三種の神器は。古へより。繼躰の君。位を天に受させ給ふ時。自らこれを授け奉るもの也。四海に威を振ふ逆臣ありて。暫く天下を。掌に握る者有といへ共未だ此三種の重器を。自ら專にして。新帝に渡し奉る例を聞ず。其上內侍所をば。笠置の本堂に捨置奉りしかば。定めて。戰場の灰燼にこそ落させ給ひぬらめ。神璽ハ。山中に迷ひし時木の枝にかけ直しかば。終にはよも我國の。守りとならせ給はぬ事あらじ。寶劍は武家の輩もし天罰を願ずして。玉躰に近づき奉る事あらば。自ら其刃の上に。伏せ給はんずる爲に暫

くも。御身を放たる事有まじきなりと。仰られければ。東使両人も。六波羅も。言おうして退出す。翌日に龍駕を廻らして。六波羅へ成參らせんとしけるを。前々臨幸の儀式あらでは。還幸あるましき由を。しゐて。仰せ出されける間。力なく鳳輦を用意し近衛を調進しける間。三日迄平等院に御逗留有てゞ。六波羅へは入せ給ひける。日來の行幸に事替て。鳳輦は數万の武士に打圍まれ月郷雲客は。怪げなる籠輿。傳馬に扶け乘られて。七條を東へ。河原を上りに。六波羅へと。急がせ給へば。見る人涙を流し。聞人心を傷しむ。悲きかなや。昨日は紫震。北極の高に座して。百司禮義の粧ひを刷しに。今日は白屋東夷の賤しきに下らせ給ひて。万卒守禦の密しきに。御心を腦まされ。時移り事去り。樂み盡て悲しみ來る天上の五衰八間の一炊。只夢かとのみぞ覺したる。遠からぬ。雲の上の御住居。いつしか思召出す。御事多折節時雨の音の一通り。軒ばの月に過けるを聞召れて

住馴ぬ板やの軒の村時雨音を聞にも袖はぬれけり

四五日有て中宮の御方より。御琵琶を進らせられけるに御文あり御覽ずれば

思ひやれ塵のみ積る四の緒に拂もあへずかゝるなみだを引返して御返事有けるに

涙ゆへなかゞの月はかくる共ともに見しよの影は忘れじ

同八日両撿斷。高橋刑部左衛門。糟谷三郎宗秋。六波羅へ參て。今度生捕れ給ひし人々を。一人づゝ大名は預らる。一宮中務の卿親王をば。佐々木判官時信。妙法院二品親王をば。長井左近の太夫將監高廣源中納言具行をば。筑後の前司貞知。東南院僧正をば。常陸の前司時朝。万里小路中納言藤房。六條少將忠顯二人をば。主上に近侍し奉るべしとて。放し召人のごとくにて。六波羅にぞ止置れける。同九日。三種の神器を。持明院の新帝の御方へ渡さるゝ。堀川の大納言具親。日野中納言資名。是を請取て長講堂へ送り奉る。其御警固には。長井弾正藏人水谷兵衛蔵人。但馬民部太夫。佐々木隠岐判官清高。をゞ置ける。同十三日に新帝登極のよしにて長講堂より。だいりへ入せ玉ふ。供奉の諸卿花と折て行粧を引つくろひ。隨兵の武士甲冑を帶して非常を警むいつしか。先帝奉公の方様には。咎が有も咎なきも何なる憂めをか見んずらんと。事に觸て身を危ぶみ心を擺ば。當今拜趨の人々い。忠有も忠なきも。今に榮花を開ぬと。目を悅こはしめ。耳をこやす。子むすんで影をなし。花落て枝を辭す。窮達時を替。榮辱道を分つ。今に始ぬ浮世なれ共。殊更夢と現とを分兼たりしは此時なり

○赤坂の城軍の事

遙々と東國より上りたる大勢共。未だ近江の國へも入ざる前に。笠置の城已に落ければ。無念の

事に思ひて。一人も京都へは入ず。或は伊賀伊勢の山を經。或は宇治醍醐の道を横切て。楠兵衛正成が楯籠ける。赤坂の城へぞ向ひける。石川河原を打過て。城の有様を見やれば。俄に拵たりと覺て。墓々敷堀をもはらず。纔に塀一重塗て。方一二町には過じと覺へたる。其内に櫓二三十が程掻双べたり。是を見る人ごとに。あゝ哀の敵の有様や。此城我等が。片手に載て投る共投べし。あはれ責ていか成不思議にも。楠が一日こらへようし。分捕高名して。恩賞に預からんと。思はぬ者こそ無けれ。されば寄手三十万騎の勢共打寄ると等く。馬を踏放々。堀の中に飛入櫓の下に立並て。われ先に打入んとぞ爭ひける。正成は元より。謀を。幃幄の中に運し。勝事を千里が外に決せんと陳平張良が肺肝の間より流出せるが如きの者ありければ。究竟の射手を。二百餘人城中に籠て。舍弟の七郎と。和田五郎正遠とに。三百餘騎を指副て。よその山にぞ置たりける。寄手は是を思ひもよらず。心を一片に取て。只一揉に。揉落さんと。同時に皆。四方の切岸の下に付たりける所を。櫓の上挾間の陰より指詰引詰鏃を支へて射ける間。時の程に手負死人。千餘人に及べり。東國の勢共。案に相違して。いや〳〵此城の躰たらく。一日二日には落まじかりけるぞ。暫く陣々を取て。役所を搆へ。手分をして。合戰を致とて攻口を少し引退き。馬の鞍を下し。物の具を脱て。皆幃幕の内にぞ。休居たりける。楠七郎。和田五郎。遙の山より直下し

て。時刻よしと思ひければ。三百餘騎を二手に分。東西の山の木蔭より。菊水の旗二流れ。松の嵐に吹なびかせ。靜に馬を歩せ。煙嵐をまひてをし寄たり。東國の勢是を見て。敵か身方と。たゞらひあやしむ處に。三百餘騎の勢共。兩方より。喊を咄作て。雲霞の如に驟さたる卅万騎が中へ。魚鱗かゝりに駈入。東西南北へ破て通り。四方八面を切て廻るに寄手の大勢。呆て陣をかしかねたり。城の中より。三つの木戸を。同時に颯と擁開て。二百餘騎。及鉾を双て打て出。手崎をまはして散々に射る。寄手さしもの大勢なれ共。纔の猷に驚き騒て或は繋げる馬に乘て。あおれ共すゝまず。或は弛せる弓に矢をはげて。射とすれ共射れず。物の具一領に。二三人取付て。吾よ人のよと。引合ける其間に。主打れ共。從者は知ず。親討るれ共。子も助けず。蜘の子を散すがごとく。石川河原へ引退ぞく。其道五十町が間。馬物の具を乘たる事。足の蹈み所もなかりければ。東條一群の者共は俄に徳ついてぞ。見へたりける。さしもの東國勢。思ひの外に仕損じて。初度の合戰に負ければ。楠が武略侮にくしとや思ひけん。吐田奈良原邊に。各々打寄たれ共。驍又推寄んとは擬せず。爰に暫く扣へて。纔内の案内者を先に立て。後攻の。無やうに山を苅廻り。家を燒拂ひて。心易城を攻べきなんぞ。評定有けるを。本間澁谷の者共の中に。親打れ。子打れたる者多かりければ。命活ては何かせん。よしや我勢計あり共馳向て打死せんと憤ける

問。諸人皆是に激され。我も〳〵と馳向ひけり。彼赤坂の城と申は。東一方こそ。山田の畔重々に高く。少し難所のやうなれ。三方は皆平地につゞきたるを。壕一重に。塀一重ぬりたれば。何成鬼神が籠りたり共。何程の事か有べきと。寄手みな是を侮り。又寄ると齊しく。堀の中。切岸の下迄せめ付て。逆木を引のけて。打て入んとしけれ共。城中には。音もせず。是はいか樣。昨日の如く。手負を多く射出してたゞよふ所へ。後詰の勢を出して。揉合せんずるよと心得て。寄手十万餘騎を分て。後の山へさし向て殘る廿万騎。稻麻竹葦の如く城を取卷てゞ責たりける。かゝりけれ共。城の中よりは。矢の一筋をも射出さず。夏に人有共。見へざりければ。寄手彌氣に乘て。四方の塀に手をかけ。同時に上り越むとしける處を。もとより塀を。二重に塗て。外の塀をば。切て落やうに拵へたりければ。城の中より。四方の塀の釣縄を。一度に切て落したりける間。塀に取付たる寄手。千餘人壓に打れたるやうにて。目計働く所を大木大石を。投かけ〳〵打ける間。寄手又。今日の軍にも。七百餘人討れけり。東國の勢共。兩日の合戰に手懲をして今は城を攻んとする者。一人もなし。只其近邊に陣〳〵を取て。遠責に社したりけれ。四五日が程は箇樣にて有けるが。餘りに闇然として。守り居たるもいふかひなしっ方四町にだに足ぬ平城に。敵四五百人籠りたるを。東八ケ國の勢共が。責かねて。遠責したる事の淺猿さよなんど後迄も。

人に笑はれん事こそ口惜けれ。前々は。早りのまゝ。楯をも衝ず。責具足をも。支度せで責れば社坐に人は損じつれ。今度は質替て責べしとて。面々に持楯をはかせ。其表に。いため皮を當て。轟く打破れぬやうに拵て。かづきつれてゞ責たりける。切岸の高さ堀の深さいく程もなければ。走懸て塀に着ん事は。最安く覺しけれ共。是も又釣塀にてや有んと。危みて。左右なく塀には着ず。皆堀の中におり濱りて。熊手を懸て塀を引ける間。已に引破れぬべく。見へける處に。城の内より。拆の一二丈長き柄杓に。熱湯の湧翻たるを酌て懸たりける間。冑の天邊綿がみのはづれより。熱湯身にとをりて。燒爛ければ。寄手堪へかねて。楯も熊手も打捨て。颯と引ける見苦さ。矢庭に死する迄社おけれ共。或は手足を燒れて立も揚らず。或は五躰を損じて病臥者。二三百人に及べり。寄手術を替て責れば。城の内にも。巧に替て防ける間。今い兎も角も。爲べき樣なくして。只食責にすべしとゞ議せられける。かゝりし後い。一向軍を止て。已が陣々に櫓をかき。逆木を引て。遠責にころしたりけれ。是に社中々城中の兵共。あぐさむ方もなく。氣も疲ぬる心地してけるっ楠此城を搆へたる事暫時の事なりければ。墓々敷兵粮おゞ用意もせざれは。合戰始て城を圍たる事。纔に廿日あまりに城中兵粮盡て。今四五日の食を殘せり。かりければ。正成諸卒に向て云けるは。此間數箇度の合戰に打勝て。敵を亡す事數を知ずといへ

共。敵大勢なれば。敢て物の數共せず。城中已に食盡て。援の兵なし。本より天下の士卒に先立て。蒼創の功を志とする上は。節にあたり義に臨てい命を惜むべきにあらず。然りといへ共。事に臨みて恐れ。謀を好みてなすは。勇士の爲る所あり。されば暫く此城を落て。正成自害したる躰を。敵に知せんと思ふなり。其故い。正成自害したりと見及ばゞ。東國の勢。定めて悅びをなして下向すべし。下らば正成打て出。又上らば深山に引入。四五度が程東國勢を惱たらんに。あゞか退屈せざらん。是身を全して敵を亡ぼす計略あり。面々如何計給ふと云ければ。諸人皆然るべしとゞ同じける。さらば迎。城中に。大なる穴を。二丈計り堀て。此間堀の中に。多く討れて伏たる。死人を二三十人。穴の中に取入て。其上に炭薪を積て。雨風の吹洒ぐ夜をぞ待たりける。正成が運や天命に叶けん。吹風俄に砂を揚て雨更に篠を衝が如し。夜色窈溟して。甍城皆幃幕を低る。是そ待所の夜ありければ。城中に。人を一人殘し留て。我等が落延んの事。四五町にもなりぬらんと思はんずる時。城に火を懸よと云置て。皆物の具をぬぎ。寄手に紛れて。五人三人別〳〵になり。敵の役所の前。軍勢の枕の上を越て閑々と落けり。正成長崎が厩の前を通りける時。敵是を見付て何者なれば。御役所の前を。案内も申さず。忍びやかに通るゞと咎ければ。正成是は。大將の。御内の者にて候が。道を蹈違て候けると。云捨て。足早にぞ通

りける。咎つる者されば社。怪き者なれ。いか樣馬盜人と覺るゞ。只射殺とて近々と走りよりて。眞直中をゞ射たりける。其矢正成が臂のかゞりに答へて。したゝかに立ぬと覺へけるが。素膚なる身に。少しも立ずして。筈を返して飛かへる。後に其矢の痕を見れば。正成が年頃信じて讀奉りし。觀音經を入たりける。膚の守りに矢當て。一心稱名の二句の偈に。矢さき留まりける社不思議なれ。正成必死の鏃に死を遁れ。廿餘町落延て。跡を顧ければ。約束に違はず。早城の役所共に火を懸たり。寄手の軍勢火に驚きて。すはや城は落けるゞとて。勝時を作りて。餘あ漏すなと。騷動す。燒しづまつて後城中を見れば。大なる穴の中に。炭を積て。燒死たる死骸多し。皆これを見て。あな哀や。正成はや自害をしてけり。敵あがらも弓矢取て。じんじやうに死たる剛哉と。譽ぬ人こそ無りけれ

櫻山入道自害の事

去程に。櫻山四郎入道は。備後國半國計打從へて。備中へやこへまじ。安藝をや退治せまじと案じける所に。笠置の城も落させ給ひ。楠も自害したりと聞へければ。一旦の付勢は。みあ落失ぬ今い身を離れぬ。一族年頃の若黨。廿餘人ゞ殘りける。此頃こそあれ。其昔は。武家權を取て四海九州のうち。尺地も殘さゞりけれバ。親き者も隱ゐず。疎きはまして。頼まれず。人手に懸

りて。屍を曝さんよりはとて。當國の一宮へ參り。八歳になりける。最愛の子と。廿七になりけるとし頃の女房とを刺殺して。社壇に火をかけ已が身も腹搔切て。一族若黨廿三人みな灰燼となりて失にけり。抑所こそ多けるに。態と社壇に火をかけ。燒死ける。櫻山が所存をいかにと尋るに。此入道當社に頭を傾て年久しかりけるが。社頭の餘に。破損したる事を歎きて。造營し奉らんといふ。大願を發けるが。事大營なれば。志のみ有て力なし。今度の謀叛に與力しけるも。專ら此大願を遂がためなりけり。されば共。神は非禮を受給はざりけるにや。所願空しくして打死せんとしけるが。我等此社を燒拂ひたらば。公家武家共に止事を得ずして。いか樣造營のさた有べし。其身は縱奈落の底に墮在す共。此願をだに成就しなば。悲べきにあらずと。勇猛の心を發して。社頭にて燒死ける也。倩々垂迹和光の悲願を思へば。順逆の二緣いづれも濟度利生の方便なれば。今生の逆罪を翻して。當來の値遇とやあらんと。是もたのみは淺からずぞ覺へける

訂正太平記 卷之三 終

訂正太平記 卷之四

○笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事

笠置の城攻落さるゝ刻。召捕れ給し人々の事。去年は歳末の計會に依て。暫く指置れぬ。新玉の年立歸りぬれば。公家の朝拜。武家のさた始て後。東使工藤次郎左衛門尉。二階堂信濃入道行珍二人上洛して。死罪に行ふべき人々。流刑に處すべき國々。關東評定の趣六波羅にして定らる。山門南都の諸門跡。月卿雲客。諸衛の司等に至る迄。罪の輕重に依て。禁獄流罪に處すれ共。足助次郎重範をば。六條河原に引出し首を刎べきと定らる。万里小路大納言宣房卿は。子息藤房參房。二人の罪科に依て。武家に召捕れ。是も召人の如くにてゞ坐しける。齡已に七旬に餘て。万乘の聖主は。遠島に迁されさせ給べしと聞ゆ。二人の賢息は死罪にゞ行はれんずらんと覺て。我身さへ又楚の四人と成給へば。只今迄命存てかゝる。憂事をのみ。見聞事の悲しければ。一方ならぬ思ひに。一首の歌をゞ詠ぜられける

長かれと何思ひけん世中のうきをみするは命也けり

罪過有も有ざるも。先朝拜趨の。月卿雲客。或は出仕を停られ。桃源の跡を尋ね或は官職を解せられ。首陽の懋を懷蓮の通塞時の否泰。夢とやせん現とやせん。時移り事去て。哀樂互に相替

る。憂を習の世中に樂ても何かせん。歎きても由あかるべし。源中納言具行の卿をば。佐々木佐渡の判官入道々譽。路次を警固仕て。鎌倉へ下し奉る。道にて失ひるべきよし兼て告申人や有けん。相坂の關をこへ給ふとて

歸るべき時しなければ是や此行を限りのあふ坂の關

勢多の橋を渡るとて

けふのみと思ふわが身の夢のよを渡る物かはせたの長橋

此鄕をば。道にて失ひ奉るべしと。兼て定し事なれば。近江の柏原にて。斬奉るべき由。探使飛來していらでければ。道譽中納言天の御前に參。いかあるべき先世の宿習によりてか。多の人の中に。入道預り參らせて。今更箇樣に申候へば。且は情を知ぬに相似て候へ共。斯る身には力あき次第にて候。今迄は隨分天下の敕を待て日數を過し候つれ共。關東より。失ひ參らすべき由。堅く仰られ候へば。何事も先世のなす所と思召慰ませ給ひ候へと。申も敢ず袖を顏に押當しかば。中納言殿も不覺の涙すゝみけるを押拭はせ給て。誠に其事に候。此間の義をば。後世迄も。忘れ難く社候へ。命のきはの事は。万乘の君已にっ外都遠島に。御遷幸の由聞へ候上は。其以下の事共は中々力及ばず。殊更此程の情の色。誠に存命す共。謝し難く社候へと計にて。其後い物をも仰られず。硯と紙とを取寄て。御文細々と遊して。便に付て相知る方へやりて給はれとぞ仰られける。斯て日已に暮ければ御輿さし寄て乘奉る。海道より西あるる山際に。松の一村有下に。御輿を舁居たれば。敷革の上に居直せ給て。又硯を取寄閑々と。辭世の頌をぞ書れける

逍遙生死四十二年　山河一革天地洞然

六月十九日。某と書て。筆を抛て。手を叉へ。座を直し給とぞ見へし。田兒の六郎左衛門尉後へ廻かと思へば。御首は前にぞ落にける。哀れと云ふも愚なり。入道泣々。其遺骸を烟となし。樣々の作善を致してぞ。御菩提を吊ひ奉りける。いと惜きかな此卿は。先帝師の宮と申奉りし比より。近侍して。朝夕の拜禮怠たらず。晝夜の勤厚他に異なり。されば次第に昇進も滯はらず。君の恩寵も深かりき。今かく失ひ玉ひぬと叡聞に達せば。何計哀にも思召れんずらんと覺へたり。同廿一日殿の法印良忠をば。大炊御門油の小路の簀。小串五郎兵衛の尉秀信召捕て。六波羅へ出したりしかば。越後守仲時。齋藤十郎兵衛を使にて申されけるは。此比一天の君だにも。叶はせ給はぬ御謀叛を。御身ふゞ思ひ立給はん事。且は止事あし。且は楚忽にこそ覺へて候へ。先帝奪ひ參らせん爲に。當所の繪圖あゞ迄持まいられ候ける條。武敵の至り。重科雙なき隱謀の企て。罪責餘り有。謀の次第一々に述られ候へ。具に關東へ注進すべしとぞ宣ひけるっ法印返事せら

れけるは。普天の下。王土にあらずと云事なし。卒土の濱。王民に非ずと云事あし。誰か先帝の宸襟を。歎き奉らざらん。人たる者是を悅ぶべきや。叡慮に代て。玉躰を奪奉らんと企る事。なじかはやん事なかるべし。無道を誅せんが爲に。隱謀を企る事。更に楚忽の義に非ず。始より叡慮の趣をぞんじ。笠置の皇居へ。參內せし條子細なし。然るを白地にこ出京の跡に城廓堅る事無く。官軍敗北の間。力なく本意を失へり。其間に具行の卿相談して。綸旨を申下し諸國の兵に賦りし條勿論なり。有程の事は。此等ありとぞ返答せられける。是に依て六波羅の評定樣々ありけるを。二階堂信濃入道進で申けるは。彼罪責勿論の上は。是非なく誅せらるべけれ共。與黨の人など猶尋ね沙汰有て。重て關東へ申さるべきかとこそ。存じ候へと申ければ。永井右馬助。此義尤然るべく候此程の大事をば。關東へ申されてこそと申ければ。面々の異見一同せしかば。法印をば。五條京極の籌。加賀前司に預けられて。禁籠し重て關東へぞ注進せられける。平宰相成輔をば。川越參河入道圓重。供足し奉て。是も鎌倉へと聞えしが鎌倉迄も下し付奉らで。相摸早川尻にて矢ひ奉る。侍從中納言公明卿別當實世卿二人をば。赦免の由にて有しか共。猶も心ゆるしやなかりけん。波多野上野守宣通。佐々木三郎左衛門尉に預けられて。猶も本の宿所へは歸し給はず尹大納言師賢卿をば。下總國へ流して。千葉介に預けらる。此人志學の年の昔より。和

漢の才を事として、榮辱の中に。心を止め給はざりしかば。今遠流の刑に逢る事。露計も心に懸て思はれず。盛唐の詩人杜少陵天寶の末の亂に逢て路邇濱を經。双蓬の鬢。天滄浪に落一釣の舟と。天涯の恨を吟じ盡し。吾朝の歌仙小野篁は。隱岐國へ流されて。「海原や八十島かけて漕出ぬと」釣する海士に言傳て。旅泊の思を詠せらる。是皆時の難易を知て。嘆くべきを嘆ず。運の窮達を見て。悲み有を悲しまず。況や主憂る刻は。臣辱らる。主辱らるゝ刻は。臣死すといへり。縱骨を醢にせられ。身を車裂にせらる共傷べき道に非ずとて。少しも悲み給はずたゝ時により。興に觸たる諷詠。等閑に日を渡る。今は浮世の望絕ぬれば。出家の志有由。頻に申されけるを。相摸入道子細候はじと許されければ。年未强仕に滿ざるに。翠の髮を剃落し桑門と成給しが。幾程なく。元弘の亂出來し始俄に病に侵され。圓寂し給けるとかや。東宮大進季房をば。常陸國へ流して。長沼駿河守に預らる。中納言藤房をば。同國に流して小田民部太輔にぞ預られける。左遷遠流の悲みは。何れも劣らぬ涙あれ共。殊に此卿の心の中推量も猶哀あり。此比中宮の御方に左衛門佐局とて容色世に勝れたる女房御座しけり。去ぬる元享の秋の比とかよ。主上北山殿に行幸成て御賀の舞の有ける時。堂下の立部の袖を翻へし梨園の弟子曲を奏せしむ。繁絃急緩何れも金玉の聲玲瓏たり。此女房琵琶の役に召れて。青海波を彈ぜしに。間關たる鶯の語り

は。花の下に滑かあり。幽咽せる泉の流れは。氷の底に難めり。適怨清和節に隨て移る。四絃一聲。帛を裂が如し。拂ては又挑ぐ。一曲の清音。梁上に燕とび水中に魚跳る計あり。中納言はのかに是を見給しより。人知ず思ひ初ける心の色。日に副て深くのみなり行共。云知らすべき便もあければ。心に籠て歎き明し。思暮して。三年を過給けるころ久しけれ。何成人目の紛れにや。露のかことを結ばれけん。一夜の夢の幻。さだかならぬ枕をかはし給にけり。其次の夜の事ぞかし。主上俄に笠置へ落させ給ひければ。藤房衣冠をぬぎ。戎衣になりて供奉せんとし玉ひけるが。件女房に廻り逢ん。末の契りも知がたし。一夜の夢の面顔も。名殘有て今一度。見もし見へばやと思はれければ。彼女房のすみ給ひける。西の對へ行て見給に。時しも社あれ。今朝中宮の召有て北山殿へ參り給ぬと申ければ、中納言髮の髮を少し切て。歌を書添て文置れける

黑髮の亂れん世迄存へゞ是を今はの信とも見よ

此女房立歸り。形みの髮と歌とを見て。讀ては泣。泣ては讀。千度百度卷返し。心亂れて爲方もなし。かゝる涙に文字消て。いとゞ思に堪兼たり。責て其人の。在所をだに知たらば。虎伏野べ。鯨の寄浦あり共。あこがれぬべき心地しけれ共。其行末何く共聞定めず。又逢ん世の賴みもいざ知ねば。餘りの思ひに堪かねて

書置し君が玉章身に添て後世迄の信とやせん

先の歌に一首書添て。形見の髮を袖に入大井川の深き淵に。身を投ける社哀れなれ。君が一日の恩の爲に。妾が百年の身を誤つ共箇樣の事をや申べき。按察大納言公敏卿は。上總國。東南院の僧正聖尋は。下總國。翠僧正俊雅は對馬國と聞へしが。俄に其儀を改て。長門國へ流れ玉ふ第四の宮は但馬國へ流し奉て。其國の守護大田判官へ預けらる

○八歳の宮御歌の事

第九の宮は。いまだ御よういにおはしませば迎。中の御門の中納言宣明の卿に預らる。都の內にぞ御座有ける。此宮今歳に。八歳にあらせ玉けるが常の人よりも。御心さま。賢々敷れはしければ。常に主上已に。人も。通はぬ隱岐の國とやらんに。流されさせ玉ふ上は。我獨り。都の內にとゞまりても何かせん。哀我をも君の御座有ある。國のあたりへ流しつかはせかし。責ては外所あがらも御行末を承はらんかと。かきくどき打しほれて。御涙更にせきあへず。扨も君の押籠られて。御座有。白川い。京近き所と聞に。宣明はあゞ我を具足して。御所へは參らぬゞと仰有ければ。宣明の卿涙を押へて皇居程近き所にてだに候はゞ。御供仕て參せん事。仔細有まじく候が。白川と申候は。都より數百里を經て。下る道にて候。されば能因法師が

都をば霞と共に出しかど秋風ぞ吹白川の關

と讀て候ひし歌にて。道の遠き程。人を通ぬ關有とは。思召知せ玉へと申されければ。宮御涙を押させ玉ひて。暫しは仰出さるゝ事もおし。良有て。扨は宣明我を具足して。參らじと思へる故に箇樣に申ものなり。白川の關と讀たりし歌に

東路の關迄ゆかぬ白川も日數へぬれゞ秋風ぞ吹

此比津守の國夏がこれを本歌にて讀たりし歌に

又最勝寺の。懸の櫻枯たりしを植かゆるとて藤原の雅經朝臣

なれ〳〵て見しはかごりの春ぞ共など白川の花の下陰

是皆名を同じうして。所に替る證歌也。よしや今は心に籠て。云出さじと。宣明を恨み。仰られ其後よりは書たへて。戀しとだに仰られじ。萬物憂御氣色にて。中門に立せ玉へる折ふし遠寺の晩鐘幽に聞へければ

つくづくと思ひ暮して入相の鐘を聞にも君ぞ戀しき

心中に動き。言外に呈はる。御歌のおさ〳〵しき。哀に聞へしかば。其比京中の。僧俗男女是を疊紙。扇に書付て。これこそ八歳の宮の御歌よとて。翫ばぬ人はおかりけり

○一の宮並妙法院二品親王の御事

三月八日。一の宮中務の卿親王をば。佐々木太夫判官時信を路次の御警固にて。土佐の畑へ流し奉る。今迄は。縱ひ愁刑の下に死て。龍門原上の苔に埋〻共。都の邊にて。兎も角もせめてゐちばやと。天に仰ぎ。地に伏し。御祈念有けれ共。昨日已に先帝をも。流し奉りぬと。警固の武士共申あひけるを聞召て。御祈念を御憑もなく。最心細思召ける所に。武士共許多參て。中門に御興を差寄たれば。押へ兼たる御涙の中に

關留る柵ぞなき泪川いかにながるゝ浮身なるらん

同日。妙法院二品親王をも。長井左近太夫將監高廣を御警固にて。讃岐の國へ流し奉る。昨日は主上御遷幸の由を承り。けふは一の宮流され玉ひぬと聞召て。御心を痛しめ給ひけり。憂名もかはらぬ同じ道に。去かも別れて趣玉ふ御心の中こそ。悲しけれ。始の程こそ別々にて御下り有けるが。十一日の暮程に。一の宮も。妙法院も諸共に。兵庫に着せ玉ひたりければ。一の宮は是より御舟に召て。土佐の畑へ御下り有べき由。聞へければ。御文を參らせ玉ひけるに

今迄は同じ宿りを尋きて跡なき波と聞ぞ悲しき

一の宮御返事

あすよりゝ跡なき波に迷ふ共通ふ心よしるべ共なれ

配所は共に四國と聞ゆれば。せめては同國にてもあれかし。事問風の便にも。憂をなぐさむ一節共。念じ思召けるも叶はで。一の宮ゝたゆたふ波に漕行く身を浮舟に任せつゝ。土佐の畑へ趣かせ玉へば。有井三郎左衞門の尉が館の傍に。一室を搆へて置奉る彼畑と申は。南は山の傍にて高く。北ゝ海邊にて下れり。松の下露扉にかゝりて。いとゞ御袖の泪を添。磯打波の音。御枕の下に聞へて。是のみ通ふ古郷の。夢霧も遠く成にけり。先朝御歸洛の御祈りの爲にや有けん。又濟渡利生の結縁とや思し召けん。御着岸の其日より。毎日三時の護魔を。千日が間ゞ修せられける。妙法院は是より引分れて。備前國迄は。陸地を經て。兒島の吹上より舟に召て。讃岐の詫間に着せ玉ふ。是も海邊近き所なれば。毒霧御身を侵して。瘴海の氣冷じく。漁歌牧笛の夕べの聲嶺雲海月の秋の色。ろうじて耳にふれ。眼に遮る事の。哀を催し御涙をそふる。媒とあらずといふ事あし。先皇をば。承久の例に任せて。隱岐國へ流し參らすべきに定まりけり。臣として。君を無にし奉る事。關東もさすが恐れ有とや思けん。此爲に御伏見院第一の御子を。御位に即奉りて。先帝御迂幸の宣旨をなさるべきとぞ。はからひ申ける。天下の事に於は。今は重祚の御望み有べきにも非ざれば。遷幸以前に。先帝をば法皇になし奉るべきとて。香染の御衣を武家

より調進したりけれ共。御法躰の御事は。暫く有問敷由を仰られて衰龍の御衣をも脱せ玉はず。毎朝の御行水をめして。假の皇居を清めて。石灰の壇に準て。太神宮の御拜有ければ。天に二つの日あけれ共。國に二りの王御座す心地して。武家も持あつかひてぞ覺へける。是も叡慮に憑思召事有ける故あり

○俊明極參内の事

去ぬる元享元年の春の比。元朝より。俊明極迎に得智の禪師來朝せり。天子直に異朝の僧に御相看の事は。前々更にあかりしか共。此君禪の宗旨に傾かせ玉ひて。諸方參得の御志おはせしかば。御法談のために。此禪師を禁中へぞ召れける。事の儀式。餘りに微々あらんは。我朝の恥なるべしとて。三公十卿も。出仕の服ひをつくろひ。闌臺金馬も。守禦の備へを嚴しくせり。夜半に蠟燭を立て。宣旨參内せらる。主上紫宸殿に出御ありて。玉座に席を薦め玉ふ。禪師三拜の禮訖て。香を拈じて万歳を祝す。時に勅問有て曰。山に棧し海に航して。得々として來る。和尚何を以か度生せん。禪師答て云。佛法緊要の所を以て度生せん。重て曰正當恁麼の時如何。答て云。天上に星有り。皆北に拱す。人間水として。東に朝せずと云事あし。御法談畢て。禪師拜揖して退出せらる。翌日別當實世の卿を勅使にて。禪師號を下さるゝ。時に禪師勅

使に向ひ此君亢龍の悔有といへ共。二たび帝位を踐せ玉ふべき御相ありとぞ申されける。今君武臣の爲に囚れて。亢龍の悔に。合玉ひけれ共。彼禪師相し申されたりし事なれば。二度九五の帝位を踐せ玉はん事疑ひあしと思し召に依て。法躰の御事い。暫く有まじき由を强て仰出されけり

○中宮御歎の事

三月七日。既に先帝を。隱岐の國へ遷されさせ給ふと聞へければ。中宮夜に紛れて。六波羅の御所へ行啓ならせ給ひ。中門に御車を指寄たれば。主上出御有て。御車の簾を褰られ。君は中宮を都に留置奉りて。旅泊の波。長汀の月に。跡併給はんずる。行末の事を思召連ね。中宮は又。主上を遙々と。遠外に想像奉りて。何の賴みの有世共なく。明ぬ長夜の心迷ひの心地し。長らへたる物思ひに。あらんと。共に語つくさせ給はゞ。秋の夜の。千代を一夜になぞらふ共。猶言殘りて明ぬべければ。御心の中の憂程は。其言の葉も及ばねば。中々云出させ給ふ一節もあし。只御涙にのみ書くれて。强顏見へし有明も。傾く迄に成にけり。夜も已に明なんとしければ。中宮御車を廻して還御ありけるが。御泪の中に

此上の思ひいあらじつれなさの命よされゞいつを限ぞ

と計聞へて。臥沈せ給ひながら。歸る車の別路に。廻逢せの賴みなさ。御心の中社悲しけれ

○先帝遷幸の事

明れば三月七日。千葉介貞胤。小山の五郎左衞門。佐々木佐渡の判官入道道譽五百餘騎にて路次を警固仕て。先帝を。隱岐の國へ移し奉る供奉の人とては。一條頭の太夫行房。六條の少將忠顯。御介借は。三位殿御局計也。其外は皆甲冑を鎧て。弓矢を帶せる武士共。前後左右に打圍奉りて。七條を西へ。東洞院を下へ。御車を輾ば。京中の貴賤男女。小路に立並びて。正數一天の主を。下として流し奉る事の。淺猿よ。武家の運命。今に盡あんと。憚る所もあく。云こ玄阡に滿て。只赤子の母を慕が如く。泣悲しみければ。聞に哀を催て。警固の武士も。諸共にみな。鎧の袖をぞ濡しける。櫻井の宿を過させ給ひける。時八幡を伏拜み。御輿を舁居させて。二度帝都還幸の事をぞ。御祈念有ける。八幡大菩薩と申は。應神天皇の應化百王鎭固の御誓新なれば。天子行在の外迄も定て擁護の御眸をぞ廻さるらんと。賴もしく社思召けれ。湊川を過せさ給ふ時。福原の京を御覽せられても。平相國清盛が。四海を掌ににぎりて平安城を。此卑濕の地に遷したりしかば。幾程なく亡びしも。偏に上を犯さんとせし。侈の末。果して天の爲に罰を蒙るぞかしと思召。恩はしとなりにけり。印南野を末に御覽じて。須磨の浦を過させ給へば。昔し源氏の大將の。朧月夜になを立て。此浦に流され。三年の秋を送りしに。涙たゞて、

もとに立し心地して。涙おつ共覺へぬに。枕は浮計に成にけりと。旅寢の秋を悲しみしも。理りなりと思召れ。明石の浦の朝霧に遠くあり行淡路方。寄來波も高沙の。尾上の松に吹嵐。跡に幾重の山河を杉坂越て美作や。久米の佐羅山さら〳〵に。今は有べき時ならぬに。雲間の山に雪見へて。遙に遠き峯有り。御警固の武士を召て。山の名を御尋有に。是は伯耆の大山と申山にて候と申ければ。暫く御輿を留められ。内證深心の法施を奉らせ給ふ或時は鷄唱茅店の月を拂過し。有時は馬蹄板橋の霜を蹈破して。行路に日を窮ければ。都を御出有て十三日と申に。出雲の見尾の湊に着せ給ふ。こゝにて御舟を艤して渡海の順風をぞ待給ひける

○備後三郎高德が事付吳越軍の事

其比備前の國に。兒島の備後の三郎高德と云者あり。主上笠置に御座ありし時。御方に參て義兵を揚しが。事未ならざる先に。笠置も落され。楠も自害したりと聞へしかば力を失ひて默止けるが。主上を隱岐の國へ。遷されさせ給ふと聞て。二心なき。一族共を集めて評定しけるは。志士仁人は。生を求めて以て仁を害する事なく。身を殺て以て。仁を爲事有と云り。されば昔衛の懿公が。北狄の爲に。殺されて有しを見て。其臣に弘演と云し者。是を見るに忍びず。自ら腹を搔切て。懿公が肝を己れが胸の中に收て。先君の恩を死後に報じて亡たりき。義を見て爲ざる

は勇なき也。いざや臨幸の路次に參あひ。君を奪取奉て。大軍を興し。たとひ屍を戰場に曝共。名を子孫に傳へんと申ければ。心有一族共。皆此義に同す。さらば路次の難所に相待て其隙をうかゞふべし迚。備前と播磨との境なる。舟坂山の巔に隱臥。今や〳〵とぞ待たりける。臨幸餘りに遲かりければ。人を走らかして是を見するに。警固の武士。山陽道を經ず。播磨の今宿より。山陰道にかゝり。遷幸をなし奉りける間。高德がしたく相違してけり。さらば美作の杉坂こそ。究竟の深山なれ此にて待奉らんとて。三石の山より直違に。道もなき山の雲を凌て。杉坂へ付たりければ。主上はや院の庄へ。入せ給ひぬと申ける間力なく是より散〴〵になりけるが。責ても此所存を。上聞に達せばやと思ひける間。微服潛行して。時分を伺ひけれ共。然るべき隙も無りければ。君の御座有御宿の庭に。大きなる櫻の木有けるを押削りて。大文字に。一句の詩をぞ書つけたり

天莫レ空ニ勾踐一時
非レ無ニ范蠡一

御警固の武士共。朝に是を見付て。何事を何なる者が書たるやらんとて。よみ兼て。則上聞に達してけり。主上は聽て詩の心を御覺り有て。龍顏殊に御快く笑せ給へ共。武士共は。取て其來歷を知ざれば。思ひ咎る事も無りけり。抑此詩の心は。昔し異朝に。吳越とて。ならべる二の

國有。此兩國の諸侯。皆王道を行はず。覇業を勤としける間。呉は越を討て取んとし。越は呉を亡ぼして合せんとす。此の如く相爭ふ事。累年に及ぶ。呉越互に勝負をかへしかば。親の敵となり。子の讐と成て。共に天を戴く事を恥。周の末の世に當て。呉國の王をば呉王夫差と云。越國の王をば越王勾踐とぞ申ける。有時此越王。范蠡と云大臣を召て宣ひけるは。呉はこれ父祖の敵也。我是を討ずして。徒らに年を送る事。嘲りを。天下の人に取のみにあらず。兼ては。父祖の骸を。九泉の苔の下に羞しむ恨有。然れば我今國の兵を召集めて。自ら呉國へうちこへ。呉王夫差を亡ぼして。父祖の恨を散せんと思ふ也。汝は暫く此國に留まり。社稷を守るべしと宣ひければ。范蠡諫申けるは。臣潜に事の仔細を計るに。今越の力を以て。呉を亡ぼさん事は頗る以て。難かるべし。其故は。先兩國の兵を數ふるに。呉は廿万騎。越は纔に十万騎なり。誠に小を以て。大に敵せず。是呉を亡ぼし難き其一あり。次には時を以て計に春夏ハ陽の時にて。忠賞を行ひ。秋冬は陰の時にて。刑罰を專らにす。時今春の始也。是今征伐を致すべき時に非ず。是呉を亡ぼし難き其二也。次に賢人の歸する所は。則其國強し。臣聞。呉王夫差の臣下に伍子胥と云者有。智深くして人をあづけ。慮り遠くして主を諫む。かれ呉國に有ん程は。呉を亡ぼす事難かるべし。是其三なり。麒麟は角に肉有て猛き形を顕はさず。潜龍は三冬に蟄して。一陽來復の天

を待。君呉越を併せられ。中國に臨で南面にして。孤稱せんとおらば。暫く兵を伏せ。武を隠して。時を待給ふべしと申ければ。其時越王大に怒て宣ひけるは。禮記に父の讐には。共に天を戴かずと云り。我已に。壯年に及ぶ迄。呉を亡ぼさずして。共に日月の光りを戴く事。人の羞かしむる所にあらずや。只を以て兵を集る所に。汝三の不可を擧て我を留むる事。其義一も道に叶はず。先兵の多少を數へて。戰を致すべくは。越は誠に呉に對しがたし。然れ共軍の勝負必しも勢の多少に依ず。たゞ時の運に依又は將の謀に依り。されば呉と越と戰ふ事。度々に及び。雌雄互に易れり。是汝が皆知る所也。今更におんぞ越の小勢を以て。呉の大敵に戰はん事。叶ハぞと我を諫べきや。汝が武略の足ざる所の其一也。次に時をもて軍の勝負を計ば。天下の人皆時をしれり。誰か軍に勝ざらん。若春夏は陽の時にて。罰を行はずと云ゞ。殷の湯王の桀を討しも春あり。周の武王の紂を討しも春なり。されば天の時は。地の利に如ず。地の利は人の和に如ずと云り。然るに汝今征伐を行ふべき時にあらずと。我を諫る。是汝が智慮の淺き所の二あり。次に呉國に伍子胥が有ん程は呉を亡ぼす事。叶ふべからずといはば。我遂に父祖の敵を討て。恨を泉下に報せん事。有べからず只徒に。伍子胥が死せん事を待ば。死生命あり。又は老少前後す。伍子胥と我と。何れをか先と知。此理を辨ずして。我征伐を止むべきや。是汝が愚の三なり。

抑我他日に及で。兵を召事。吳國へも定て聞へぬらん。事遲怠して。却て吳王に寄られなば。悔共益有べからず。先ずる時は。則人を制し。後るゝ時は。則人に制せらるゝと云り。事已に決せり。暫くも止べからずとて。越王十一年二月上旬に。勾踐自ら。十万餘騎の兵を卒して。吳國へぞ寄られける。吳王夫差是を聞て。小敵をば欺くべからずとて。自ら廿万騎の勢を卒して。吳と越との境。夫椒縣と云所に馳向ふ後に會稽山を當て。前に大河を隔てゝ。陣をとる。態と敵を討んが爲に。三万餘騎を出して。十七万騎をば陣の後の山陰に。深く隱してぞ置たりける。去理に。越王。夫椒縣に打臨て。吳の兵を見給へば。其勢纔に。二三万騎には。過じと覺へて。所所にひかへたり。越王是を見て。思ふには似ず。小勢なりけると蔑して。十万騎の兵を同時に馬を。川水に打入させ。馬筏を組て打渡す。比は二月上旬の事なれば。餘寒猶烈くして。川水氷に連れり。兵手凍へて。弓を引に叶はず。馬は雪に泥て。懸引も自在あらず。されば共越王責鼓を打て進まれける間。越の兵我先にと轡を双て懸入る。吳國の兵は。兼てより。敵を難所に誘き入て。取籠てっ打んと議したる事なれば。態と一軍もせで夫椒縣の陣を引退さて。會稽山へ引籠る。越の兵勝に乘て。北をおふ事卅餘里四隊の陣を一陣に合て。左右を顧ず。馬の息もきるゝ程。思々にぞ追たりける。日已に暮あんとする時に。吳の兵廿万騎。思ふ圖に敵を難所

におびき入て。四方の山より打出て。越王勾踐を中に取籠一人も洩さじと。責戰ふ越の兵は今朝の軍に遠馳をして。人馬共に疲れたる上。無勢ありければ。吳の大勢に圍まれ。一所に打よりてひかへたり。進で前ある敵に。懸んとすれば敵は嶮岨に支て。鏃を調へて待かけたり。引返して。後なる敵を拂はんとすれば。敵は大勢にて。越の兵疲たり。進退爰に谷りて。敗亡すでに極れり。されば共越王勾踐は堅きを破り利を摧事。後代項王が勢をのみ。樊噲が勇にも過たりければ。大勢の中へかけ入。十文字に懸破り。巴の字に追廻らす。一所に合て。三所に別れ。四方を排ひて八面に當る頃刻に變化して百度戰ふといへ共。越王終に打負て。七万餘騎討れにけり。勾踐こらへ兼て。會稽山に打上り。越の兵を數るに。打殘されたる兵纔に三萬餘騎なり。されも半は手を負て。盡く矢盡く鉾折たり。勝負を吳越に伺ひて。未何方へもつかざりつる。隣國の諸侯。多く吳王の方へ走加りければ。吳の兵彌重あり。三十萬騎會稽山の。四面を圍事。稻麻竹葦の如なり。越王幃幕の内に入。兵を集て宣ひけるは。我運命已に盡て。今此圍にあへり。是全く。戰ひの咎に非ず。天我を亡せり。然ば我。明日に士と共に。敵の圍を出て。吳王の陣に懸入。骸を軍門に曝し。恨を再生に報ずべし迚。越の重器を積て。盡く燒捨んとし給ふ。又王龍興とて。今年八歳になり給ふ。最愛の太子。越王に隨て。同じく此陣におはしけるを。呼出し奉りて。

汝未幼稚なれば。我死に後れ。敵に捕れ。憂目を見ん事も心憂かるべし。若又我敵の爲に生捕れて。我汝より先立ば。生前の思ひ。忍び難し。若し汝を先立て。心安く思ひ切。明日の軍に討死して。九泉の苔の下。三途の露の底迄も。父子の恩愛を捨ずと思ふなりとて。左の袖に涙を拭ひ。右の手に劍を提て。太子の御自害を勸め給ふ時に。越王の左將軍に太夫種と云臣あり。越王の御前に。進出て申けるは。生を全して。命を待事は。遠くして難く。死を輕くして節に隨ふ事は。近くして易し。君暫く越の重器を燒捨。太子を殺す事を止給へ。臣不敏なりといへ共。吳王を欺きて。君王の死を救。本國に歸りて。二度大軍を興し。此恥を雪がんと思ふ。今此山を圍で一陣を張しむる吳の上將軍太宰嚭は。臣が古への朋友なり。久しく相馴て。彼が心を察せしに。これ誠に血氣の勇者なりといへ共。飽迄其心に慾有て。後の禍を顧ず。又彼吳王夫差の行跡を語を聞しが。智淺くして謀短く。色に淫じて道に暗し。君臣共に。いづれも欺くに易き所なり。抑今越の戰ひ利なくして。吳の爲に圍まれぬる事も。君范蠡が諫を用ひ給はざりし故にあらずや。願ば君王臣が尺寸の謀を許されて。敗軍數萬の死を救ひ給へと。諫申ければ。越王理に折て。敗軍の將は。二度謀ずと云り今より後の事は。併太夫種に任すべしと宣ひて。重器を燒るゝ事を止られ。太子の自害をも止られけり。太夫種則君の命を受て。鎧を脱。旗を卷て。

會稽山より走下り。越王勢ひ盡て。吳の軍門に降と呼りければ。吳の兵卅萬騎。勝鬨を作て。皆萬歲と唱ふ。大夫種は則吳の轅門に入て。君王の倍臣。越の勾踐の從者小臣種謹んで吳の上將軍の下執事に云よくすと云て。膝行頓首して。大宰嚭が前に平伏す。大宰嚭は。床の上に坐して。幃幕を揚させて。太夫種に謂す。太夫種敢て平視せず。面をたれ。涙を流して申けるは。寡君勾踐運極まり。勢盡て。吳の兵に圍まれぬ。仍今小臣種をして。越王永く吳王の臣となり。一畝の民とならん事を請しむ。願ば先日の罪を許されて。今日の死を助け給へ。將軍もし勾踐の死を救ひ給はゞ。越の國を吳王に獻じて。湯沐の地となし。其重器を將軍に奉り。美人西施を。洒掃の妾たらしめ。一日の歡娛に備ふべし。若それ。請所ろ望み叶はず。終に勾踐を罪せんとならば越の重器を燒捨。士卒の心を一にして。吳王の堅陣にかけ入。軍門に骸を止むべし。臣平生將軍と交はりを結ぶ事。膠漆よりも堅し。生前の芳恩只此事に有。將軍早く此事を吳王に奏して。臣が胸中の安否を。存命のうちに知しめ給へと。一度は怒り。一度は歎き言を盡して申ければ。太宰嚭顏色誠に解て。事以て難からず。我必ず越王の罪をば。申宥べしとて。聽て吳王の陣へぞ參ける。太宰嚭則吳王の玉座に近付。事の仔細を奏しければ。吳王大きに怒て。抑吳と越と。國を爭ひ。兵を擧事。今日のみにあらず。然るに勾踐運極りて。吳の擒となれり。是天の我

に與へたるに非ずや。汝是を知ながら。勾踐が命を助んと請。敢て忠列の臣にあらずと宣ひければ。太宰嚭重て申けるは。臣不肖なりといへども。苟も將軍の號を許され。越の兵と戰ひを致日。謀を運し。大敵を破り。命を輕くして。勝事を心よくせり。是偏に臣が丹心の功と謂つべし。君王の爲に。天下の太平を圖んに。豈一日も忠を盡し。心を傾けざらんや。倩事の是非を計に越王戰ひに負て。勢盡ぬといへ共。殘る所の兵猶三萬餘騎。皆逞兵鐵器の勇士なり。吳の兵多といへ共。昨日の軍に功有て今より後は身を全して。賞を貪らん事を思ふべし。越の兵は。小勢なりといへ共志を一にして。去かも遁ぬ所を知り。窮鼠却て猫を齧。凍雀人を恐れずと云。り。吳越重て戰はゞ。吳は必ず危に近かるべし。若ず先越王の命を助け一畝の地を興へて。吳の下臣と爲んには。然ば君王吳越兩國を合するのみに非ず。齊楚秦趙も。盡く朝せずと云事有べからず。是根を深し。臍を固する道ありと。理を盡して申ければ。吳王則欲に耽り心を逞くして。さらば早會稽山の圍を解て。勾踐を助くべしとぞ宣ひける。太宰嚭歸りて。太夫種に此由を語りければ。太夫種大きに悅びて。會稽山に馳歸り。越王に此旨を申せば。士卒皆色を直して。萬死を出で。一生にあふ。偏に太夫種が智謀にかゝれりと。悅ばぬ人も無りけり。越王已に降旗を立られければ。會稽の圍を解て。吳の兵は吳に歸り。越の兵は越に歸る。勾踐

則太子王顛輿をば。太夫種に付て。本國へ返し遣はし。我身は白馬素車に乘て。越の璽綬を首にかけ。自ら吳の下臣と稱して。吳の軍門に降給ふ。かゝりけれ共。吳王あを。心ゆるしやあかりけん。君子ゝ刑人に近付ずとて。勾踐に面を見せ給はず。剩勾踐を。典獄の官に下されて。日に行事一驛二驅して吳の姑蘇城へ入給ふ。其有樣を見る人。涙かゝらぬ袖はなし。日を經て姑蘇城に着給へば。則扭械を入て。土の籠にぞ入奉りける。夜明日暮れ共。月日の光を見給はねば。一生冥暗の中に向て。年月の移り易るをも知給はねば。泪の浮ぶ床の上。さこそは露もふるかりけめ。去程に范蠡。越の國に有て。此事を聞に。恨み骨髓に徹て忍び難し。哀れ何ある事をもして。越王の命を助け。本國に歸り給へかし。諸共に謀を廻らして。會稽山の恥を雪めんと。肺肝を碎て思ひければ。身を屢し形を替て。簀に魚を入て。自ら是を荷ひ。魚を賣商人の眞似をして。吳國へぞ行たりけり。姑蘇城の邊りに休ひて。勾踐の御座る所を問ければ。或人委しく敎へ知せけり。范蠡嬉しく思ひて。彼獄の邊りに行たりけれ共。禁門警固隙無りければ。一行の書を魚の腹の中に收て獄の中へぞ投入ける。勾踐怪しく覺へて魚の腹を開て見給へば

西伯囚羑里　重耳走瞿
皆以爲王霸　莫死許敵

とぞ書たりける。筆の勢。文章の躰まがふ可もなき。范蠡が業なりと見給ひければ。彼未だ浮世にながらへて。我爲に肺肝を盡しけりと。其志の程哀にも又頼もしくも覺へけるにこそ。一日片時も。生るを憂とかこたれし。我身おがらの命も。却て惜く思はれける。かゝりける處に。吳王夫差。俄に石淋と云病を受て。身心長に。惱亂し。巫覡祈れ共驗なし。醫師治すれ共癒ず。露命已に危く見へ給ひける處に。他國より名醫來て申けるは。御病實に重しといへ共。醫師の術及ぶまじきに非ず。石淋の味を嘗て。五味の樣を知する人あらば。輙く療治し奉るべしとぞ申ける。さらば誰か此石淋を嘗て其味を知すべきと問に。左右の近臣相顧て是を嘗る人更におなし。勾踐是を傳へ聞て。涙を押へて宣はく。我會稽の圍に逢し時。既に罰せらるべかりしを。今に命助置れて天下の赦を待事偏に君王慈惠の厚恩也。是を以て其恩を報せずんば。何れの日をか期せんとて。潛に石淋を取て。是を嘗て。其味を醫師に知せらる。醫師味を聞て療治を加へしかば。吳王の病忽ちに平癒してけり。吳王大に悅て。人心有て我死を助く。我何ぞ是を謝する心なからんやとて。越王を。籠より出し奉る已に非す剩へ越の國を返し與へて。本國へ返う去べしとぞ宣下せられける。爰に吳王の臣伍子胥と申者。吳王を諫て申けるは。天の與ふるを取ざれば却て其咎を受と云り。此時越の地を取ず。勾踐を返し遣されん事。千里の野邊に虎を放

つか如し。禍近きに有べしと申けれ共。吳王是を聞給はず遂に勾踐を。本國へぞ返されける。越王既に。車の轅を廻らして。越の國へ回り給ふ處に。蛙子其數を知ず。車の前に飛來る。勾踐是を見給ひて。是は勇士を得て。素懷を達すべき瑞兆ありとて。車より下て。是を拜し給ふ斯て越の國へ歸て。住こし故宮を見給へば。いつしか三年に荒はて。梟松桂の枝に鳴。狐蘭菊の叢に藏る。掃ふ人なうして。閑庭に落葉滿て蕭々たり。越王死を脫れて歸り給ひぬると聞へしかば。范蠡幷に王鄙與を宮中へ入奉りぬ。越王の后に。西施と云美人御座けり。容色世に勝れ。嬋娟比ひなかりければ越王殊に寵愛甚しくして。暫くも。傍を放給はざりき。越王吳にとられ給ひし程は。其難を遁んが爲に。身をそばめ隱れ居給ひたりしが。越王歸り給ふ由を聞給ひて。則ち後宮に歸り參り給ふ。年の三歲を待詫てたへぬ思ひに沈み給ける。歎きの程も顯はれて鬢疎かに。膚消たる御形ち。最わりなく臘闌て。梨花一枝春の雨に綻ろび譬へん方もなかりけり。卿太夫文武百司。此彼より馳集りける間。輕軒紫陌の塵に馳。冠佩丹墀の月に鎗て堂上堂下。再び開る花の如し。斯りける處に。吳國より使者來れり。越王驚きて范蠡を以て。事の子細を問給ふに。使者こたへて云。我君吳王嬖を好み。色を重んじて。美人を尋給ふ事。天下に普し。然れ共いまだ西施が如き顏色を見ず。越王會稽山の圍を出し時。一言の約有。はやく彼西施を。吳

の後宮へかしづき入奉り。后妃の位に備へんとの使なり。越王これを聞給ひて。我吳王夫差が陣に降て。恥を忘れ。石淋を嘗て。命を助かりし事。全く國をたもち。身を榮かさんとには非ず。只西施に偕老の契りを結ばんが爲なりき。生前に一度別れて。死して後再會を期せば。万乘の國を保ても何かせん。されば縱越吳の會盟破れて。二度我吳の爲に擒に成共。西施を他國に送る事ん。有べからずとぞ宣ひける。范蠡涙を流して申けるは。誠に君展轉の思ひを計るに臣悲しまざるに非ずと雖共。若今西施を惜み給はゞ。吳越の軍。再び破れて。吳王又兵を發すべし。去程ならば。越の國を。吳に合せらるゝのみに非ず。西施をも奪るべし。社稷をも傾けらるべし。臣倩計るに。吳王淫を好み。色に迷ふ事甚し。西施吳の后宮に入給ふ程ならば。吳王是に迷ふて。政を失はん事。疑ふ所に非ず。國費へ。民背かん時に及て。兵を起し。吳を攻られば。勝事を立所に得べし。是子孫万歳に及で。夫人連理の御契り。久しかるべき道となるべしと。一度は泣。一度は諫て。理を盡して申ければ越王理に折て。西施を吳國へぞ送られける。西施は小鹿の角のつかの間も。別て有べき物かはと。思ふ中をもさけられて。いまだ幼おさ太子王節與にも云知せずして。思ひ置。おらはぬ旅に出給へば。別を慕ふ泪さへ。暫しが程も止らで。袖の乾く隙もなし。越王は又。是や限りの別なるらんと堪ぬ思ひに臥沈みて。其方の空を遙々と。詠めやり給

へば。遲々たる暮山の雲。いとゞ泪の雨とあり。空しき床に獨り寢て。夢にも責て逢見ばやと。枕をそば立臥給へゞ。添かひもおき俤に。せん方なく歎き給ふも實理りなり。彼西施と申は。天下第一の美人なり。敗ひなつて。一度笑ば。百の媚。君が眼を迷して漸池上に花なきかと疑ふ。艶閑て僅に見れば。千々の姿人の心を蕩かして。忽ちに。雲間に月を失ふかとあやしまる。されば一度宮中に入て。君王の傍に侍りしより。吳王の御心浮れて。夜は終夜ら淫樂にのみ嗜むて。世の政をも聞給はず。晝は盡日す遊宴をのみ事として。國の危きをも顧みず。金殿雲をさしはさんで。四邊三百里が間。山河を枕の下に見おろしても。西施と宴せし夢の中に。興を催さん爲なりき。輦路に花なき春の日は。麝臍を埋みて屐を薫し。行宮に月おき夏の夜は。螢火を集て。燭に易ふ。淫亂日を重て。更に止時なかりしかば。上荒み下廢るれ共。佞人は阿て諫せず。吳王は万事醉て忘たるが如し。伍子胥是を見て。吳王を諫めて申けるは。君見ずや。殷の紂王妲妃に迷ひ。世を亂り。周の幽王褒似を愛して國を傾けし事を。君今西施を嬖じ給へる事。之に過たり。國の傾廢遠きに非ず。願はくば君之を止給へと言顔を侵して諫申けれ共。吳王敢て聞給はず。或時又吳王。西施に宴せん爲に。群臣を召て。南殿の花に醉を勸め給ひける處に。伍子胥威儀を正しゝ去て參りたりけるが。さしも玉を敷金を鏤たる瑤階を登ふとて。其裾を高くか

かげたる事。恰も水を渉る時の如し。其怪き故を問に。伍子胥答て申けるは。此姑蘇臺越王の爲に亡ぼされて。草深く。露滋き地とあらん事。遠きに非ず。臣若それ迄命あらば。住こし昔の跡とて。尋みん時。さこそ我より餘る。荊棘の露も。滾々として深からんずらめと。行末の秋を思ふ故に。身に習はして。裾をば揚るなりとぞ申ける。忠臣諫を納れ共。吳王曾て用ひ給はざりしかば。餘に諫めかねて。よしや身を殺し。危を助んとや思ひけん。伍子胥又有時。只今新に砥より出たる。青蛇の劍をもちて參りたり。拔て吳王の御前に。拉て申けるは。臣此劍を磨事。邪を退け敵を拂はんため也。熟國の傾かんとする。其基を尋れば。皆西施より出たり。是に過たる敵有べからず。願ば。西施が首を刎て。社稷の危を助んと云て。牙を齧で立たりければ。忠言耳に逆ふ時。君非を犯ずと云事なければ。吳王大きに怒て伍子胥を誅せんとす。伍子胥敢て之を悲しまず。爭ひ諫て節に死するは。是臣下の則也。我正に越の兵の手に死なんよりは。寧君王の手に死なん事恨の中の悅なり。但し君王臣が忠諫を怒て我に死を賜ふ事。是天已に君を棄る也。君越王の爲に亡ぼされて。刑戮の罪に伏せん事。三年を經べからず願はくば。臣が兩眼を穿て吳の東門に懸られて。其後首を刎給へ。一双の眼未枯ざる先に。君勾踐に亡ぼされて。死刎に赴き給はんを見。一笑を快せんと申ければ。吳王彌怒て。則ち伍子胥を誅せられ其兩

眼を穿て。吳の東門の幢の上にぞ掛られける。かゝりし後は。君惡を積て。臣敢て諫を献せず。只群臣口を鉗み。万人語に目を以てす。范蠡是を聞て。時已に到りぬと悅で。自ら二十万騎の兵を卒して。吳國へぞ押寄ける。吳王夫差は。折節晉の國。吳を叛くと聞て。晉國を向はれたる隙ありければ。防ぐ兵一人もなし。范蠡先西施を取返して。越王の宮へ歸し入奉り。姑蘇臺を燒拂ふ。齊楚の兩國も。越王に志を通せしかば。卅万騎を出して。范蠡に力を合す。吳王是を聞て。先晉國の戰ひを閣て。吳國へ引返し。越に戰を挑まんとすれば。前には吳越齊楚の兵雲霞の如く待かけたり。後には。晉國の强敵勝に乘て追懸たり。吳王大敵に。前後を裏まれて。遁るべき方もなかりければ。死を輕んじ。戰ふ事三日三夜。范蠡荒手を入替て。息をも繼せず攻ける間。吳の兵三万餘人討れて。僅に百騎になりにけり。吳王自ら相當る事。三十二ケ度。夜半に圍み解て。六十七騎を隨へ。姑蘇山に取上り。越土に使者を立て曰。君王昔會稽山に困しみし時。臣夫差是を助たり。願ぐ我今より後。越の下臣とありて。君王の玉趾を戴かん。君もし會稽の恩を忘れずは。臣が今日の死を救給へと。言を賤くし。禮を厚し。降せん事をぞ請れける。越王是を聞て。古へ。我が思ひに今人の悲しみさこそと。哀に思ひ知給ひければ。吳王を殺すに忍びず。其死を救はんと思ひ給へり。范蠡これを聞て。越王の御前に參て。面を犯し申

けるは。柯を伐其規遠からず。會稽の古へは。天越を吳に與へたり。然るを。吳王取事なくして。忽に此害に遭り。今却て天越に吳を與へたり。取事あくんば。越又此の如の害に逢べし。君臣共に肺肝を碎きて。吳をはかる事廿一年。一朝にして棄ん事。豈悲しまざらんや。君非を行ふ時順はざるは。臣の忠ありと云て。吳王の使者。未だ歸らざる前に。范蠡自ら。攻鼓を打て。兵を勸め。遂に吳王を生捕て。軍門の前に引出す。吳王已に面縛せられて吳の東門を過給ふに。忠臣伍子胥が諫によつて。首を刎らるゝ時。幢の上に掛たりし。一双の眼三年迄。未だ枯すして有けるが。其眸明らかに開け。相見て笑へる氣色ありければ。吳王是に面を見る事。さすが恥かしくや思はれけん。袖を顏に押當て。首を低て過給ふ。數万の兵これを見て。涙を流さぬは無りけり。則ち吳王を典獄の官に下され。會稽山の下にて。遂に首を刎奉る。古來より俗の諺に曰。會稽の恥を雪むるとは。此事を云なるべし。これより越王。吳を幷するのみに非ず晉楚齊秦を平げ。覇者の盟主とありしかば。其功を賞して。范蠡を万戸侯に封せんとし給ひしか共。范蠡曾て。其祿を受ず。大名の下にゐ。久しく居るべからず。功成名遂身退天道なりとて。遂に姓名を更。陶朱公と呼れて。五湖と云所に身を隱し。世を遁れてゞ居たりける。釣して芦花の岸に宿すれば。半簑に雪を留。歌て楓葉の陰を過れば。孤舟に秋を載たり。一蓬の月い萬頃の天。

紅塵の外に遊で。白頭の翁と成にけり。高德此事を思ひ準らへて。一句の詩に千般の思ひをのべ。窺に獻聞にゞ達しける。去程に先帝は。出雲の三尾の湊に。十餘日御逗留有て。順風になりにければ。船人纜を解て御艤して。兵船三百餘艘。前後左右に漕並べて。萬里の雲に遡る時に。滄海沈々として日西北の涙に沈し。雲山超々として月東南の天に出れば。漁船の歸る程みへて。一燈柳岸に幽なり。暮れば芦岸の煙に船を繫ぎ。明れば松江の風に帆を揚。浪路に日數を重ぬれば。都を御出有て後。廿六日と申に。御船隱岐の國に着にけり。佐々木隱岐の判官貞清府の島と云所に。黒木の御所を作て。皇居とす。玉簾に咫尺なく。召仕れける人とては。六條少將忠秋。頭大夫行房。女房にゐ。三位殿の御局計なり。昔の玉樓金殿に引替て。憂節繁き竹緣涙隙なき松のかき。一夜を隔つる程も。さへ忍べき御心地ならず。雞人曉を唱へし聲。警固の武士の。音催す聲計御枕の上に近けれバ。夜のおとゞに入せ給ひても。露目睡ませ給はず。萩の戸の明るを待し。朝政事なければ。巫山の雲雨。御夢に入時も。誠に曉毎の御勤め。北辰の御拜も怠らせ給はず。今年何なる年あれば。百官罪なうして。愁の涙を。配所の月に滴づて。一人位をかへ。宸襟を他鄕の風に惱まし給ふらん。天地開闢より以來。かゝる不思議を聞ず。されば天にかゝる日月も。誰が爲にか明らかなる事を恥ざらん。情なき草木も。これを悲しみ。花

訂正太平記　卷之五

○持明院殿御即位の事

元弘二年三月廿二日。後伏見院の第一の御子。御年十九にして。天子の位に即せ給ふ。御母は竹内の左大臣。公衡の御娘後には廣義門院と申せし御事なり。同き年十月廿八日には。河原の御祓あて。十一月十三日に。大嘗會を遂行はる。關白は。鷲司の左大臣冬敎公。別當は日野中納言資名卿にてぞ御座ける。いつしか當今奉公の人々いみな。一時に望を達して。門前市をなし。堂上花の如し。中にも梶井二品法親王尊胤は。天台座主にならせ給て。大塔梨本の兩門跡を幷て。御官領有しかば。御門徒の大衆群集して。御拜堂の儀式嚴重なり。しかのみならず。御室の二品法親王法守。仁和寺の御門跡に御移り有て。東寺一流の法水を湛へて。北極万歳の聖運を祈り給ふ。これ皆後伏見院御子。今上皇帝の御連枝なり

○宣房卿二君奉公の事

万里小路大納言宣房卿は。元來先朝舊勞の寵臣にて御座し上。子息藤房季房二人。笠置の城にて生捕れて。遠流に處せられしかば。父の卿も罪科深き人にて有べかりしを賢才の聲へ有迚。關東別義を以て。其罪を宥當今に召仕はるべきの由奏し申。これに依て日野中言納資明卿を勅使にて。

咲事を忘れつべし

訂正太平記　卷之四　終

此旨を仰せ下されければ。宣房卿勅使に對して申されけるは。臣不肖の身なりといへ共。多年本公の勞を以て。君の恩寵を蒙り。官祿共に進み。剩へ政道補佐の名を汚し。君に仕ふるの禮其罪有に値て。嚴顏を犯して。道を以て諫め爭ふ。三度諫納られざる時は身を奉じて以て退く匡正の忠有て。阿順の從なし。是良臣の節あり。若諫むべきを見て諫ざる。是を尸位と云。退くべきを見て退かざるこれを懷寵と云。懷寵尸位は國の奸人ありと云り。君今不義の行ひ御座して。武臣の爲に辱しめられ給へり。是臣が豫じめ知ざる所に由て諫言を獻ずといへ共。世人豈其罪なき事を許さんや。就中長子二人遠流の罪に處せられて。我已に七旬の齡に傾けり。後榮誰が爲にか期せん先非何ぞ又耻ざらんや。二君の朝に仕へて辱を衰老の後に抱かんよりは。伯夷が行を學で。飢を首陽の下に忍ばんには如じと涙を流して宣ひければ。資明卿感流をさゝへかねて。暫しは物をもの給はず。良有て宣ひけるは忠臣必ずしも主を擇ばず。仕へて治むべきを見るのみありと云へり。されば百里奚は二たび秦の穆公に仕へて。長く霸業を致さしむ。管夷吾は却て齊桓公を佐て。九度諸侯を朝せしむ。主以て鉤を射るの罪を云事あし。世皆皮を鬻の恥を何共せずと云り。なかんづく武家此の如許容の上は。賢息二人の流罪をも。爭でか赦免の御沙汰なからんや。夫伯夷叔齊は。飢て何の益か有し。許由巢父遁れて用るに足ず。抑身を隱して永く末葉の一跡を斷し。

朝に仕へて遠く前祖の無窮を輝さんと。是非得失何れの所にか有や。鳥獸と群を同じうするは孔子の取ざる所なりと。資明卿理を盡して責られければ。宣房卿顏色誠に屈伏して。罪を以て生を棄る時は。則古賢夕べに改めよと云の勸に違ふ垢を忍で苟しくも全する時は詩人胡の顏か有と云の譏を犯すと。魏の曹子建が詩を獻せし表に書たりしも。理りとこそは存ずれとて。遂に參仕の勅答をぞ申されける

○中堂新常燈消事

其比都鄙の間に。奇代の不思議共多かりけり。山門の根本中堂の內陣へ。山鳩一番飛來て。新常燈の油盞の中へ飛入て。慌けける間。灯明忽ちに消にけり。此山鳩堂中の暗さに行方に迷ふて。佛壇の上に翅を低て居たりける處に。承塵の中より。其色朱を指たる如なる鼬一疋走り出て。此鳩を二ながら。食殺さてぞ失にける。抑此常燈と申ハ。先帝山門へ臨幸ありたりし時。古へ桓武皇帝の。自から挑げさせ給し。常燈に準へて。御手づから。百廿筋の灯心を束ね銀の御錠に油を入て。自ら搔立させ給し灯明なり。是偏に皇統の無窮を輝さん爲の御願。兼ては六趣の群類の明暗を照す。惠光の灯明なるに思召準へて。始置れし常燈あれば。未來永劫に至る迄。消る事なかるべきに。山鳩飛來て。打消けるこそ不思議なれ。それを又玄獵の喰殺しけるも不思議なり

○相模入道弄田樂事幷鬪犬の事

又其比洛中に田樂を弄ふ事昌にして。貴賤擧て是に着せり。相模入道此事を聞及び新座本座の田樂を呼降して。日夜朝暮に弄ぶこと他事なし入興の餘りに。宗徒の大名達に。田樂法師を一人づゝ預けて。裝束を飾らせける間。是は誰がし殿の田樂。彼は某殿の田樂なんど云て。金銀珠玉を逞くし。綾羅錦繡を飾れり。宴に臨て。一曲を奏すれば相模入道を始として。一族の大名我劣らじと。直垂大口を解抛出す。是を集て積に。宛も山の如し。其弊幾千万と云數を知ず。或は一献の有けるに。相模入道數盃を傾け。醉に和して立て舞事長久し。若輩の輿を勸むる舞にてもあし。又狂者の言を巧にする戯れにも非ず。四十有餘の古入道醉狂の餘りにまふ舞なれば。風情有べし共覺へざりける所に。何くより來る共知ぬ新座本座の田樂共。十餘人忽然として。坐席に列なりて。舞歌ける。其興甚だ尋常に越たり。暫く有て柏子を替て。歌ふ聲を聞ば。天王寺の妖靈星を見ばやとぞはやしける。或官女此てゑを聞て餘りの面白さに。障子の隙より此を見に。新座本座の田樂共と見つる者。一人も人にて無りけり。或は背勾て鷄の如く成も有。或は身に翅有て。其形山伏の如く成も有。異類異形の媚者共が姿を人に變じたるにてぞ有ける。官女是を見て。餘りに不思議に覺へければ。人を走らかして城の入道にぞ告たりける。入道取物も取敢ず。

太刀を取て其酒宴の席に臨む。中門を荒らかに歩みける跫を聞て化者は搔消様に失。相模入道は。前後も知ず醉臥たり。燈を挑げさせて。遊宴の座席を見るに。誠に天狗の集りけるよと。覺て踏汚したる疊の上に。禽獸の足跡多し。城の入道暫く虛空を睨で立たれ共。敢て眼に遮るものなし。良久くして。相模入道驚覺て起たれ共。忙然として更に知る所なし。後日に南家の儒者刑部少輔仲範此事を傳聞て。天下將に亂れんとする時。妖靈星と云惡星下て災を爲といへり。しかも天王寺は。佛法最初の靈地にて。聖德太子自ら日本一州の。未來記を留め給へり。されば彼化者が。天王寺の妖靈星と。歌ひける社怪しけれ。いか様天王寺邊より。天下の動亂出來て。國家敗亡しぬと覺ゆ哀れ國主德を治め。武家仁を施して。妖を消の謀を致されよかしと云けるが。果して思ひ知るゝ世に成にけり。彼仲範。實に未然の凶を鑑みける博覽の程こそ有難けれ。相模入道かゝる妖怪にも驚かず。益々奇物を愛する事止時なし。有時庭前に。犬共集りて。咬合けるを見て。此禪門面白の事に思て。是を愛する事骨髓に入れり。則諸國へ相觸て。或は正税官物に募て。犬を尋ね。或は權門高家に仰て。是を求めける間。國々の守護國司所々の一族大名。十疋廿匹飼立て。鎌倉へ引進らす。是を飼に魚鳥を以てし。是を維に金銀を鏤む。其弊甚だ多し。輿に乘て路治を過る日は。道を急ぐ行人も。馬より下て是に跪き。農を勸むる里民も。夫に取らて是

を昇。此の如く賞翫輕からざりければ。肉に飽錦を衣たる奇犬。鎌倉中に充滿して。四五千匹に及べり。月に十二度犬合の日とて定られしかば。一族大名。御内とざまの人々。或は堂上に坐を列ね。或は庭前に。膝を屈して見物す時に兩陣の犬共を。一二百匹づゝ放し合たりければ。入違へ追合て。上にあり。下に成。咬合聲天を響し。地を動かす。心無人は是を見て。荒面白や。只戰に雌雄を決するに異ならずと思ひ。智有人は是を聞て。穴忌々しや。偏に郊原に尸を爭ふに似たりと悲しめり。見聞の準る所。耳目異ありといへ共。其前相皆鬪爭死亡の中に有て。淺猿かりし擧動なり

○時政榎島に參籠の事

時已に澆季に及で。武家天下の權を。執事。源平兩家の間に落て。度々に及べり。然共天道は必ず盈るを缺故に。或は一代にして亡び或は一世をも待ずして失ぬ。今相摸入道の一家。天下を保事已に九代に及ぶ。此事故有。昔鎌倉草創の始め。北條の四郎時政。榎島に參籠して。子孫の繁昌を祈けり。三七日に當りける夜。赤き袴に柳裏の衣着たる女房の。端嚴美麗なるが忽然として。時政が前に來て告て曰。汝が前生は箱根法師也。六十六部の法華經を書寫して。六十六ケ國の靈地に奉納したりし善根に由て。再び此土に生る事を得たり。されば子孫永く日本の主と成て。榮花に誇るべし。但し其行跡違ふ所有ば。七代を過べからず。吾云所不信あらば。國々に納し所の靈地を見よと云捨て歸り給ふ其姿を見れば。さしも嚴しかりつる女房。忽ちに臥長二十丈計の大蛇と成て。海中に入にけり。其跡を見るに。大なる鱗を三つ落せり。時政所願成就しぬと喜で則彼鱗を取て。旗の紋にぞ押たりける。今の三鱗形の紋是也。其後辨才天の御示現に任て。國々の靈地へ人を遣して。法華經奉納の所を見せけるに。俗名の時政を。法師の名に替て。奉納箱の上に。大法師時政と書たる社不思議なれ。されば今相摸入道。七代を過て。一天下を保ける も榎の島の辨才天の御利生又は過去の善因に感じてける故なり。今の高時禪門已に七代を過。九代に及べり。されば亡ぶべき時刻到來して。かゝる不思議の振舞をも。せられけるかとぞ覺へける

○大塔宮熊野落の事

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召れん爲に。暫く南都の般若寺に。忍んで御座ありけるが。笠置の城已に落て主上囚れさせ給ぬと聞へしかば。虎の尾を踏恐れ。御身の上に迫りて。天地廣しといへ共。御身を隱さるべき所なし。日月明かありといへ共。長夜に迷へる心地して。晝は野原の草に隱れて露に臥鶏の床に御涙を爭ひ。夜は孤村の辻に彳て。人を咎むる里の犬に。

御心を腦さる。何くとても御心安かるべき所なかりければ。角ても暫いと思召れける所に一乘院の侯人。按察法眼好專何して聞たりけん。五百餘騎を卒して未明に般若寺へぞ寄たりける。折節宮に付奉つたる人獨りも無りければ。一防ふせぎて。落させ給ふべき樣もおかりける上。透間もなく兵已に寺内に打入たれば紛て御出有べき方もおし。さらばよし自害をせんと思し召て。已に推袒脫せ給たりけるが。事叶はざらん期に臨で。腹を切ん事は最安かるべし若やと隱れて見ばやと思召返して。佛殿の方を御覽ずるに。人の讀かけて置たる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を明ず。一つの櫃い御經を半ば過取出して。蓋をもせざりけり。此蓋を開たる櫃の中へ。御身を縮て臥せ給ひ。其上に御經を引被て。隱形の呪を御心の中に唱へてぞをはしける。若搜し出されば頓て突立んと思召て。氷の如おる刀を拔て。御腹にさし當て。兵爰にこそと云んずる。一言を待せ給ける。御心の中。推量るも猶淺かるべし。去程に兵佛殿に亂れ入て。佛壇の下。天井の上迄も。殘る所なく搜しけるが。餘りに求かねて。是躰の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開て見よとて蓋したる櫃二つを開て御經を取出し底を翻して見けれ共おはせず。蓋開たる櫃は見る迄もなしとて兵みな寺中を出去ぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ。夢に道行心地して。猶櫃い中におはしけるが。若又兵立歸り委しく搜す事もや有んずらんと御思案有て。頃て前に

兵の搜し見たりつる櫃に。入替せ給てぞおはしける。案の如く兵共又佛殿に立歸り。前に蓋の開たるを見ざりつるが覺束おしとて。御經をみな打移して見けるが。からくと打笑ふて。大般若の櫃の中を能々搜したれば。大塔宮は居らせ給はで大唐の玄弉三藏こそ坐しけれと戲れければ兵皆一同に笑て。門外へぞ出にける。是偏に摩利支天の冥應。又は十六善神の擁護により命なりと。信心肝に銘じ。感涙御袖を潤せり。角ては南都邊の御隱れ家も叶ひ難ければ。則ち般若寺を御出有て。熊野の方へぞ落させ給ひける。御供の衆にて光林房玄尊。赤松律師則祐。木寺の相摸。岡本の三河房。武藏房。村上彦四郎。片岡八郎。矢田彦七。平賀の三郎。彼是以上九人なり。宮を始奉て。御供の者迄も。皆柿の衣に笈を懸。頭巾眉半ばに責。其中に年長ぜるを先達に作立。いなか山伏の。熊野參詣する躰にぞ見せたりける。此君本より。龍樓鳳闕の中に長と成せ給て。花軒香車の外を。出させ給はぬ御事なれば。御步行の長途い。定て叶はせ給はじと。御供の人々。兼ては心苦しく思ひけるに。案に相違して。何習いせ給ひたる御事おらね共。怪しげなるたびはゞき。草鞋を召て少しも草臥らる御氣色もおく。社々の奉幣宿々の御勤懈らせ給はざりければ。路治に行合ける道者も勤修を積る先達も。見尤むる事無りけり。由良の湊を見渡せば。沖漕舟の楫をたへ浦の濱ゆふ幾重共。知ぬ浪路に鳴千鳥紀の路の遠山渺々と。藤代の松に懸れる

磯の波。和歌吹上を他所に見て。月に瑩ける玉津島。光りも今はさらでだに。長汀曲浦の旅の路。心をくだく習ゐるに。雨を含める孤村の樹。夕を送る遠寺の鐘哀を催す時しもあれ。切目の王子に着給ふ。其夜ゝ叢祠の露に御袖を片敷て。通夜祈申させ給ひけるは。南無歸命頂禮三所權現滿山の護法。十万の眷屬。八万の金剛童子。垂跡和光の月明らかに。分段同居の闇を照し。逆臣忽に亡びて。朝廷再び輝く事を得せしめ給へ。傳へ承はる。兩所權現は。これ伊弉諾伊弉冊の應作なり。我君其苗裔として。今朝日忽に浮雲の爲に隱されて冥闇たり。豈傷まざらんや。玄鑒空しきに似たり。神若神たらば。君何ぞ君たらざらんと。五躰を地に投て。一心に誠を致してぞ祈申させ給ひける。丹誠無二の御勤め。感應なぞか有ざらんと。神慮も暗に測れたり。終夜の禮拜に。御窮屈有ければ。御肱を曲て枕として暫く御目睡有ける御夢に。髪結たる童子一人來て。熊野三山の間は。猶も人の心不和にして大儀成難し。是より十津川の方へ御渡り候て。時の至らんを御待候へかし。兩所權現より。案内者に付進られて候へば。御道しるべ仕るべく候と。申すと御覽ぜられ。御夢は則ち覺にけり。是權現の御告なりけりと。憑もしく御召れければ。未明に御悦びの奉幣を捧げ。頓て十津河を尋ねてぞ分いらせ給ける。其道の程三十餘里が間には。絶て人里もなかりければ或は高峯の雲に枕を欹て。苔の莚に袖を敷。或は岩漏水に渴を忍て朽たる橋に肝を消。山路本より雨なうして。空翠常に衣を濕す。向上れば。万仞の青壁刀に削り。直下は。千丈碧巒に藍に染り。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば。御身も草臥果て。流るゝ汗水の如し。御足ゝ缺損じて。草鞋皆血に染れり。御供の人々も。皆其身鐵石に非ざれば。皆飢疲れて。墓々敷も歩み得ざりけれ共。御腰を押御手を引て。路の程十三日に。十津河へぞ。着せ給ひけり。宮をばとある辻堂の内に置奉て。御供の人々は在家に行く熊野參詣の山伏共。道に迷ふて來れる由を云ければ。在家の者共憐みを垂て。粟の飯椽の粥なぞ取出して。其飢を相助く宮にも此等を進せて。二三日は過けり。角ては始終何有べし共覺へざりければ。光林房玄尊とある在家の。是ぞさも有人の。家あるらんと覺しき所に行て。童部の出たるに。家主の名を問へば。是は竹原八郎入道殿の甥に。戸野兵衛殿と申人の。所にて候と申ければ。扨ゝ是祉弓矢取て去者と聞及ぶ者なれ。何にもして是を頼まばやと思ければ。門の内へ入て。事の樣を見聞所に。内に病者有と覺へて。哀れ貴からん山伏の出來れかし。祈らせ參らせんと云聲しけり。玄尊すはや。究竟の事祉あれと思ければ。聲を高らかに揚て。是は三重の瀧に七日打れ。那智に千日籠て。三十三所の巡禮の爲に。罷出たる山伏共。路に踏迷ふて此里に出で候。一夜の宿を貸し。一日の飢をも休給へと云たりければ。内より怪げなる下女一人出合。是こそ然るべき佛神の御計ひと覺へて候へ。是の主の女房。

物の怪を病せ給ひ候。祈りてたばせ給はらんやと申せば。玄尊我等は夫山伏にて候間叶ひ候まじ。彼に見へ候辻堂に。足を休て居られ候先達こそ。効驗第一の人にて候へ。此樣を申さんに。仔細候はじと云ければ。女房大に悦で。さらば其先達の御房是へ入進らせさせ給へと云て。喜び合る事限りなし。玄尊走歸て此由を申ければ。宮を始奉て。御供の人。皆かれが館へ入せ給ふ。宮病者の伏たる所へ御入有て。御かぢ有。千手陀羅尼を二三返高らかに遊ばされて。御念珠をなし採せ給ければ。病者自ら口走て。樣々の事を云ける。誠に明王の縛に。掛られたる躰にて。足手を縮て戰き。五躰に汗を流して。物怪則立去ぬれば。病者忽ちに平愈す主の夫斜あらず。喜で我蓄へたる物候はねば。別の御引出物迄は叶ひ候まじ。枉て十餘日是に御逗留候て。御足を休させ給へ。例の山伏楚忽に忍て御逃候ぬと存候へば。恐れながら是を御質に給いはんとて面〳〵の笈共を取合て皆内にぞ置たりける。御供の人々。上には其氣色を顯はさずといへ共。下には皆悅び思へる事限なし。角て十餘日を過させ給けるに。或夜あるじの兵衛の尉。客殿に出て。薪火などせさせ。四方山の物談共したる次に申けるい。旁々は定て聞及ばせ給ひたる事も候らん。誠やらん大塔宮。京都を落させ給ひて。熊野の方へ趣かせ給候けんなる。三山の別當定遍僧都い。無二の武家方にて候へば。熊野邊に御忍びあらん事は。成難く覺へ候。哀此里へ御入候へかし。

所こそ分内は狹く候へ共。四方皆嶮岨にて。十里廿里が中へは鳥も翔り難き所にて候其上人の必偽らず。弓矢を取事。世に超たり。去ば平家の嫡孫維盛と申ける人も。我等が先祖を賴て。此處に隱れ。遂に源氏の世に。恙なく候けるとこそ承り候へと語ければ。宮誠に嬉しげに。思召たる御氣色顯はれて。若大塔宮なんどの。此所へ御憑み有て。入せ給ひたらば。賴まれさせ給はんずるかと問せ給へば。戸野兵衛。申にや及び候。身不肖に候へ共。某一人だにかゝる事ぞと申さば鹿瀨。撫坂湯淺阿瀨川。小原。芋瀨。中津河。吉野十八鄕の者迄も。手刺者候まじきにて候とぞ申ける。其時宮小寺相摸に屹と御目合有ければ。相摸此兵衛が側に居よつて今は何をか隱し申べき。ある先達の御房こそ大塔宮にて御ざあれと云ければ。此兵衛尙も不審あげにて。彼是の顏を。つく〳〵と守りけるに。片岡八郎。矢田彦七。あら熱やとて。頭巾を脫で側にさし置。實の山伏ならねば。月額の跡隱れなし。兵衛是を見て實も山伏にて御座さりけり。賢ぞ此事を申出たりける穴淺猿し此程の振舞。さこそびろうに思召候つらんと。以の外に驚て。首を地につけ。手を束ね。疊より下て蹲踞せり。俄に黑木の御所を作て。宮を守護し奉り。四方の山々に闘を居。路を切塞で用心嚴しくぞ見へたりける。是も猶大義の計略叶がたしとて。叔父竹原八郎入道に此由を語りけれバ。入道頓て戸野が語ひに隨て我館へ宮を入進らせ無二の氣色にみへけれ

ば。御心安く思召て。こゝに半年計御ざ有ける程に。人に見知れじと。思召れける御したくに。御還俗の躰にならせ給ひければ。竹原八郎入道が息女を。夜のをとゞへ召れて。御覺へ他に異なり。扨こそ家主の入道も。彌志を傾けり。近邊の鄕民共も。次第に歸伏申たる由にて。却て武家をば褊したり。去程に熊野の別當定遍。此事を聞て。十津河へ寄んずる事は。縱ひ十万騎の勢あり共。叶ふべからず。其邊の鄕民共の。欲心を勸て宮を他所へ。誘き出し奉らんと相計て。道路の辻に札を書て立けるは。大塔宮を討奉りたらんものには非職凡下をいなず。伊勢の車の庄を恩賞に宛行はるべきよし。關東の御敎書これ有。其上に定遍此三日が中に六万貫を與ふべし。御内伺候の人御手の人を討たらん者には。五百貫。降人に出たらん輩には。三百貫何れも其日の中に。必ず沙汰し與ふべしと定て奥に起請文の詞を載て。嚴密の法をぞ出しける。ろれ移木の信は約を堅くせんが爲。獻芹の賂は。心を奪はんが爲なれば。欲心强盛の八庄司共。此札を見てければ。いつしか心變じ。色替つて。奇さ振舞共にぞ聞へける。宮かくては。此所の御住居。始終惡かりなん。吉野の方へも御出あらばやと仰られけるを。竹原入道。いか成事や候べきと。强て留申ければ。彼が心を破らん事も。さすがに叶はせ給いで。恐懼の中に月日を送らせ給ける。結句竹原入道が子共さへ。父が命を背て。宮を討奉らんとする企ありと聞へしかば。宮潛に。

十津川を出させ給て。高野の方へぞ趣かせ給ひける。其路。小原。芋瀨。中津川と云。敵陣の所を經て通る道なれば。中〳〵敵を打憑て見ばやと思召れ。先芋瀨の庄司が許へ入せ給けり。芋瀨宮をば。我館へ入進らせずして。側なる御堂に置奉り。使者を以て申けるは。三山の別當定遍武命を含で。隱謀與黨の輩をば。關東へ注進仕る事にて候へば。此道より左右なく通し進らせん事。後の罪科。陳謝するに據有べからず候。去ながら宮を留進らせん事は。其恐れ候へば。御供の人々の中に。名字さりぬべからんずる人を。一兩人給つて武家へ召渡し候か。然らずんば。御紋の旗を給つて合戰仕て候つる。支證是にて候と。武家へ申べきにて候。此二つの間。何れも叶間敷との御意にて候はゞ。力なく一矢仕らんずるにて候と。誠に又餘義もなげにぞ申入たりけり。宮は此事何れも難義なりと思召て。敢て御返事も無りけるに。赤松律師則祐。進み出て申けるは。危をみて命を致すい。士卒の守る所に候。されば紀信は詐て敵に降り。魏豹は留て城を守る。是皆主の命に代て。名を留し者にて候はずや。兎ても角ても彼が所存解て御所を通し進らすべきにてだに候ハゞ。則祐御大事に代て。罷出候はん事は子細有まじきにて候と申せば。平賀の三郎是を聞て。末座の意見。卒爾の義にて候へ共。此艱苦の中に付纒ひ奉りたる人は。一人なりといへ共。上の御爲には。股肱耳目よりも捨がたく思召れ候べし。中づく芋瀨の庄司が申

所。實默止されがたく候へば。其安きに付て御旗計を下され候には。何の煩か候べき。戰場に馬物の具を捨。太刀刀を落して。敵に取るゝ事。さまでの恥あらず。只彼が申請る旨に任せて。御旗を下され候へかしと申ければ。宮實もと思召て。日月を金銀にて打て付たる。錦の御旗を。芋瀬の庄司にぞ下されける。角て宮は。遙に行過させ給ぬ。暫有て。村上彦四郎義光。遙の道に下り。宮に追付進らせんと。急ぎけるに。芋瀬の庄司はしたゝく。道にて行合ぬ。芋瀬が下人に持せたる旗を見れば。宮の御旗なり。村上怪で事の樣を問に。去か〳〵の由を語る。村上こはそも何事ぞや。忝も。四海の主にて御座天子の御子の。朝敵御追罰の爲に。御門出有路次に參り合て。汝等程の大凡下の奴原が。左樣の事仕るべき樣や有と云て。則御旗を引奪て取。剩へ。旗持たる芋瀬が下人の。大の男を摑で。四五丈計ぞ拋たりける。其怪力比類あさにや恐れたりけん。芋瀬の庄司一言の返事もせざりければ。村上自ら御旗を肩に懸て程なく宮に追付奉る。義光御前に跪て此樣を申ければ。宮誠に嬉しげに。打笑せ給て。則祐が忠は孟施舍が義を守り。平賀が智は陳丞相が謀を得。義光が勇は。北宮黝が勢ひを凌げり。此三桀を以て。我何ぞ天下を治めざらんやと。仰られけるぞ忝なき。其夜椎柴垣の隙あらはある。山賤の庵に。御枕を傾けさせ給て。明れば小原へと志て薪負たる山人の行逢たるに。道の樣を御尋有けるに。心無

樵夫迄も。さすが見知參らせてや有けん。薪を下し地に跪て。是より小原へ。御通り候はん道には。玉置の庄司殿とて。無二の武家方の人おはしまし候。此人を御語ひ候はでは。幾等の大勢にても。其前をば御通り候ぬとは覺へず候。恐れ有申事にて候へ共。先人を一二人御使に遣されて。彼人の所存をも。聞召れ候へかしとぞ申ける宮つく〳〵と聞召て。芻蕘の詞迄も。捨ずと云は是あり。實も樵夫が申所。さもと覺ゆるぞとて片岡八郎。矢田彦七二人を。玉置の庄司が許へ遣されて。此道を御通り有べし。道の警固に。木戸を開き。逆茂木を引除させよとぞ仰られける。玉置庄司御使に出合て事の由を聞て。無返事にて内へ入けるが。頓て若黨中間共に。物の具させ。馬に鞍置。事の躰騒しげに見へければ二人の御使。否々此事叶まじかりけり。さらば急ぎ走歸て。此由申さんとて。足早に歸れば。玉置が若黨五六十人。取太刀計にて追懸たり。二人の者立留まり。小松の二三本有ける陰より跳り出で。眞先に進んだる武者の。馬の諸膝薙で刎落させ。返す太刀にて首打落して。仰たる太刀を押直してぞ。立たりける。跡に續て追ける者共も。是を見て敢て近付者一人もあし。只遠矢に射すくめければ。片岡八郎。矢二筋射付られて。今は助かり難しと思ひければ。や殿矢田殿。我は迚も手負たれば。此にて討死せんずるぞ。御邊は急ぎ。宮の御方へ走參て此由を申て一まども。落去參らせよと。再往强て云ければ。矢田も一所にて。討

死せんと思けれ共。實に宮に告申さゞらんは。却て不忠なるべければ。力なく。只今打死する傍輩を見捨て歸りける。心の中。推量られて哀なり。矢田遙に行延て跡を返り見れば片岡八郎。早討れぬと見へて。首を太刀の鋒に。貫きて持たる人有。矢田急ぎ走り歸て。此由を宮に申ければ。扨は遁れぬ道に行迫りぬ。運の窮達。歎くに詞なしとて。御供の人々に至る迄。中〳〵騷ぐ氣色ゞなかりける。さればとて此に留るべきに非ず。行れんずる所まで行やとて。上下卅餘人の兵共。宮を先に立進らせて。問々山路をゞ越行ける。既に中津川の峠を越んとし給ひける所に。向ふの山の峯に。玉置が勢と覺へて。五六百人が程。混冑に鎧て。楯を前にすゝめ。射手を左右へ分て時の聲をゞ擧たりける。宮是を御覽じて。玉顏殊に儼に打笑せ給ひて。御手の者共に向て。矢種の有んずる程は。防矢を射よ。心靜に自害して。名を万代に貽すべし。但各相搆て。我より先に腹切事有べからず。吾已に自害せば。面の皮を剝耳鼻を切て。誰が首共見へぬ樣にして捨べし。其故は我首をもし。獄門に懸て曝されなば。天下に御方の志を存せん者は。力を失ひ武家は彌恐るゝ所なかるべし。死せる孔明生る仲達を走らしむと云事有。されば死して後迄も。威を天下に殘すを以て良將とせり。今は迚も遁れぬ所ゞ。相搆て人々。蓬なびれて敵に笑はるなと仰られければ。御供の兵共。何故か蓬びれ候べきと申て。御前に立て敵の大勢にて責上

りける。坂中の邊迄下向ふ。其勢僅卅二人。是皆一騎當千の兵とはいへ共。敵五百餘騎に打合て。戰ふべき樣はなかりけり。寄手は楯を雌羽に付慕てかづき裏り。防ぐ兵は打物の鞘を脫して。相懸りに近付所に。北の峯より。赤旗三流。松の嵐に翻して。其勢六七百騎が程懸出たり。其勢次第に近付儘に。三手に分て時の聲を揚て。玉置の庄司に相向ふ。眞先に進んだる武者大音聲を揚て。紀伊國の住人野長瀨六郎。同七郎。其勢三千餘騎にて大塔宮の御迎ひに參る所に。忝も此君に對ひ進らせて。弓を控楯に列る人は誰や。玉置の庄司殿と見るは僻目か。只今滅べき武家の逆命に隨て。即時に運を開かせ給ふべき。親王に敵對申ては。一天下の間。何れの所にか。身を置んと思ふ。天罰遠からず。是を鎭めん事我等が一戰の內に在り。餘すな漏すなと。喚き叫てゞ懸りけり。是を見て玉置が勢五百餘騎。叶はじとや思けん。楯を捨旗を卷て忽ちに四角八方へ逃散ぬ。其後野長瀨兄弟冑を脫ぎ弓を脇に挾で。遙に畏る。宮の御前近く召れて。山中の躰たらく。大義の計略叶難るべき間。大和河內の方へ打出て。勢を付んが爲に。進發せしむるの處に。玉置の庄司只今の振舞。當手の兵万死の中に。一生をも得難しと。覺つるに。不慮の扶に逢事。天運猶憑有に似たり。抑此事何として存知たりければ。此戰場に馳合て。逆徒の大軍をば靡ぬるゞと。御尋ね有ければ。野長瀨畏まつて申ければ。昨日の晝程に。年十四五計に候

ひし童の。名をば老松と云りと名乗て。大塔宮明日十津川を御出有て。小原へ御通りあらんずるが。一定道にて。難に逢せ給ぬと覺ゆるぞ志を存せん人ハ。急ぎ御迎ひに參れと。觸廻り候つる間。御使ぞと心得て參て候とぞ申ける。宮此事を御思案有に。徒事に非ずと思し召合せて。年頃御身を放されざりし。膚の御守を御覽ずるに。其口少し開きたりける間。彌怪く思召て。則ち開き御覽せられければ。北野の天神の御神躰を。金銅にて鑄參らせられたる。其御眷屬。老松の明神の御神躰。遍身より汗かいで。御足に土の付たるぞ不思議なる。扨は佳運神慮に叶へり。逆徒の退治何の疑ひか有べきとてろれより宮は。槇野の上野房聖賢が拵へたる。槇野の城へ御入有けるが。此所も猶分内せばくて。惡かるべしと御思案有て。吉野の大衆を語らはせ給て。愛善寶塔を城廓に搆へ岩切とをす吉野川を前に當て。三千騎騎を隨へて。楯籠せ給ひけるとぞ聞へし

訂正太平記 卷之五 終

訂正太平記 卷之六

○民部卿三位局御夢想の事

夫年光停らざる事。奔箭下流の水の如。し哀樂互に替る事。紅榮黄落の樹に似り。然れば世の中の有様。只夢とや云ん。幻とや云ん。憂喜共に感ずれば。袂の露を催す事。今に始ずといへ共去年九月に笠置の城破れて。先帝隱岐の國へ移されさせ給し後は。百司の舊臣悲みを抱て所々に籠居し。三千の宮女涙を流して。面々に臥沈み給ふ有様誠に憂世の中の習と云ながら。殊更に哀に聞へしは。民部卿三位殿、御局にて留めたり。それを何にと申に。先朝の御寵愛淺からざる上。大塔宮の。御母堂にて渡らせ給しかば。傍の女御后は。花の側の深山木の。色香も無が如くなり。然るを。世の中靜あらざりし後は。万引替たる。九重の内の御住居も定らず。荒のみ增る涙の上に。船流したる海士の心地して。よる方も無御思ひの上に打添て。君西海の歸らぬ浪に浮沈み。泪隙なき。御袖の氣色と承はりしかば。空しく思ひを。万里の曉の月に領け。宮は又南山の。道無雲に踏迷いせ給て。狂波たる御住居と聞ゆれど。書を三春の。暮の鴈に詫難し。彼と云。此と云。一方ならぬ御歎きに。青絲の髮疎かにして。いつの間に老は來ぬらんと怪れ。紅玉の膚消て。けふを限りの命共哉。と思召ける御悲しみの遣方なきに。年比の御祈の師とて。御誦經御撫物なん

と奉りける。北野の社僧の坊に御座して。一七日參籠の御志有由を仰られければ。此折節武家の聞へも憚り無には非ぬ共。日來の御恩も重く。今程の御有樣も御痛ましければ。情なくは何〻と思ひて。拜殿の傍に僅かなる一間を拵て。尋常の青女房なんどの參籠したる由にて置奉りけり。哀古へならば。錦帳に妝ゝ籠。鈔窓に艶を閉て。左右の侍女其數を知ず。當を輝して假冊奉るべきに。早晩しか引替たる御忍の物籠りなれば。都近けれ共。事問かゝす人もなし。只一夜の松の嵐に御夢を覺され。主忘れぬ梅が香に昔の春を思召出すにも。昌泰の年の末に荒人神と成せ給し。心つくしの御旅宿迄も今は君の御思ひに擬へ。又は御身の歎きに思召知れたる。哀の色の數々に御念誦を暫く休られて。御涙の内にかくばかり

忘れずゞ神も哀と思しれ心づくしの古への旅

と遊ばして。少し御目睡有ける其夜の御夢に衣冠正しくしたる老翁の。年八十有餘なるが。左の手に梅の花を一枝もち。右の手に鳩の杖をつき。最苦しげ成躰にて。御局の臥給ひたる。枕の邊に立給へり。御夢心地に思召けるは。篠の小篠の一節も。問べき人も覺へぬ都の外の蓬生に。怪や誰人の。道蹈迷へる休らひぞやと。御尋有ければ。此老翁世に哀なる氣色にて。云出せる詞は無て。持たる梅の花を。御前に指置て立歸りけり。不思議やと思召て御覽ずれば。一首の歌を短

冊に書り

廻りきて遂に澄べき月陰の暫し曇るを何歎らん

御夢覺て。歌の心を案じ給ふに。君遂に還幸成て。雲の上に住せ給ふべき瑞夢なりと。賴母敷思召けり。誠に彼聖廟と申奉るは。大慈大悲の本地。天滿天神の垂跡にて渡られ給へば。一度歩みを運ぶ人。二世の惡地を成就し。僅に御名を唱る輩。萬事の所願を滿足す。況や千行萬行の紅涙を滴り盡して。七日七夜の丹誠を致させ給へば。懇誠暗に通じて。感應忽ちに告有。豈已に澆季に及ぶといへ共。信心誠有時は。靈驗新也と。彌賴もしくぞ思召ける

○楠出張天王寺事付隅田高橋幷宇都宮が事

元弘二年三月五日。左近將監時益。越後守仲時兩六波羅に歸せられて。關東より上洛す。此三四年は。常盤駿河守範貞一人として。兩六波羅の成敗を司て有しが堅く辭し申けるに依てとぞ聞へし。楠兵衛正成。去年赤坂の城にて自害して。燒死たる眞似をして。落たりしを實と心へて武家より其跡に。湯淺孫六入道定佛を地頭に居置たりければ。今は河内の國に於ては。殊なる事あらじと。心安く思ける處に。同四月三日楠五百餘騎を卒して。俄に湯淺が城へ押寄て。息をも繼せず攻戰ふ。城中に。兵粮の用意乏しかりけるにや。湯淺が所領紀伊國の阿瀨川より。人夫五

六百人に。兵粮を持せて。夜中に城へ入んとする由。楠風に聞て。兵を道の切所へ差遣し。盡く是を奪取て。其俵に物の具を入替て。馬に負せ人夫に持せて。兵を二三百人兵士の樣に出立せて。城中へ入んとす。楠が勢是を追散さんとするまねをして。追つ。返しつ。同士軍をぞしたりける。湯淺入道是を見て。我兵粮を入るゝ兵共が。楠が勢と戰ふぞと心得て。城中より打て出て。ろゝろ成敵の兵共を。城中へぞ引入ける。楠が勢共。思ひの儘に城中に入すまして俵の中より。物の具共取出し。雁々と堅て。則時の聲をぞ揚たりける。城の外の勢。同時に木戸を破り。屏を越て責入ける間。湯淺入道。內外の敵に取籠られて戰ふべき樣も無りければ。忽ちに首を伸て。降人に出づ。楠其勢を合て七百餘騎にて。和泉河內の兩國を靡けて。大勢に成ければ。五月十七日に。先住吉天王寺邊へ打て出。渡邊の橋より南に陣を取。然る間和泉河內の早馬數浪を打て。楠既に京都へ責上る由告ければ。洛中の騷動斜ならず。武士東西に馳散て。貴賤上下周章事窮なし。かゝりければ。兩六波羅にハ。幾內近國の勢。雲霞の如く馳集て。楠今や責上ると待けれ共。敢て其義もなければ。聞にも似ず。楠小勢にてぞ有らん。此方より押寄て。打散せとて。隅田高橋を兩六波羅の軍奉行として。四十八ヶ所の篝。幷に在京人畿內近國の勢を合て。天王寺へ差向らる。其勢都合五千餘騎同廿日京都を立て。尼崎神崎柱松の邊に陣を取て。遠篝を燒て。

其夜を遲しと待明す。楠是を聞て。二千餘騎を三手に分。宗徒の勢をば。住吉天王寺に隱して。僅に三百騎計を。渡邊の橋の南に磬させ。大篝二三ヶ所に燒せて相向へり。是は態敵に橋を渡させて。水の深みに追はめ雌雄を一時に決せんが爲也。去程に明れば五月廿一日に。六波羅の勢五千餘騎。所々の陣を一つに合せ。渡部の橋迄打臨て。川向ひに磬たる。敵の勢を見渡せば。僅に二三百騎には過ず。剩へ瘦たる馬に。縄手綱懸たる躰の武者共あり。隅田高橋是を見て。されば こそ和泉河內の勢の分際。さこそ有らめと思ふに合せて。墓々敷敵は一人もあかりけり。此奴原を。一々に召擲て。六條河原に切懸て。六波羅殿の御感に預らんと云儘に。隅田高橋。人交もせず。橋より下を。一文字にぞ渡しける。五千餘騎の兵共是を見て。我先にと馬を進めて。或は橋の上を步ませ。或は河瀨を渡して。向の岸に懸揚る。楠が勢是を見て。遠矢少々射捨て。一戰もせず。天王寺の方へ引退く。六波羅の勢是を見て。勝に乘。人馬の息をも繼せず。天王寺の北の在家迄。揉に揉でぞ追たりける。楠思ふ程。敵の人馬を疲らかして。二千騎を三手に分て。一手は天王寺の東より。敵の弓手を請て懸出づ。一手は西門の石の鳥居より。魚鱗懸りに懸出づ。一手は住吉の松の陰より懸出。鶴翼に立て開き合す。六波羅の勢を見合れば。對揚すべき迄もなき大勢ありけれ共。陣の張樣しどろにて。却て小勢に圍れぬべくぞ見へたりける。隅田高橋是を見て。敵後

に大勢を隠して。たばかりけるぞ。此邊は馬の足立悪うして叶はじ廣みへ敵を帶さ出し。勢の分際を見計ふて。懸合せ〳〵。勝負を決せよと下知しければ。五千餘騎の兵共。敵に後を切れぬ先にと渡邊の橋を差て引退く。楠が勢是に利を得て。三方より。勝時を作て追懸る。橋近く成ければ。隅田高橋是を見て。敵は大勢にてはなかりけるぞ。此にて返し合せずんば。大河後に有て悪かりぬべし。返せや兵共と。馬の足を立直し〳〵下知しけれ共。大勢の引立たる事なれば。一返しも返さず。只我先にと橋の危をも云ず。馳集りける間。人馬共に。推落されて。水に溺るゝ者數をしらず。或は淵瀬をも知ず渡懸て。死ぬる者もあり。或は岸より馬を馳倒して。其儘討るゝ者もあり。只馬物の具を脱捨て。逃延んとする者は有共。返し合せて。戰わんとする者はなかりけり。然れば五千餘騎の兵共。殘り少なに打なされて。這々京へぞ上りける。其翌日に。何者か仕たりけん。六條磧に高札を立て。一首の歌をぞ書たりける

渡邊の水いか計はやけれゞ高橋落てすたる流るらん

京童の曲なれば。此落書を歌に作て謡ひ或は語傳へて笑ひける間。隅田高橋面目を失ひ。且くは出仕を留め。虚病してゞ居たりける。兩六波羅是を聞て。安からぬ事に思はれければ。重て寄んと議せられたり。其比京都餘りに無勢なり迚。關東より上られたる。宇都宮治部太輔を呼寄。

評定有けるい。合戰の習運に由て。雌雄替る事。古よりかさに非ず。然れ共今度南方の軍に負ぬる事。偏に將の計の拙によれり。又士卒の臆病なるが故なり。天下の嘲哢口を塞に所なし。中づく仲時能上りし後。重て御上洛の事は。凶徒蜂起せば。御向ひ有て。靜謐候へとの爲なり。今の如さんば。敗軍の兵を驅集て。幾度向候共。墓々敷合戰しつ共覺へず候。且は天下の一大事。此時にて候へば。御向ひ候て。御退治候へかしと宣ひければ。宇都宮辭退の氣色あうして申されけるは。大軍已に利を失て後。小勢にて罷向候はん事。何がと存候へ共。關東を罷出し始より。簡樣の御大事に逢て。命を輕くせん事を存候さ。今の時分必ずしも。合戰の勝負を。見る所にてだに候はゞ。一人にて候共。先罷向て一合戰仕り。難義に及び候わゞ。重て御勢をこそ申候わめと。誠に思定たる躰に見へてゞ歸りける。宇都宮一人武命を含で。大敵に向はん事。命を惜ひべきに非ざりければ。態宿所へも歸らず。六波羅より直に。七月十九日の午の刻に都を出で。天王寺へぞ下りける。東寺邊迄は主從僅に十四五騎が程と見へしが。洛中にあらゆる所の。手の者共馳加りける間四塚作道にては。五百餘騎にぞ成にける。路次に行逢者をば。權門勢家を云ず。乘馬を奪ひ。人夫を懸立て通りける間。行旅の往反路を曲。閭里の民屋扉を閉。其夜は柱松に陣を取て。明るを待。其志一人も。生て歸らんと思ふ者は無りけり。去程に河内國

の住人。和田孫三郎。此由を聞て。楠が前に來て申けるは。先日の合戰に。負脱を立て。京より宇都宮を向候なる。今夜已に柱松に付て候が。其勢僅に六七百騎には過じと聞へ候。先に隅田高橋が。五千餘騎にて向て候しをだに。我等僅の小勢にて追散し候しぞかし。其上今度は。味方勝に乘て大勢あり。敵は機を失て小勢なり。宇都宮縱ひ。武勇の達人成共。何程の事か候べき。今夜逆寄にして。打散して捨候ばやと云けるを。楠暫く思案して云けるは。合戰の勝負必しも。大勢小勢に依ず只士卒の志を。一に爲と。爲ざるとあり。されば大敵を見ては欺き。小勢を見ては畏よと申事是なり。先思案するに。先度の軍に。大勢打負て引退く跡へ。宇都宮一人。小勢に向て相向ふ志一人も生て歸らんと。思ふ者よも候はじと。其上宇都宮は。坂東一の弓矢取あり。紀清両黨の兵。元來戰場に臨で。命を棄る事。塵芥よりも猶輕くす。其兵七百餘騎。志を一にして戰を決せば。當手の兵縱ひ退く心なく共。大半は必ず討るべし。天下の事全く此般の戰に依べからず。行末遙の合戰に。多からぬ御方初度の軍に討れなば。後日り戰に誰か力を合べき。良將い戰はずして勝と申事候へば。正成に於ては。明日態と。此陣を去て引退き。敵に一面目有樣に思いせ。四五日を經て後。方々の峯に篝を燒て。一蒸むす程ならば。坂東武者の習程なく機勞れて。否々長居しては惡かりなん。一面目ある時。誘引返さんと云ぬ者は候はじ。懸るも

引も。折によるとは。箇樣の事を申なり。夜已に曉天に及べり。敵定て今は近付らん。いざゝせ給へとて。楠天王寺を立ければ。和田湯淺も諸共に。打連てゞ引たりける。夜明ければ。宇都宮七百餘騎の勢にて。天王寺へ押寄。古うつの在家に火を懸。時の聲を揚なれ共。敵なければ出合す。誑ぞすらん。此邊は。馬の足立惡して。道挾き間。懸入敵に中を破られな。後を裏れなと下知して。紀清両黨。馬の足を添て。天王寺の。東西の口より懸入て。二三度迄懸入〳〵しけれ共。敵一人も無して燒捨たる篝に烟殘て。夜は若々と明にけり。宇都宮戰はざる先に。一勝したる心地して。本堂の前にて馬より下。上宮太子を伏拜み奉り。是偏に武力の致す所に非ず。只併神明佛陀の擁護に懸れりと。信心を傾け。歡喜の思ひをなせり。頓て京都へ早馬を立て。天王寺の敵をば。即時に追落し候ぬと申たりければ。兩六波羅を始として。御内外樣の諸軍勢に至る迄。宇都宮が今度の振舞拔群なりと。譽ぬ人も無りけり。宇都宮天王寺の敵を。輙く追散したる心地にて。一面目は有躰なれ共顧て續て敵の陣へ。責入ん事も無勢なれば叶ず。又誠の軍一度もせずして。引返さん事もさすがあれば。進退谷つたる所に。四五日を經て後和田楠和泉河内の野伏共を。四五千人驅集て。然るべき兵二三百騎差副。天王寺邊に遠篝をゞ燒せける。すはや敵こそ打出たれと騷動して。更行儘に是を見れば秋篠や。外山の里。生駒の嶽に見ゆる火は。

晴たる夜の星よりも數く。もしは草。難波の里に燒篝は。漁舟に燃す漁火の波を燒かと怪しまる。物て大和。河内。紀伊國に有と有所の。山々浦々に。篝を燒ぬ所は無りける。其勢幾万騎有んと。推量られて。夥しく此の如する事。兩三夜に及び。次第に相近付ば。彌東西南北。四維上下に充滿して。闇夜に晝をかへたり。宇都宮是を見て。敵寄來らば。一軍して。雌雄を一時に決せんと志して。馬の鞍をも息めず。鎧の上帶をも取ず待懸たれ共。軍い無して。敵の取まわす勢ひに。勇氣疲れ。武力怠で哀引退ばやと思ふ心付けり。斯る所に。紀清兩黨の輩も。我等が僅の小勢にて。此大敵に當らん事は。始終何ゞと覺候。先日當所の敵を。事故なく追落して候つるを。一面目にして。御上洛候へかしと申ければ。諸人皆此義に同じ。七月廿七日の夜半計に。宇都宮天王寺を引て上洛すれば。翌日早旦に。楠頓て入替たり。誠に宇都宮と楠と相戰ふて。勝負を決せば。兩虎二龍の戰として。何も死を共にすべし。されば互に是を思けるにや。一度は楠引て謀を千里の外に廻らし。一度は宇都宮退て。名を一戰の後に失はず。これ皆智謀深く慮遠き良將成し故なりと。譽ぬ人もなかりけり。去程に楠兵衛正成は。天王寺に打出て威猛を顯すといへ共。民屋に煩をもなさずして。士卒に禮を厚くしける間。近國は申に及ばず。遐壤遠境の人牧迄も是を。聞傳へて我も〳〵と走加りける程に。其勢漸

強大にして。今ハ京都よりも討手をさうなく下さるゝ事は。叶ひ難しとぞみへたりける

○正成天王寺未來記披見の事

元弘二年八月三日。楠兵衛正成。住吉に參詣し。神馬三匹。これを献ず。翌日天王寺を詣て。白鞍置たる馬。白輻輪の太刀。鎧一兩副て引進す。是は大盤若經轉讀の御布施なり。啓白事終て宿老の寺僧卷數を捧て來れり。楠則ち對面して申けるは。正成不肖の身として。此一大事を思立て候事。涯分を計らざるに似たりといへ共。勅命の輕からざる禮義を。存するに由て。身命の危を忘たり。然るに兩度の合戰。聊か勝に乘て。諸國の兵招ざるに馳加れり。是天の時を興へ。佛神擁護の眸を廻らさるかと覺へ候。誠やらん傳へ承れば。上宮太子の。當初百王治天の安危を勘へて。日本一州の未來記を書留せ給て候なり。拜見若苦しからず候はゞ。今の時に當り候はん卷計。一見仕り候ばやと云けれバ宿老の寺僧答て云。太子守屋の逆臣を討て。始て此寺を立て。佛法を弘られ候し。後神代より始て。持統天皇の御宇に至る迄を。記されたる書舟卷をば。前代舊事本紀とて。卜部の宿禰是を相傳して。有職の家を立候。其外に又一卷の秘書を留られて候。是は持統天皇以來末世代々の王業。天下の治亂を記されて候。是をば輙く人の。披見する事は候ハぬ共。別義を以て竊に見參に入候べしとて。即秘府の銀鑰を開て。金軸の書一卷

を取出せり。正成悦で。即是を披覽するに。不思議の記文一段あり。其文に云

當人王九十五代天下一亂而主不安此時東魚來呑
四海日沒西天三百七十餘箇日西鳥來食東魚其後
海内歸一三年如獼猴者掠天下三十餘年大凶變歸
一元云々

正成不思議に覺へて。能々思案して此文を考るに。先帝已に。人王の始より。九十五代に當り給へり。天下一度亂れて主安からずと有は。是此時なるべし。東魚來て四海を呑とは。逆臣相摸入道の一類なるべし。西鳥東魚を食と有は。關東を亡す人有べし。日西天に沒とは。先帝隱岐國へ移されさせ給ふ事なるべし。三百七十餘ケ日とい。明年の春の比。此君隱岐の國より還幸成て。再帝位に即せ給ふべき事なるべしと。文の心を明らかに勘るに。天下の反覆久しからじと。憑しく覺へければ。金作の太刀一振。此老僧に與へて。此書をば本の秘府に納めさせけり。後に思合るに。正成が勘へたる所。更に一事も違ず。是誠に大權聖者の。末代を鑒て。記し置給し事なれ共。文質三統の禮變少しも違はざりけるは。不思議なりし讖文なり

○赤松入道圓心に大塔宮の令旨を給事

其比播磨の國の住人。村上天皇第七の御子。具平親王六代の苗裔。從三位季房が末孫に。赤松次郎入道圓心とて。弓矢取て無双の勇士あり。元來其心濶如として。人の下風に立ん事を思はざりければ。此時絶たるを繼廢れたるを興して。名を顯し。忠を抽でばやと思けるに。此二三年大塔宮に付纒奉て。吉野十津川の艱難を經ける。圓心が子息。律師則祐令旨を捧て來れり。披覽するに。不日に義兵を揚軍勢を卒し。朝敵を誅罰せしむべし。其功有に於ては。恩賞宜しく請に依べきの由載られたり。委細の事書十七ケ條の恩裁を添られたり。條々何れも家の面目。世の所望する事なれば。圓心斜ならず悦で。先當國小夜の庄菅縄の山に城を搆て。與力の輩を相招く。其威漸く近國に振ひければ。國中の兵共馳集て程なく。其勢一千餘騎に成にけり。只秦の世已に傾かんとせ一弊に乘て。楚の陳勝が蒼頭にして。大澤に起りしに異ならず。頓て杉坂山の里二ケ所に。闘を居山陽山陰の兩道を指塞ぐ。是より西國の道止て。國々の勢上洛する事を得ざりけり

○關東の大勢上洛の事

去程に畿内西國の凶徒。日を追て蜂起する由。六波羅より早馬を立て。關東へ注進せらる。相摸入道大に驚て。さらば討手を差遣はせとて。相摸守の一族。其外東八ケ國の中に。然べき大名共

を催し立て差上さる。先一族には阿曾彈正少弼。名越遠江入道。大佛の前陸奥の守貞直。同き武藏の左近將監。伊具右近大夫將監。陸奥右馬助。外樣の人々には千葉大介。宇都宮三河守。小山の判官。武田伊豆の三郎。小笠原彦五郎。土岐伯耆入道。蘆名判官。三浦若狹の五郎。千田の太郎。城の太宰の大貳入道。佐々木隱岐の前司。同備中守。結城七郎左衛門尉。小田常陸の前司。長崎四郎左衛門尉。同き九郎左衛門尉。長江彌六左衛門尉。長沼駿河守。澁谷遠江守。河越三河入道。工藤次郎左衛門高景。狩野七郎左衛門尉。伊藤常陸の前司。同き大和の入道。安藤藤内左衛門尉。宇佐美摂津前司。二階堂出羽入道。同下野判官。同き當陸介。安保左衛門入道。南部次郎。山城四郎左衛門尉。此等を始として。宗徒の大名百卅二人。都合其勢卅万七千五百餘騎。九月廿日鎌倉を立て。十月八日先隨已に京都に着ば。後陣は未だ足柄箱根に支たり。是のみならず。河野九郎。四國の勢を卒して。大船三百餘艘にて。尼崎より襲て下京に付。厚東入道。大内介。安藝の熊谷。周防長門の兵を引具して。兵船二百餘艘にて。兵庫より襲て。西の京に着。甲斐信濃の源氏。七千餘騎。中山道を經て。東山に着。江馬越前守。淡河右京亮。北陸道七ヶ國の兵を卒して。三万餘騎にて東坂本を經て上京に着。總じて諸國七道の軍勢。我も〳〵と馳上りける間。京白河の家々に居餘り。醍醐。小栗巢。日野勸修寺。嵯峨仁和寺。太泰の邊。西山。北山。賀茂。北野。革堂。河崎。清水。六角堂の門の

下。鐘樓の中迄も。軍勢の宿らぬ所は無りけり。日本小國なりといへ共。是程の人の多かりけりと。始て驚く計なり。去程に元弘三年正月晦日諸國の軍勢。八十万騎を三手に分て。吉野。赤坂。金剛山。三の城へぞ向られける。先吉野へは。二階堂出羽入道道蘊を大將として。態と他の勢を交へず。二万七千餘騎にて。上道中道下道より三手に成て相向ふ。赤坂へは。阿曾彈正少弼を大將として。其勢八万餘騎。先天王寺住吉に陣を張る。金剛山へは。陸奥の右馬助。搦手の大將として。其勢二十万騎。奈良路よりこそ向はれけれ。中にも長崎の惡四郎左衛門尉は。別して侍大將を承つて。大手へ向ひけるが。態己が勢の程を人に知れんとや思けん。一日引さがりて向ひける。其行裝見物の目をぞ驚しける。先旗差。其次に逞き馬に厚總懸て。一樣の鎧着たる兵八百餘騎。二町計先立て〻。馬を靜て打せたり。我身は其次に縅縅の鎧直垂に。精好の大口を張せ紫下濃の鎧に。白星の五枚冑に。八龍を金にて打て付たるを。猪頸に着なし。銀の磨付の臑當に。金作の太刀二振帶て。一部黑とて。五尺三寸有ける。坂東一の。名馬に鹽干潟の捨小舟を。金具に摺たる鞍を置て。山吹色の厚總懸て三十六。差たる。白磨の銀筈の。大中黑の矢に。もと重藤の弓の眞中握て。小路を狹しと歩ませたり。片小手に腹當して。諸具足したる中間五百餘人。二行に列を引。馬の前後に隨て。閑に路次をぞ歩みける。其後四五町引さがりて。思ひ〳〵に

鎧たる兵十万餘騎。胄の星を輝かし。鎧の袖を重て。沓の子を打たるが如くに道五六里が程支たり。其勢決然として。天地を響かし。山川を動す計なり。此外々様の大名。五千騎。三千騎引分〳〵晝夜十三日迄。引も切でゞ向ひける。我朝は申に及ばず。唐土天竺大元南蠻も。未是程の大軍を發す事。有難かりし事なりと。思はぬ人こそはなかりけれ

○赤坂合戦の事付人見本間拔懸の事

去程に。赤坂の城へ。向ひける大將。阿曾彈正少弼後陣の勢を待調へんが爲に。天王寺に兩日逗留有て。同二月二日午の刻に矢合有べし。拔懸の輩に於ては。罪科たるべきの由をゞ觸られける。爰に武藏の國の住人に。人見四郎入道恩阿と云者あり。此恩阿本間九郎貪眞に向て語りけるは。御方の軍勢雲霞の如くなれば敵陣を責落さん事疑ひなし。但し事の様を案ずるに。關東天下を治て權を執事已に七代に餘れり。天道盈るを缺理逃るゝ處なし。其上臣として君を流し奉る。積惡。豈果して其身を滅さゞらんや。某不肖の身なりといへ共。武恩を蒙て。齡已に七旬に餘れり。今日より後差たる思出もなき身の。漫に長生して武運の傾かんを見んも。老後の恨み臨終の障共成ぬべければ。明日の合戰に先懸して。一番に討死して。其名を末代に殘さんと存るなり。と語りければ本間九郎。心中には實もと思ながら。枝葉の事を宣ふもの哉。是程打圍の

軍に。漫なる先懸して。討死したる共。差て高名共云れまじ。されば只某は。人並に振舞べきなりと云ければ。人見よにも無興氣にて。本堂の方へ行けるを。本間怪み思ふて。人を付て見せければ。矢立を取出して。石の鳥井に。何事とい知ず一筆書付て。己が宿所へゞ歸りける。本間九郎されば社此者は。一定明日先懸せられぬと。心ゆるし無りければ。まだ宵より打立て。只一騎東條を指て向ひけり。石川河原にて夜を明すに。霧霧の晴間より。南の方を見ければ。紺の唐綾威の鎧に。白母衣懸て。鹿毛なる馬に乘たる武者一騎赤坂の城へゞ向ひける。何者やらんと馬打寄て是を見れば。人見四郎入道なりけり。人見本間を見付て云けるい。昨夜宣ひし事を。實と思なば。孫程の人に。出拔れあまし物をと。打笑てゞ頻りに馬を早めける。本間跡に付て。今は互に先を爭ひ申に及ばず。一所にて尸を晒し。冥土迄も。同道申さんずるぞよと云ければ。人見申には及ばんと返事して。跡に成先に成。物語して打けるが。赤坂の城近く成ければ。二人の者共。馬の鼻を双て懸襄り。堀の際迄打寄て。鐙踏張弓杖突て。大音聲を揚て。あのりけるい武藏國の住人に。人見四郎入道恩阿。年積て七十三。相摸の國の住人。本間九郎貪眞。生年卅七。鎌倉を出しより。軍の先陣を懸て。尸を戰場に晒さん事を存じて相向へり。我と思はん人々は。出合て手あみの程を御覽せよと。聲々に呼て。城を睨で磬たり。城中の者共是をみて。是ゞとよ

坂東武者の風情とゝ。只是熊谷平山が。一谷の先懸を傳へ聞て羨しく思へる者共なり。跡を見に續く武者もおし。又さまで大名共見へず。溢れ者の不敵武者に跳り合て。命失て何かせん。徒置て。事の樣を見よとて。東西鳴を靜めて返事もせず。人見腹を立て早旦より向て名乘れば。城中より矢の一っをも射出さぬは。臆病の至りか。敵を侮るか。いで其義ならは。手柄の程を見せんとて。馬より。飛下て。堀の上成細橋。さら〳〵と走りたり。二人の者共。出し屏の脇に引傍て。木戸を切落さんとしける間。城中是に騒で。土小間櫓の上より。雨の降が如くに射ける矢二人の者共が鎧に。箕毛の如くにゞ立たりける。本間も人見も。元來打死せんと。思立たる事おれば。何かゝ一足も引べき。命を限りに。二人共に一所にて討れけり。是迄付從ふて最後の十念勸めける聖。二人が首を乞得て天王寺に持て歸り。本間が子息源内兵衛資忠に。始よりの有樣を語る。資忠父が首を一目見て。一言をも出さず。只涙に咽でゐたりけるが。如何思けん。鎧を肩に投懸。馬に鞍置て。只一人打出んとす。聖怪み思て。鎧の袖を引留め。是いそもいか成事にて候ゞ。御親父も此合戰に先懸して。只名を天下の人に。知れんと計思召ば。父子共に打連て社向はせ給ふべけれ共。命をば。相摸殿に奉り。恩賞をば子孫の榮花に貽さんと思召ける故にこそ人より先に討死をばし給ふらめ。然るに思ひ籠給へる處もおく。又敵陣に懸入て。父子共に討死

し給ひなば。誰か其跡を續。誰か其恩賞を蒙るべき。子孫無窮に榮るを以て。父祖の孝行を呈す道とは申也。御悲歎の餘りに。是非なく死を共にせんと。思召は理りなれ共。暫く止らせ給へと。堅く制しければ。資忠涙を押へて。力おく着たる鎧を脫置たり。聖扨は制止に拘りぬと嬉しく思て。本間が首を小袖に裹。葬禮の爲に側成野邊へ越ける其間に。資忠今は止べき人なければ。則打出て。先上宮太子の御前に參り。今生の榮耀は。今日を限の命なれば。祈る所に非ず。只大悲弘誓の誠あらば。父にて候者の。討死仕候し戰場の。同じ苔の下に埋れて。九品安養の同臺に生るゝ身とおさせ給へと。泣々祈念を凝して。涙と共に立出けり。石の鳥居を過ると見れは。我父と共に討死しける。人見四郎入道が。書付たる歌あり。是を誠に後の世迄の物語りに。留むべき事よと思ければ。右の小指を食切て。其血を以て一首を側に書添て赤坂の城へぞ向ひける。城近く成ぬる所にて。馬より下。弓を脇に挾で。木戸を叩き。城中の人々に申べき事有と呼りけり。良暫く有て。兵二人櫓の小間より。顏を指出して誰人にて御渡り候やと問ければ。是は今朝此城に向て。打死して候ひつる。本間九郎資貞が嫡子。源内兵衛資忠と申者にて候なり。人の親の子を思ふ哀み。心の闇に迷ふ習にて候間。共に討死せん事を悲しみて。我に知せずして。只一人討死しけるにて候。相伴ふ者なくて。中有の途に迷ふらん。さてろと思ひ遣れ候へば。同く討死仕

て。なき跡迄父に孝道を盡し候ばやと存じて。只一騎相向て候なり。城の大將に此由を申され候て。木戸を開かれ候へ。父が討死の所にて。同く命を止て。其望みを達し候はんと。懇懃に事を請。泪に咽でぞ立たりける。一の木戸を堅めたる兵五十餘人。其志孝行にして。相向ふ所。やさしく哀なるを感じて。則木戸を開き。逆茂木を引のけしかば。資忠馬に打乗。城中へ懸入て。五十餘人の敵と火を散してぞ切合ける。遂に父が討れし跡にて。太刀を口に呀へて覆しに倒て。貫れて社失にけれ。惜いかな。父の資貞は。無双の弓矢取にて。國の爲に要須たり。又子息資忠は。たゆしなき忠孝の勇士にて。家の爲に榮名有。人見は年老齡傾きぬれ共。義を知て。命を思ふ事。時と共に消息す。此三人同時に討死しぬと聞へければ。知も知ぬも押なへて。歎かぬ人はあかりけり。既に先懸の兵共拔々に赤坂の城へ向ひ。討死する由披露有ければ。大將則ち。天王寺を打立て。馳向ひけるが。上宮太子の御前にて。馬より下り。石の鳥居を見給へば。左の柱に

花咲ぬ老木の櫻朽ぬ共其名い苔の下に隱れじ

と一首の歌を書付て。其次に武藏國の住人。人見四郎恩阿。生年七十三。正慶二年二月二日。赤坂の城へ向て。武恩を報せん爲に。討死仕り候とぞ書たりける。又右の柱を見れば

待しゞし子を思闇に迷ふらん六の街の道しるべせん

と書て。相摸の國の住人。本間九郎資貞が嫡子源内兵衛資忠。生年十八歳。正慶二年仲春二日。父が自害を枕にして。同じ戰場に。命を止め畢ぬとぞ書たりけり。父子の恩義君臣の忠貞。此二首の歌に顯はれて。骨は化して黄壤一堆の下に。朽ぬれど。名は留て。青雲九天の上に高し。されば。今に至る迄石碑の上に消殘れる。卅一字を見る人。感涙を流さぬはあかりけり。去程に阿曾彈正少弼。八万餘騎の勢を率して。赤坂へ押寄。城の四方廿餘町。雲霞の如くに取卷て。先時の聲をぞ揚たりける。其音山を動し。地を震に蒼涯も忽ちに裂つべし。此城三方い岸高うして。屏風を立たるが如し。南の方計社。平地に續て。堀を廣く深く堀切て。岸の額に。屏を塗り。其上に櫓を搔双べたれば。如何あるる大力早態成共。輙く責べき樣ぞあき。されば寄手大勢なれば。只侮て循にはづれ。矢面に進で。堀の中へ走下て。切岸を襄らんとしける所を屏の内より。究竟の射手共。鏃を支て思樣に射ける間。軍の度毎に。手負死人五百人。六百人射出されざる時は無りけり。是をも痛ず。荒手を入かへ〳〵。十三日迄ぞ責たりける。去共城中少しも弱らず見へけり。爰に播摩國の住人。吉川の八郎と云者。大將の前に來て申けるい。此城の躰たらく。力責にし候はゞ。さうなく落べからず候。猶此一兩年が間。和泉河内を管領して。若干の兵粮を取入

て候なれば。兵粮もさうなく盡候まじ。倩思案を廻し候に。此城三方は。谷深うして地に繼かず。一方は平地にて。しかも山遠く隔れり。されば何くに水有べし共見へぬに。火矢を射れば水彈にて打消候。此比は雨のふる事も候いぬに。是程迄水の澤山に候は。いか樣南の山の奥より。地の底に樋を伏。城中へ水を懸入るゝかと覺へ候。天晴人夫を集て。山の腰を堀切せて。御覽候へかしと申ければ。大將實もとて。人夫を集め。城へ續きたる山の尾を。一文字に堀切て見れば。安の如く。土の底に。二丈餘りの下に。樋を伏て。側に石を疊み。上に眞木の瓦を覆て。水を十町餘りの外よりぞ懸たりける。此揚水を留られて後。城中に水乏しく去て。軍勢口中の渴忍び難ければ。四五日が程は。草葉に留る朝の露をなめ。夜氣に潤へる地に身を當て。雨を待けれ共雨降ず。寄手是に利を得て。隙あく火矢を射ける間。大手の櫓二つをば燒落しぬ。城中の兵。水を飲で十二日に成ければ。今は糧力盡果て防ぐべき方便も無りけり。死たる者は。再び歸る事なし。誘や迎も。死あんずる命を。各力の未落ぬ先に打出で。敵と差違へ。思ふ樣討死せんと。城の戸を開て。同時に打出んとしけるを。城の本人。平野將監入道。高櫓より走下り。袖を扣て云いるは。暫く楚忽の事なし給ふな。今は是程に力盡困乾て。疲ぬれば。思ふ敵に相逢ん事有がたし。名もなき人の。中間下部共に。虜れて。恥を晒さん事心憂るべし。倩事の樣を案ずるに。芳

野金剛山の城。未相支て勝負を決せず。西國の亂未靜まらざるに。今降人に成て出たらん者をば。人に見こらせじとて。討事有べからずと存る也。迚も叶はぬ我等なれば。暫く事を謀て。降人に成。命を全して。時至らん事を待べしと云ば。諸卒皆此義に同じて。其日の討死をば止てけり。去程に次日。軍の最中に平野入道高櫓に上て。大將の御方へ申べき子細候。暫く合戰を止て。聞召候へと云ければ。大將澁谷十郎を以て。事の樣を尋るに。平野木戸口に出合て。楠和泉河内の兩國を平げて。威を振ひ候ひし刻に。一旦の難を遁れんが爲に。心あらず御敵に屬し候き。此子細京都に參じ候て。申入候はんと仕り候處に。已に大勢を以て押掛られ申候間。弓矢取身の習ひにて候へば。一矢仕りたるにて候。其罪科をだに御免有べきにて候はゞ。頸を伸て降人に參るべく候。若叶まじきとの御定にて候はゞ。力なく一矢仕て戸を陣中に晒べきにて候。此樣を具に申され候へと云ければ。大將大に喜で。本領安堵の御敎書をなし。殊に功あらん者には。則恩賞を申沙汰すべき由。返答して。合戰をぞ止ける。城中に籠所の兵。二百八十二人。明日死なんずる命をも知らず。水に渴せる堪がたさに。皆降人に成てぞ出たりける。長崎九郎左衛門尉是を請取て。先降人の法なれば迎。物具太刀刀を奪取。高手小手に禁て。六波羅へぞ渡しける降人の輩此の如くならば。只討死すべかりける物をと。後悔すれ共甲斐なし。日を經て京都に付しか

ば。六波羅に誡置て。合戰の事始なれば。軍神に祭て。人に見懲させよ迚。六條河原に引出し。一人も殘らず首を刎て懸られたり。是を聞てゞ。吉野金剛山に籠たる兵共も。彌獅子のはがみをして。降人に出んと思ふ者はなかりけり。罪を綏うするは。將の謀也と云事を知ざりける。六波羅の成敗を。皆人ごとに押あべて惡かりけりと申せしが。幾程もあらして悉く亡びけるこそ不思議あれ。情は人の爲ならず。餘に奢を極つゝ。我意に任て振舞ば武運も早く盡にけり。因果の道理を知ならば。心有べき事共也

訂正太平記 卷之六 終

訂正太平記 卷之七

○吉野城軍の事

元弘三年正月十六日。二階堂出羽入道道蘊。六万餘騎の勢にて。大塔宮の籠らせ給へる。吉野の城へ押寄る。楽摘河の川淀より。城の方を向上たれば。峯には白旗赤旗錦の旗。深山下風に吹なびかされて。雲か花かと怪まる。麓には。數千の官軍。胄の星を輝かし。鎧の袖を連ねて。錦繡を敷ける地の如し。峯高ふして。道細く。山嶮しして苔滑あり。されば幾十万騎の勢にて責る共。輙く落べしとは見へざりけり。同く十八日の卯刻より。兩陣互に矢合して入替〳〵責戰ふ。官軍は物馴たる案内者共なれば。期の迫り。彼の難所に走散て。攻合開合せ散々に射る。寄手は死生不知の坂東武者なれば。親子討れ共顧ず。主從滅れ共屑共せず。乘越〳〵責近づく夜晝七日が間。息をも續せず相戰に。城中の勢三百餘人討れにけれ。況や矢に當り。石に打れ。生死の際を知ざる者は。幾千万と云數を知ず。血い草芥を染尸は路徑に横れり。されば城の躰少しも弱ねば寄手の兵多くは退屈してゞ見へたりける。爰に此山の案内者にて。一方へ向られたりける。吉野の執行岩菊丸。己れが手の者を呼寄て申けるは。東條の大將金澤右馬助殿は。既に赤坂の城を責落して。金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事。

我等案内者たるに由て。一方を承て向ひたる甲斐もなく。責落さで數日を送事社遺恨なれ。倩事の樣を案るに此城を大手より責ば人のみ討れて落す事有難し。推量するに。城の後の山。金峯山には。嶮を憑で。敵さまで勢を置たる事あらじと覺るぞ物馴たらんずる足輕の兵。六百五十人勝て。歩立になし。夜に紛れて金峯山より忍び入。愛染寶堂の上にて。夜の若々と明はてん時。鯢波を揚よ。城の兵、開音に驚て。度を失はん時。大手搦手三方より責上りて。城を追落し。宮を虜奉るべしとぞ下知しけり。さらばとて案内知たる兵。百五十人を勝て其日の暮程より。金峯山へ廻て。岩を傳ひ谷を上るに。案の如く。山の嶮さを憑みけるにや只此彼の梢に旗計を紐付置て。防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵共。思ひの儘に忍び入て木の下岩の陰に。弓箭を伏て胄を枕にして。夜の明るをぞ待たりける。相圖の比にも成にければ。大手の寄手五万餘騎三方より押寄て攻上る吉野の大衆五百餘人。攻口に下合て防戰。寄手も城の内も。互に命を惜さぬ追上せ追下し火を散してぞ戰たる。斯る所に。金峯山より廻りたる、搦手の兵百五十人。愛染寶堂よりおり下て。在々所々に火を懸て。時の聲をぞ揚たりける。吉野の大衆前後の敵を防ぎ兼て。或い自ら腹を搔切て。猛火の中へ走入て死るも有。或は向ふ敵に引組で。差違へて共に死るも有。思ひ〳〵に討死をしける程に。大手の堀一重は。死人に埋りて平地に成。去程に搦手の

兵。思ひもよらぬ。勝手の明神の前より押寄て。宮の御座有ける。藏王堂へ打て懸りける間。大塔宮今は遁れぬ所なりと思召切て。赤地の錦の鎧直垂に緋威の鎧の。未巳刻計なるを。隙間もなく召れ。龍頭の胄の緒をしめ。三尺五寸の小長刀を。脇に挾み。劣ぬ兵共廿餘人。前後左右に立。敵の鬨て扣へたる中へ走懸り東西を拂ひ。南北へ追廻し。黑煙を立て。切て廻らせ給ふに。寄手大勢なりといへ共僅の小勢に切立られ。木葉の風に散が如く。四方の谷へ颯と引。敵引ば宮は藏王堂の大庭に並居させ給て。大幕打揚て。最後の御酒宴有。宮の御鎧に立所の矢七筋御頰先二の御腕。二ヶ所つかれさせ給て。血の流るゝ事瀧の如し。然れ共立たる矢をも拔給はず。流るゝ血をも拭給はず敷皮の上に立ながら。大盃を三度傾させ給へば。小寺相摸。四尺三寸の太刀の鉾に敵の首を刺貫て。宮の御前に畏り。戈鋌劍戟を降事。雷光の如くあり。磐石岩を飛す事。春の雨に相同じ。然りとはいへ共。天帝の身には近づかで。修羅かれが爲に破るゝと。はやしを揚て舞たる有樣は。漢楚の鴻門に會せし時。楚の項伯と項莊とが。劍を拔て舞しに。樊噲庭に立ながら。惟幕を挑て。項王を睨し勢も。斯やと覺る計なり。大手の合戰急なりと覺へて。敵御方の鬨聲相交て聞へけるが。實も其戰に。自ら相當る事。多かりけると見へて。村上彦四郎義光鎧に立所の矢十六筋。枯野に殘る冬草の風に臥たる如くに折懸て。宮の御前に參て申け